

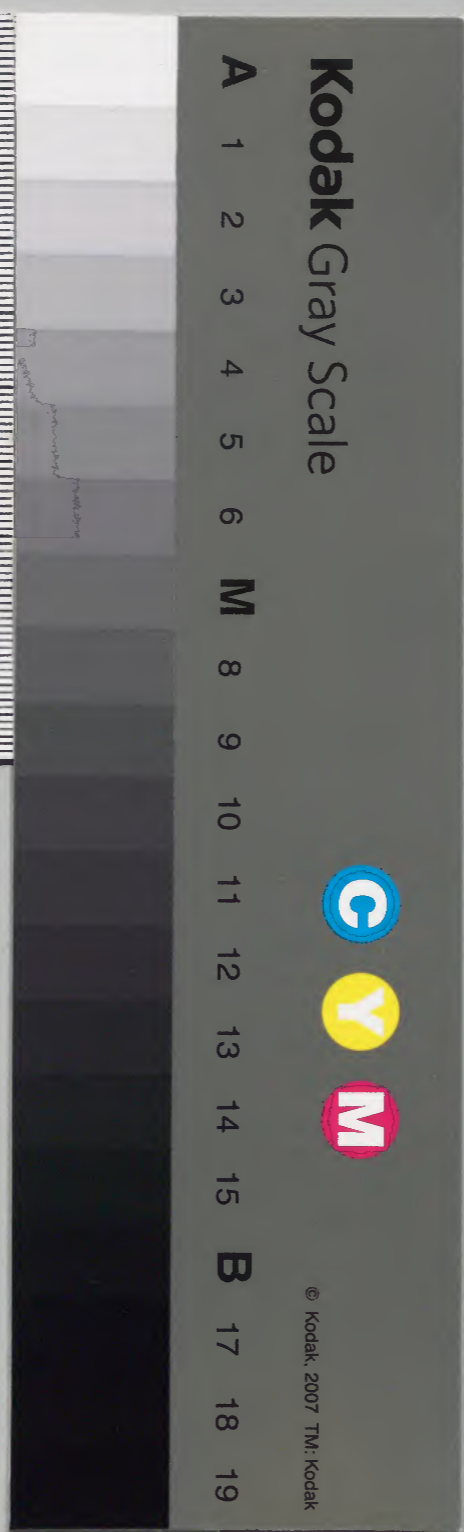
宇津宮流鷹之書

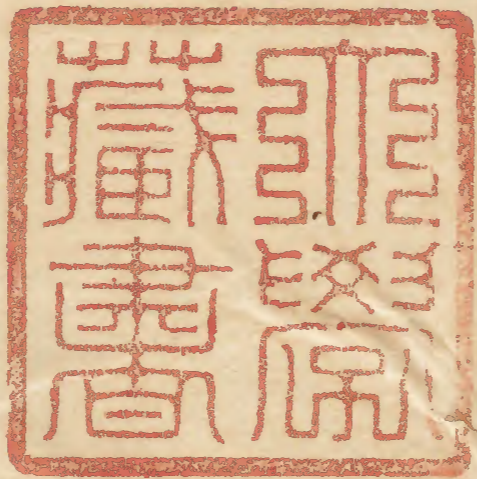
坤

			二	和
			三	書
			四	門
	六	六		
二	五	三	一	
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	內	
五	三	三	一	和
四	四	五	一	書
函				
八	二			
架	冊	號	類	

內閣文庫	
番號	和 23461
冊數	2 (2)
函號	154 338





宗津之流
舊之書

條目

一 卷之數
一 卷之數

已上

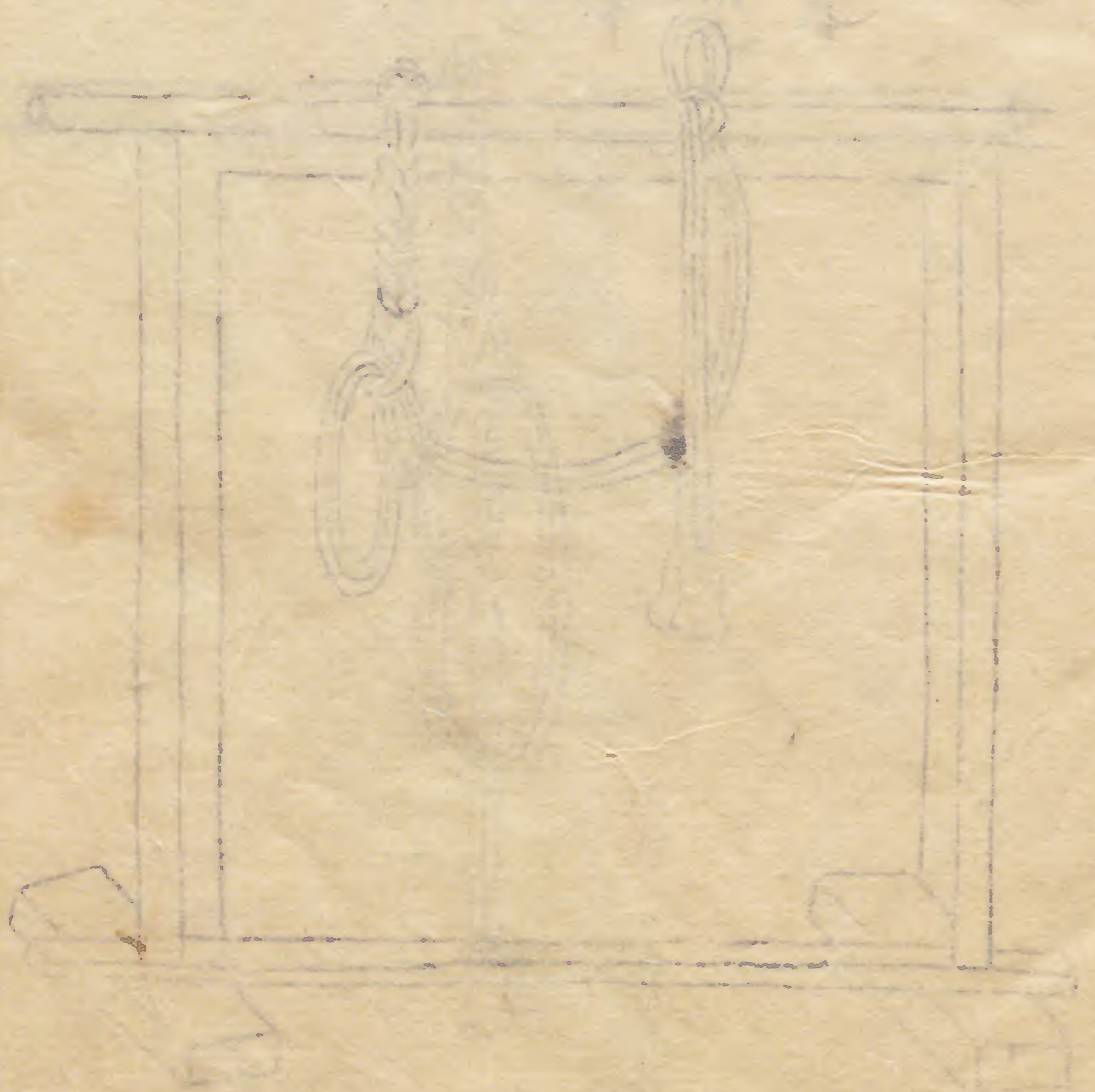


淺草文庫



第六

此係...
...
...



上

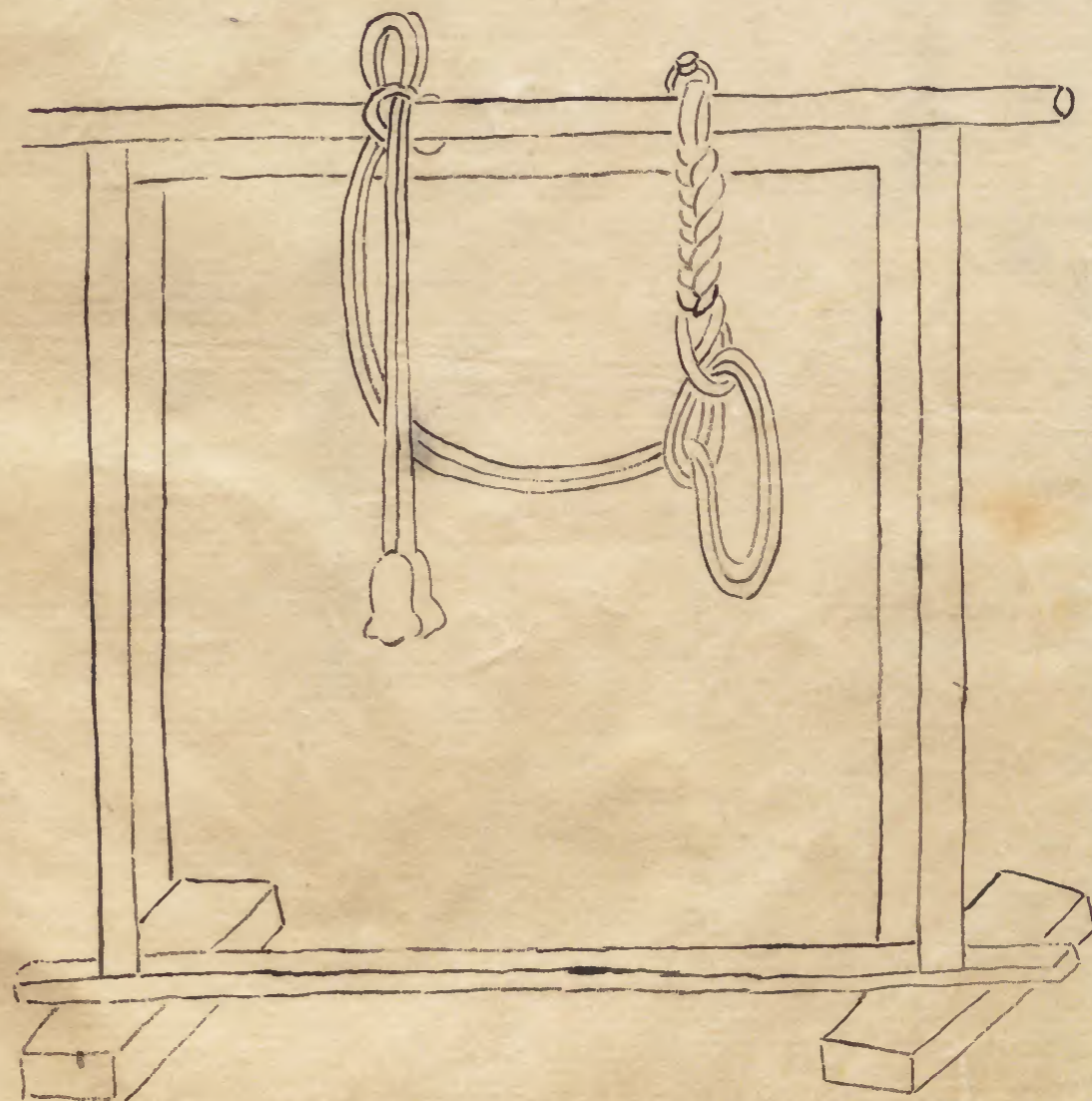
...

...

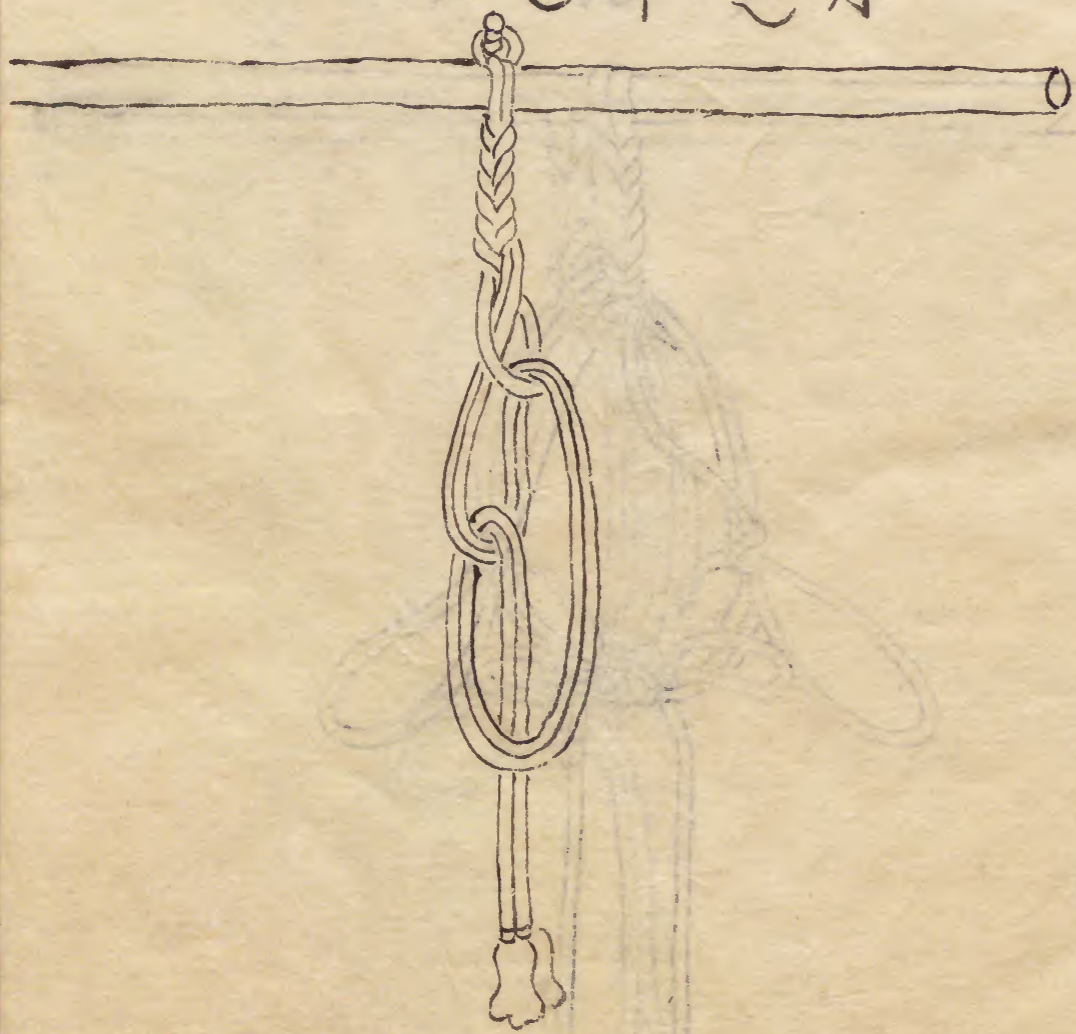
...



此縻様
鶴取^ヲ如
斯縻也



此縻様三月
三日^ニ如斯縻^ニ
亦^ヲモシヨキ分
寄杯^ヲ縻^ニ



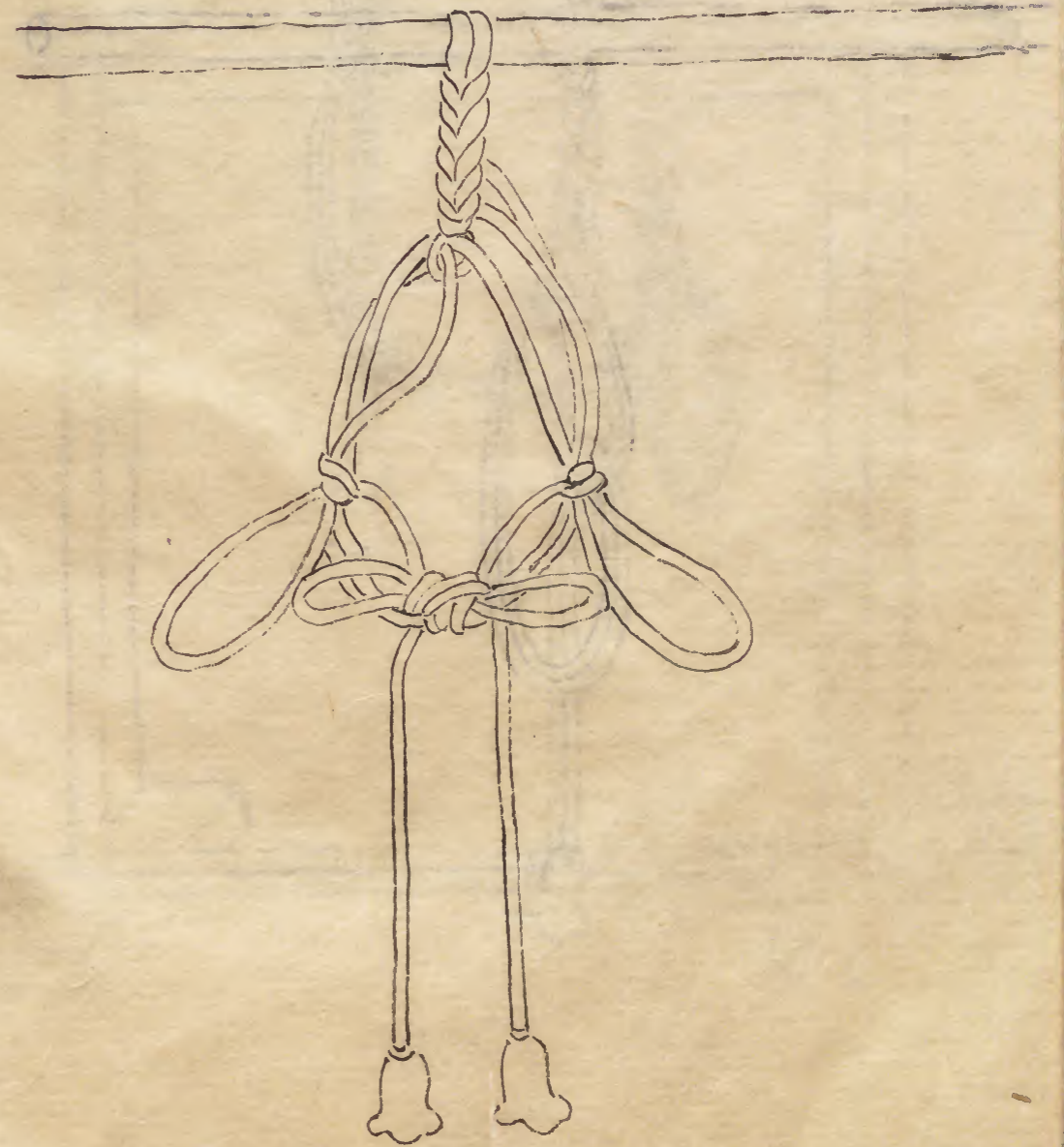
如斯之縲

五月五日ニ縲

大等ノアカ

等ノ時モ如

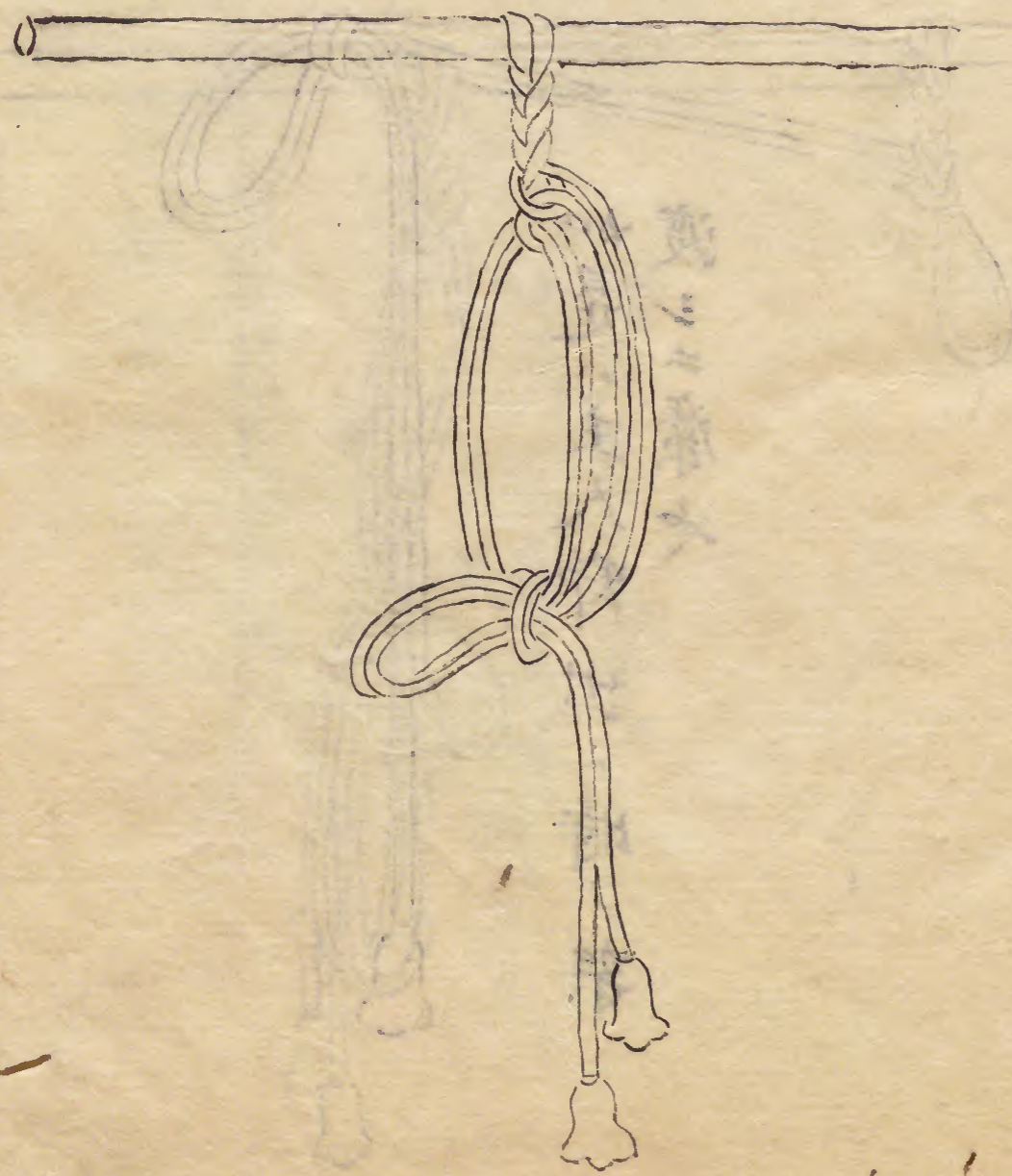
是ツナグ也



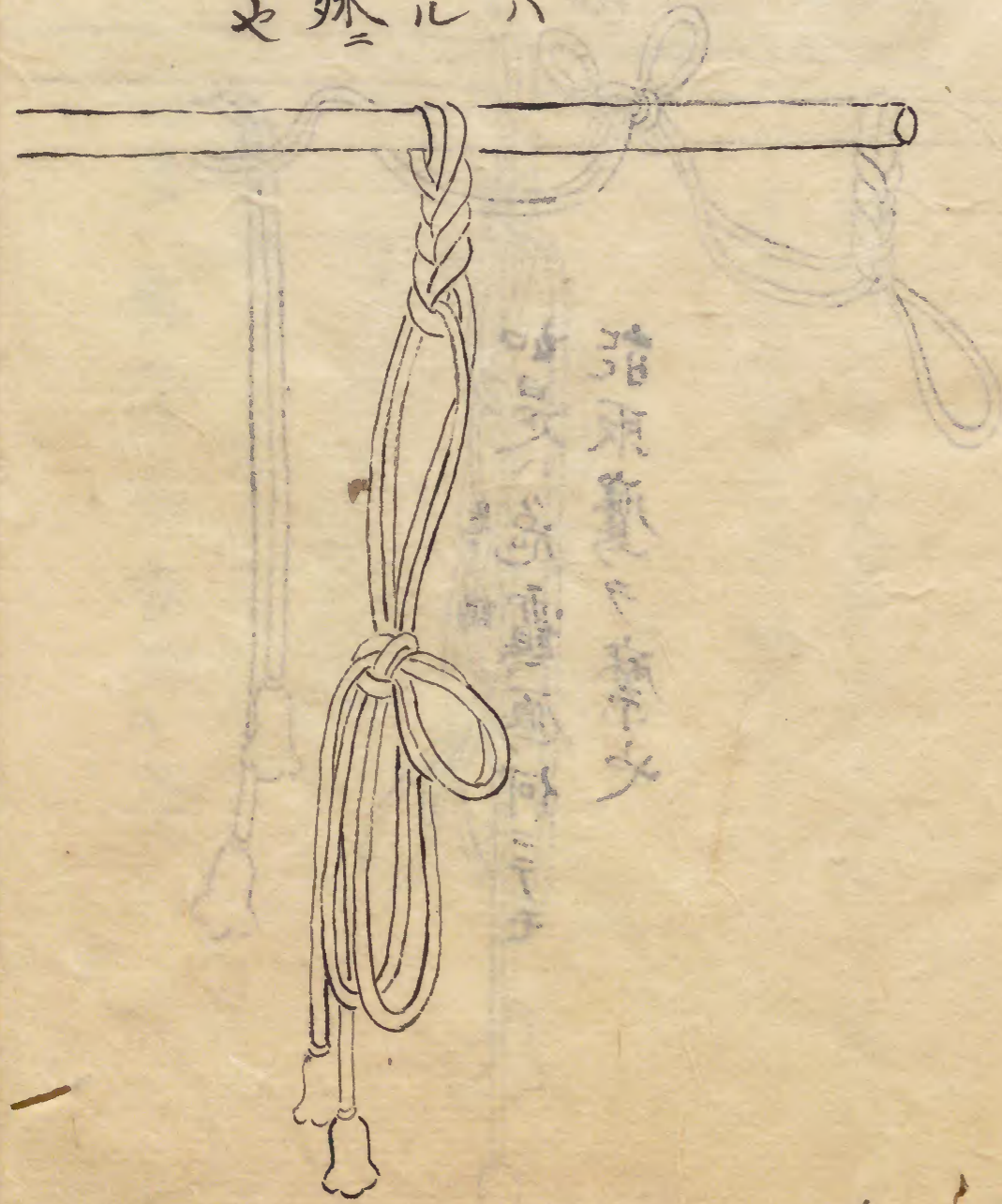
如是ハ屋移ノ

時縲滝落

ト云也

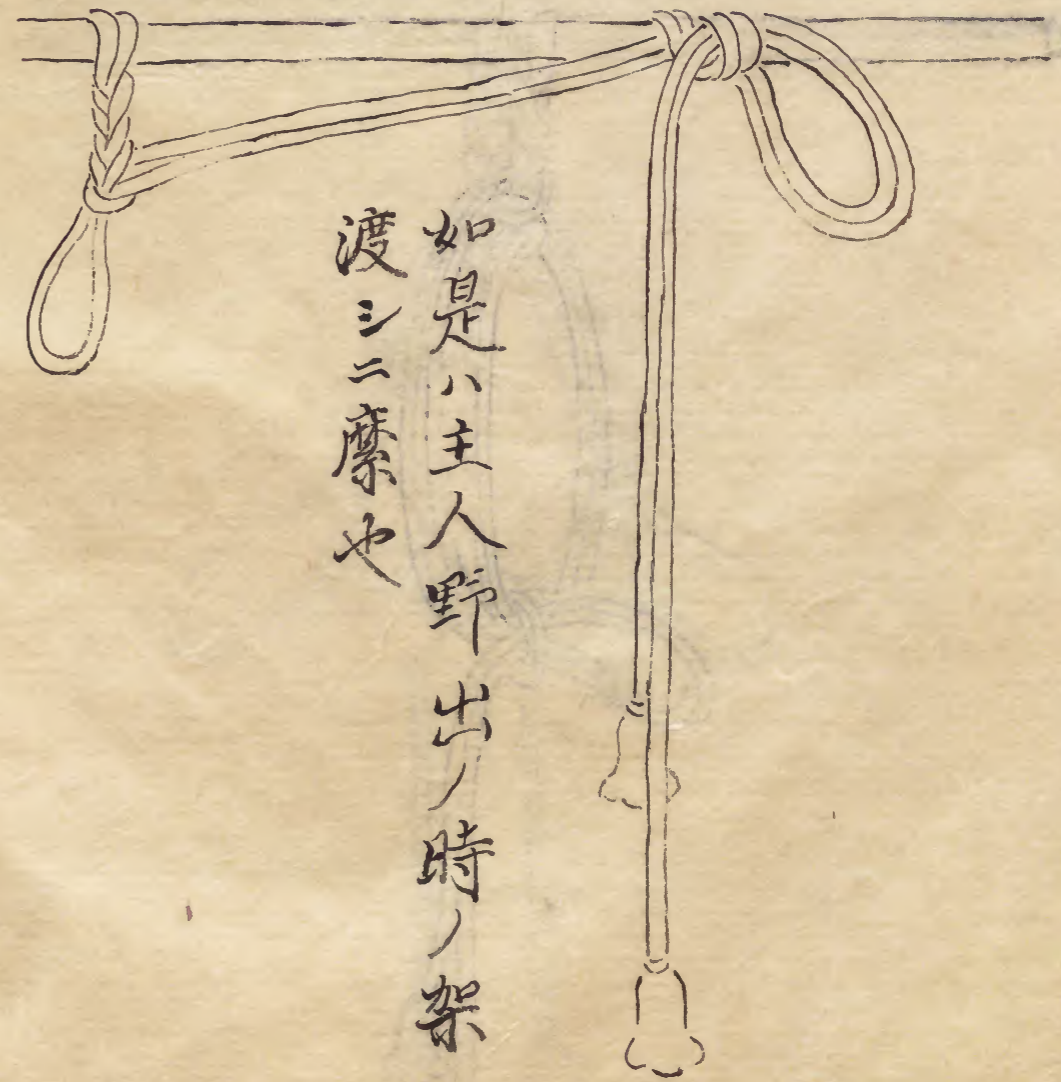


如是之縲ハ
我カクスミタル
響ヲ縲殊ニ
逸物ハ如是也

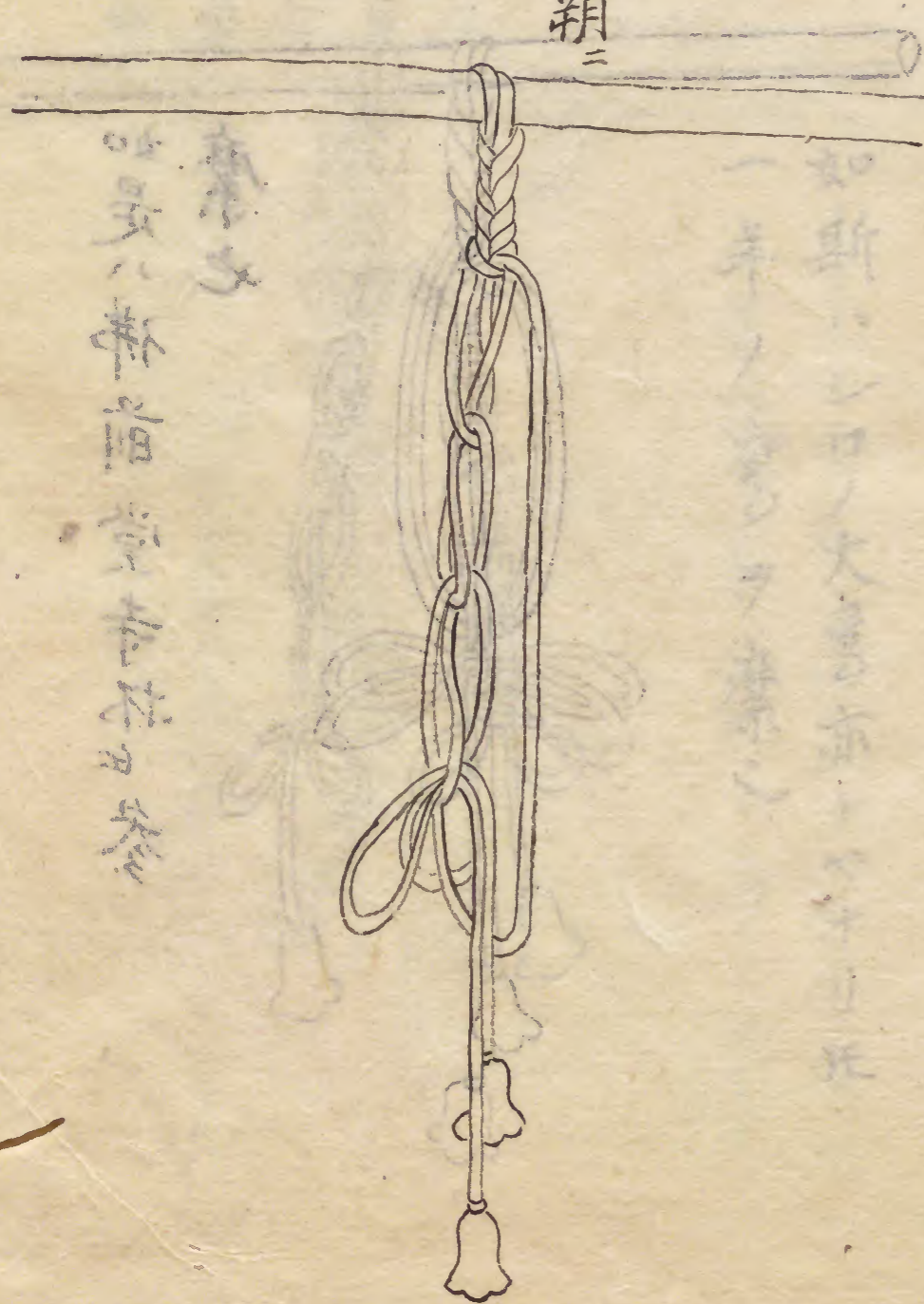


結末ノ縲ハ

如是ハ主人野出ノ時ノ架
渡シニ縲也



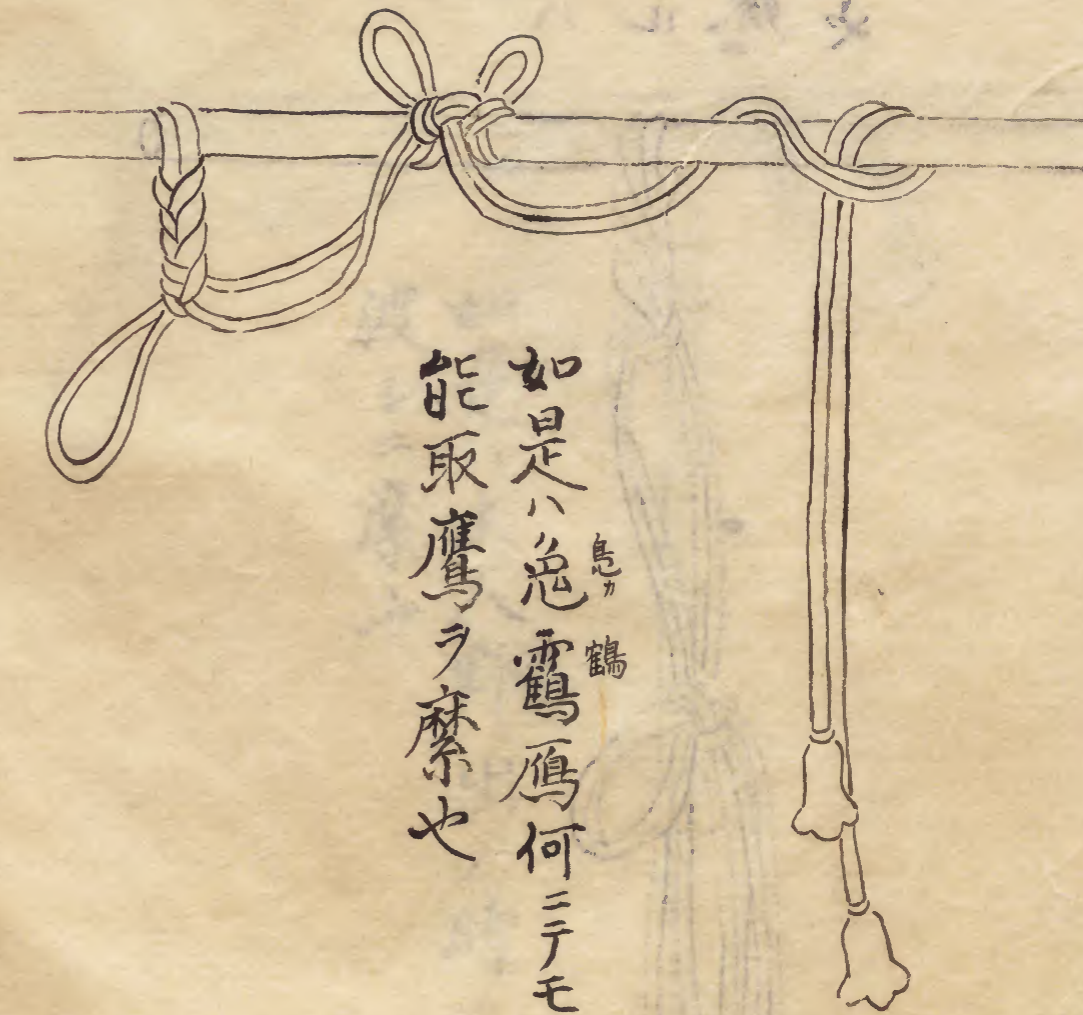
如是八八朔
麻系也



麻系也
如是八八朔
麻系也

如是八八朔
麻系也

如是八兔鳥カ鶴鶴鷹何ニテモ
能取鷹ヲ麻系也



如是八八朔
麻系也

大正
八
年
八
月
八
日



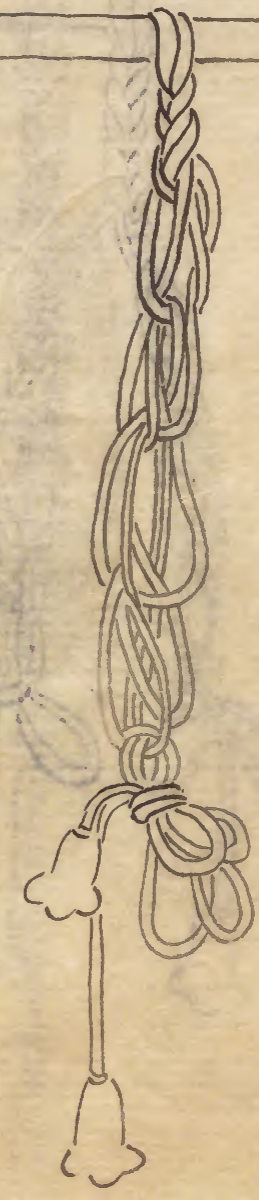
如斯ハシロノ大鸾亦トヤナリ氏
一年ノ鸾ヲ縲ス

大正
八
年
八
月
八
日



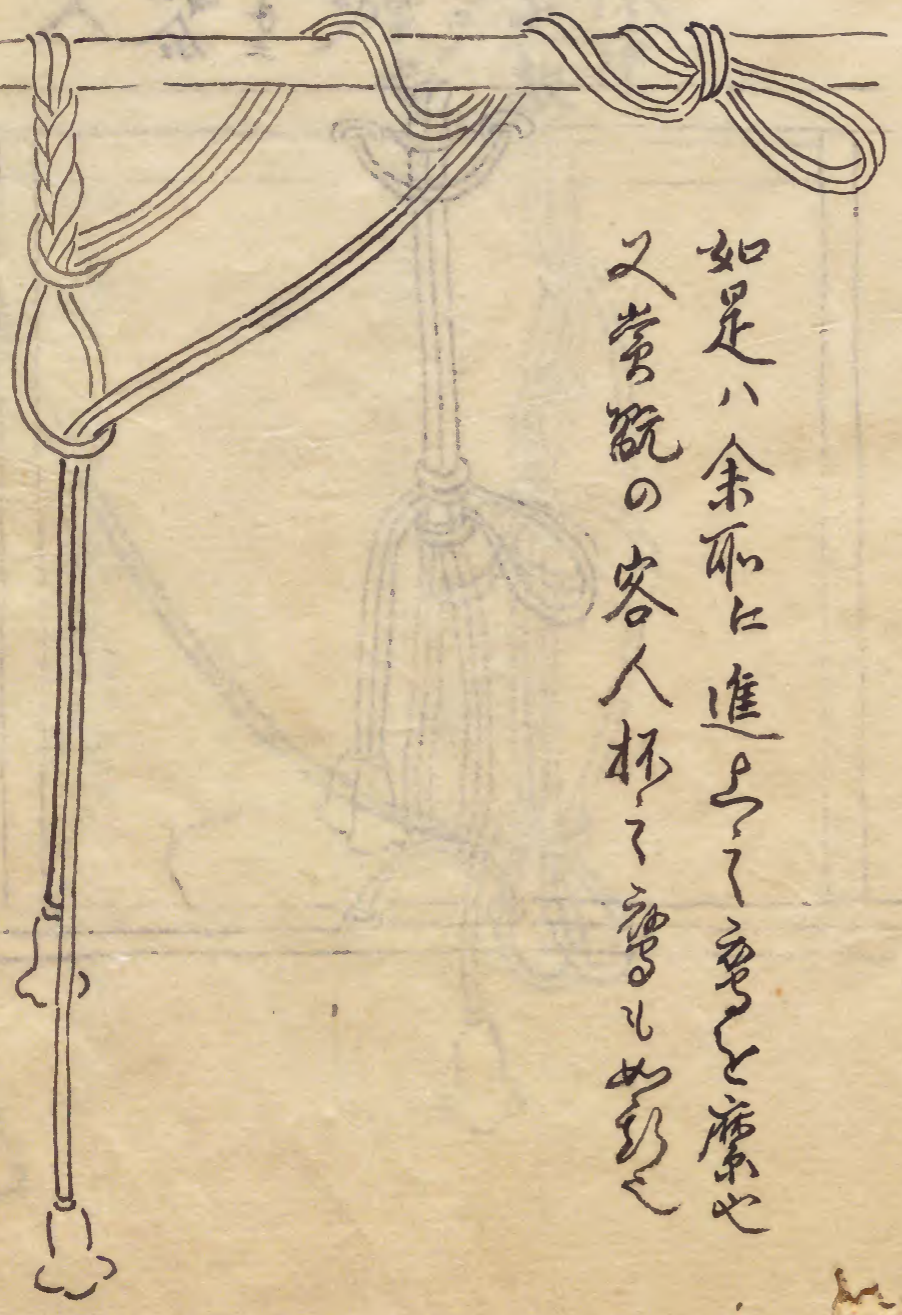
如是ハ佛前堂寺杯也
縲也

如是ハ流
 取ノ大壺
 シ摩亦
 七夕ニ教
 シモ摩也



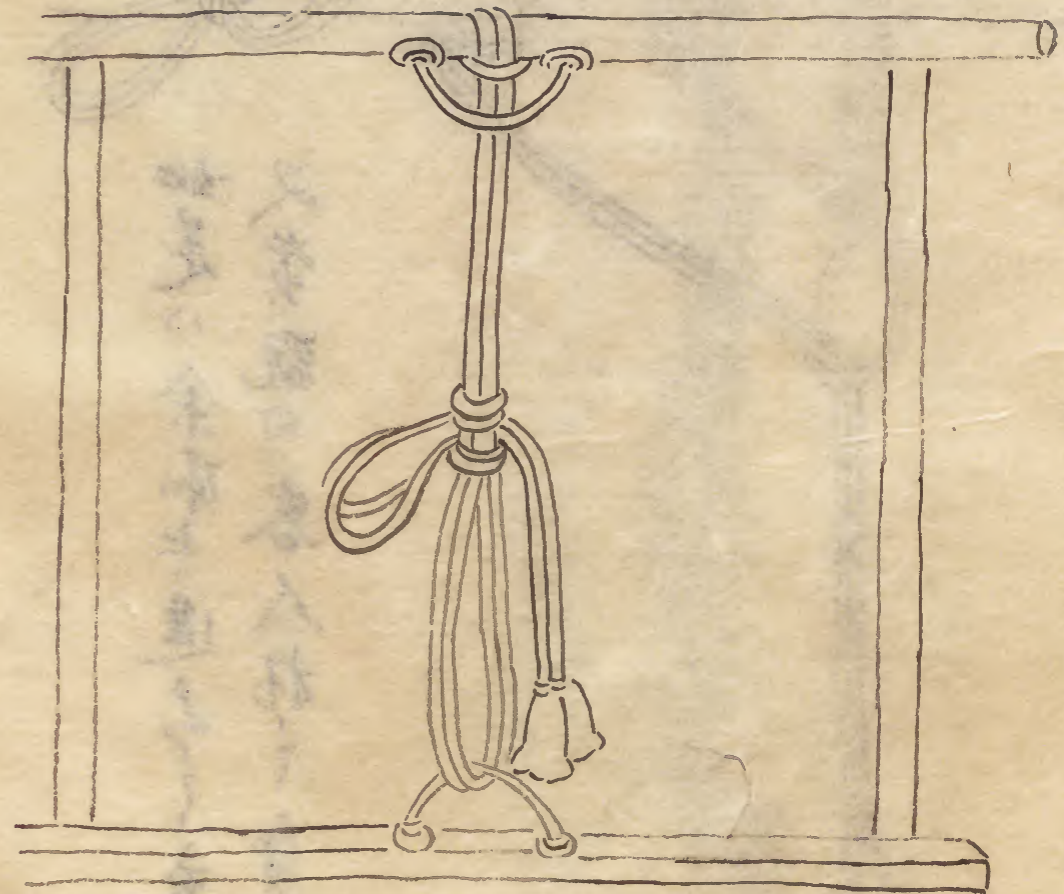
一年ノ...
 此種ハ...

如是ハ余取上進上ノ...
 又常既ノ客人杯ノ...

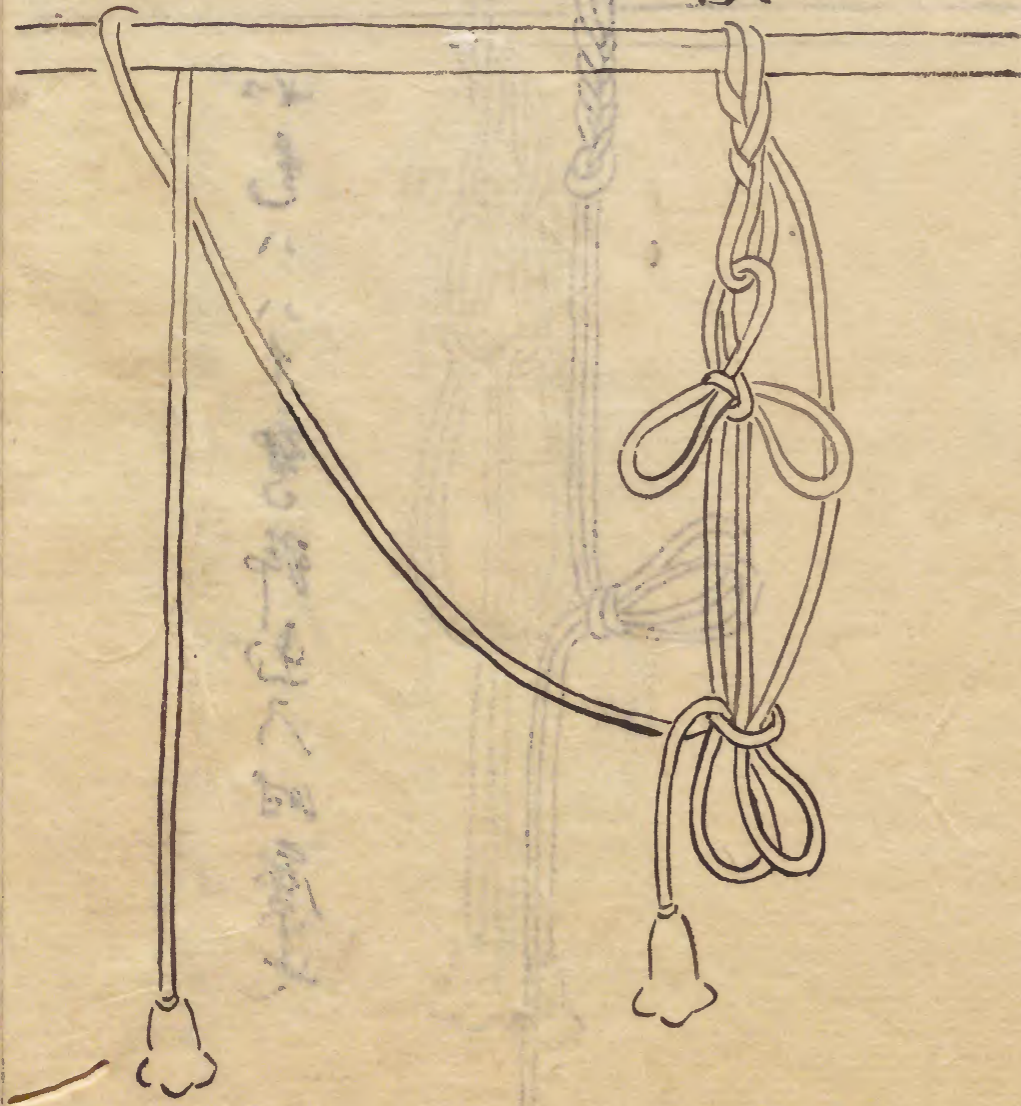


此種ハ...
 又常既ノ...

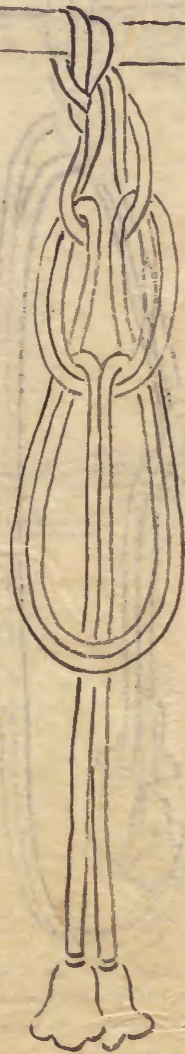
此是八所加入
 摩也天地和合
 トシテ永代子ニ
 宿スト摩也



如此八陳中
 ニテ摩也敵
 ノ方ヘ向テ
 摩也

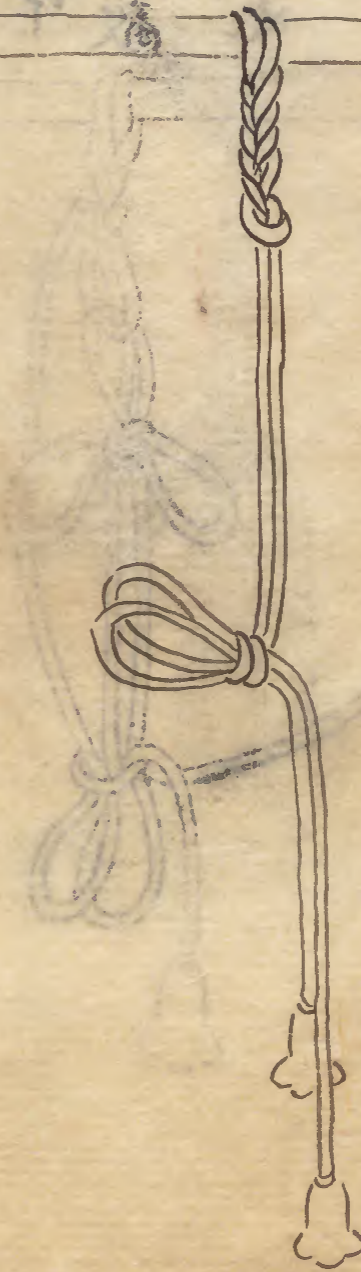


如是ハシホシ
口ヲ草履ニ
縋時可縋
也



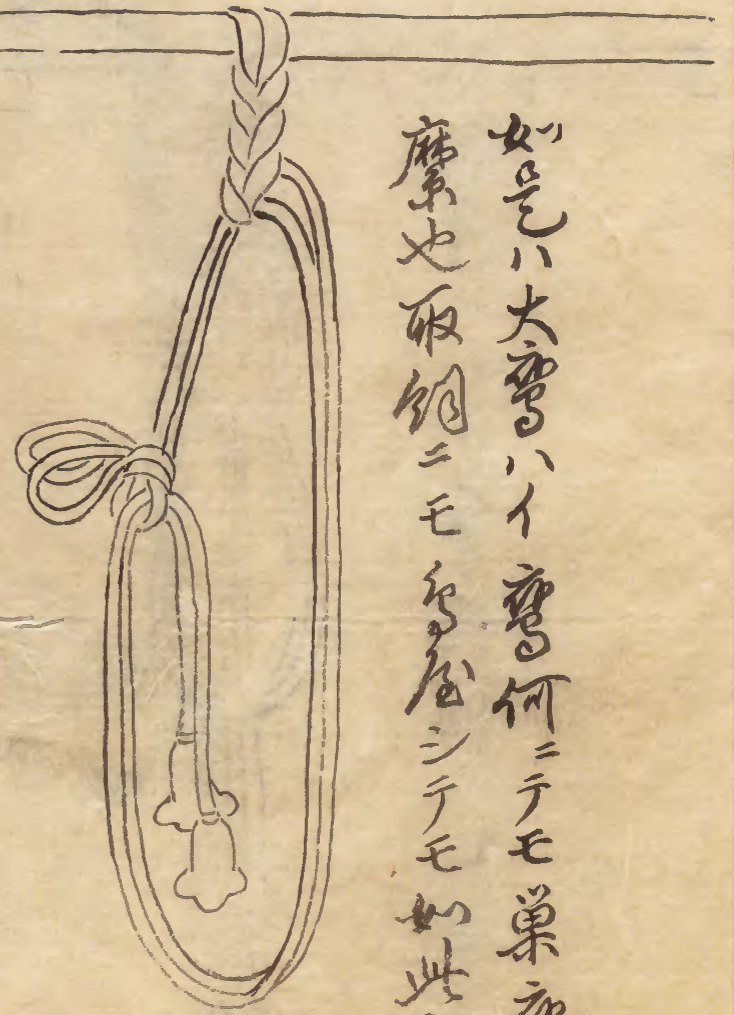
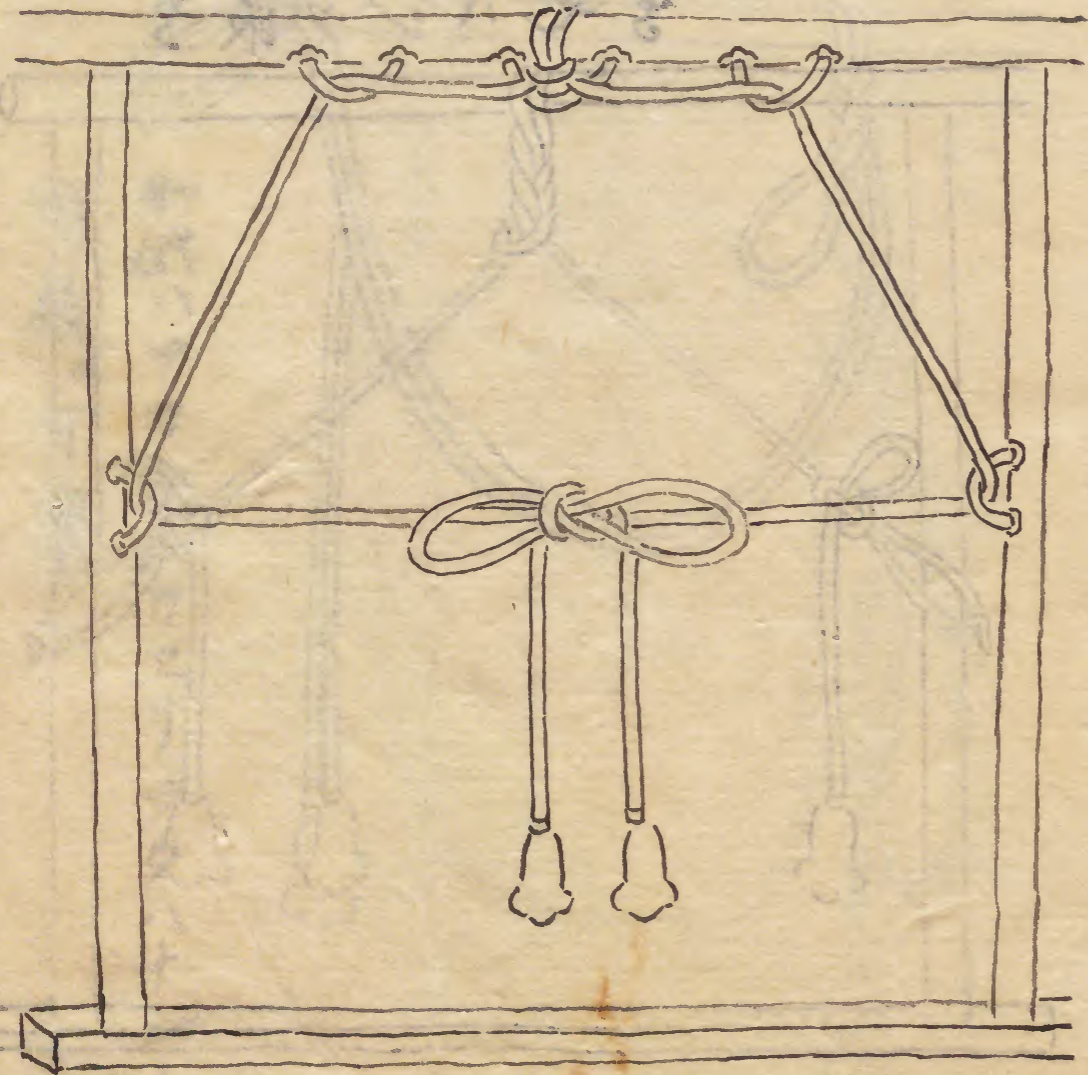
縋時可縋
也

如是ハシホシ
口ヲ草履ニ
縋時可縋
也



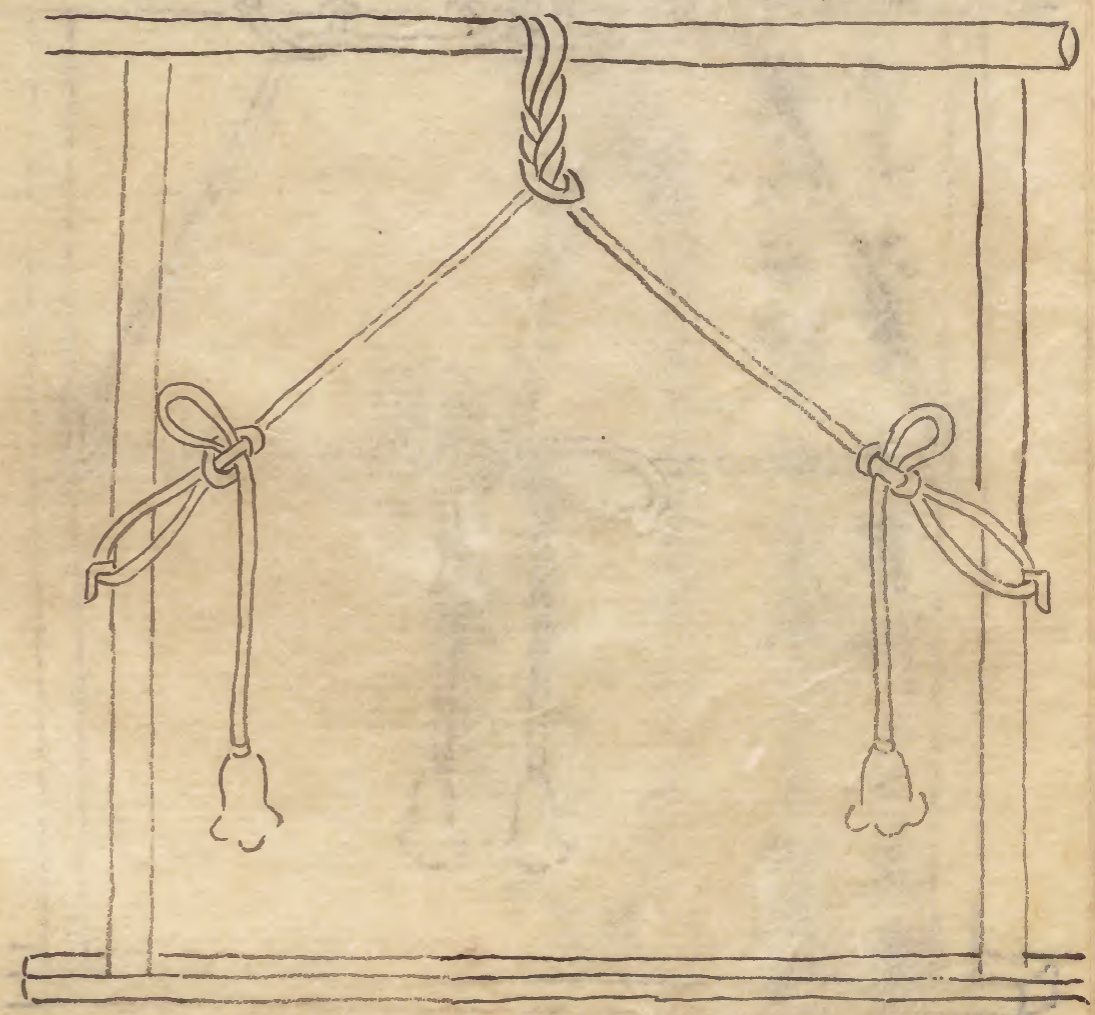
如是ハシホシ
口ヲ草履ニ
縋時可縋
也

如是ハ
 祝詞ニ御前ニ
 何事ニテモハ
 以可摩又
 公方ト上ル
 事モ如新

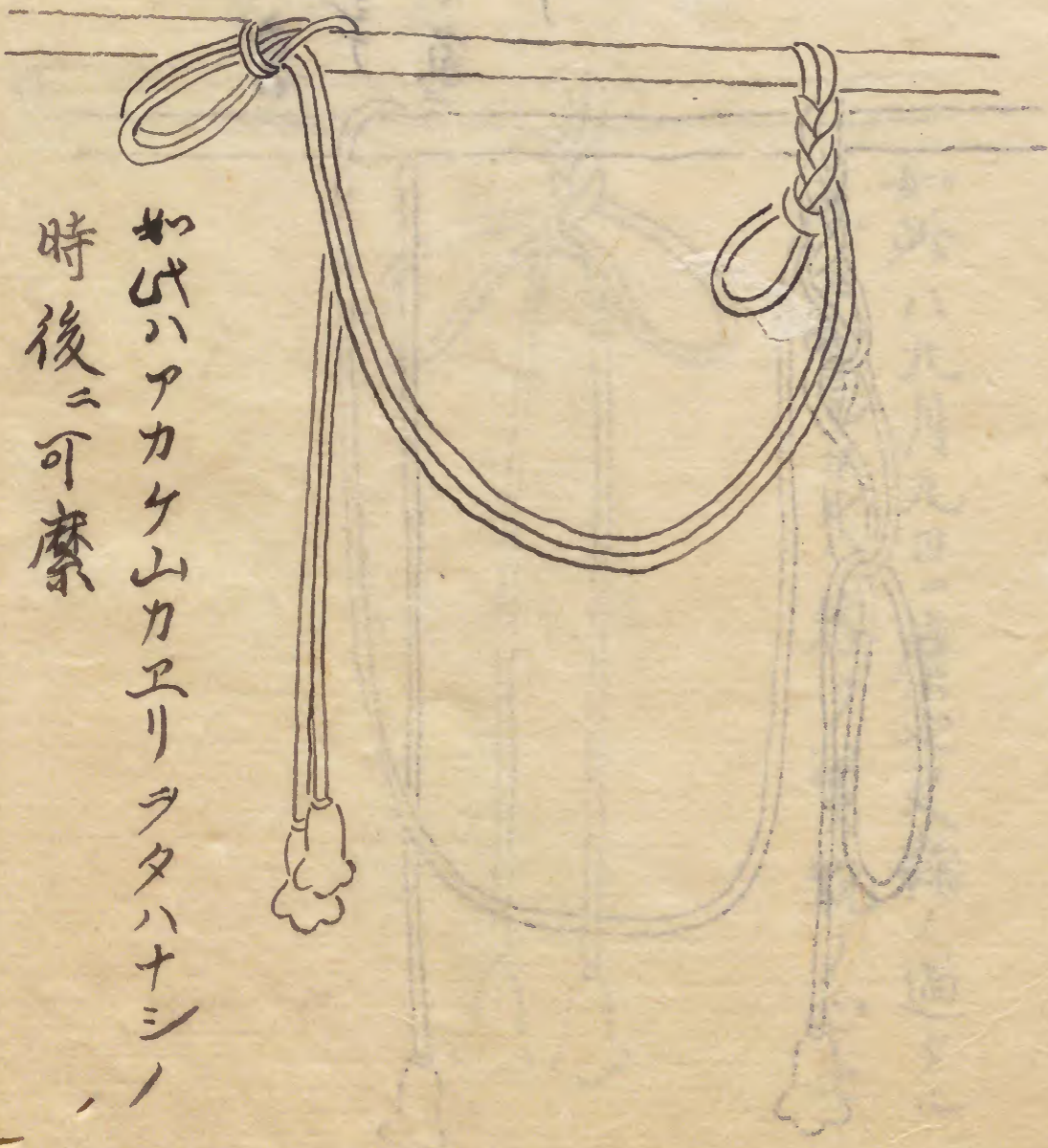


如是ハ大嘗ハイ
 事何ニテモ巢
 事ヲ
 麻也取納ニモ
 事居シテモ
 如此也

如是ハ大幣
 ノシロヲ公取
 銅ヲ使時ツ
 ナシサナシ
 テ麻ケハ
 得アタル也
 又神馬
 毛如也

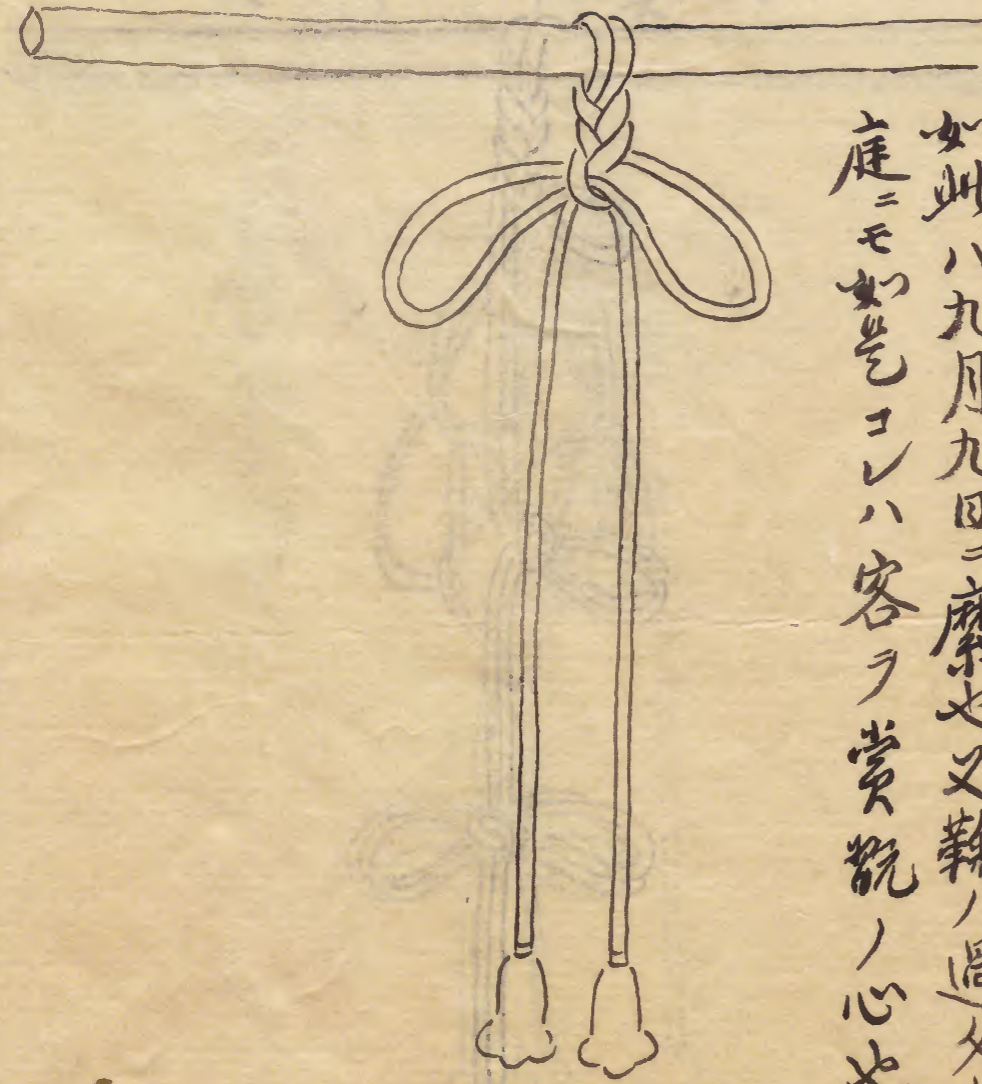


如シハアカケ山カエリヲタハナシノ
 時後ニ可縻



縻ノ大ニ
 縻ノ大ニ
 縻ノ大ニ

風月記
 卷之八
 九月九日



如此ハ九月九日ニ縻也又鞠ノ過タル
 庭ニモ如是コレハ客ヲ賞覧ノ心也

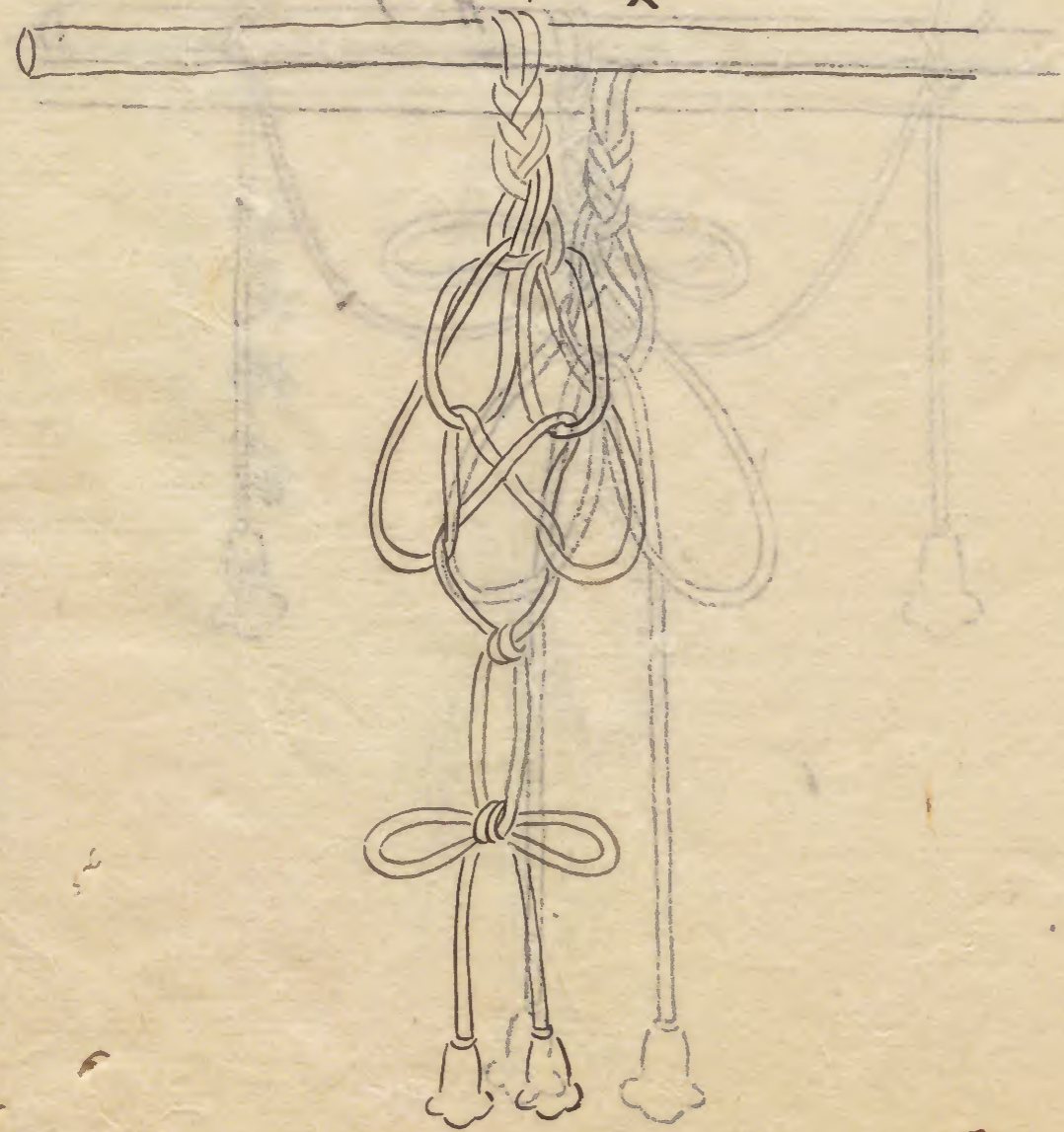
如是ハ主人ノ意
 フ居テ供ヲシテ
 親類カ我カ家ニ
 縻トキナリ



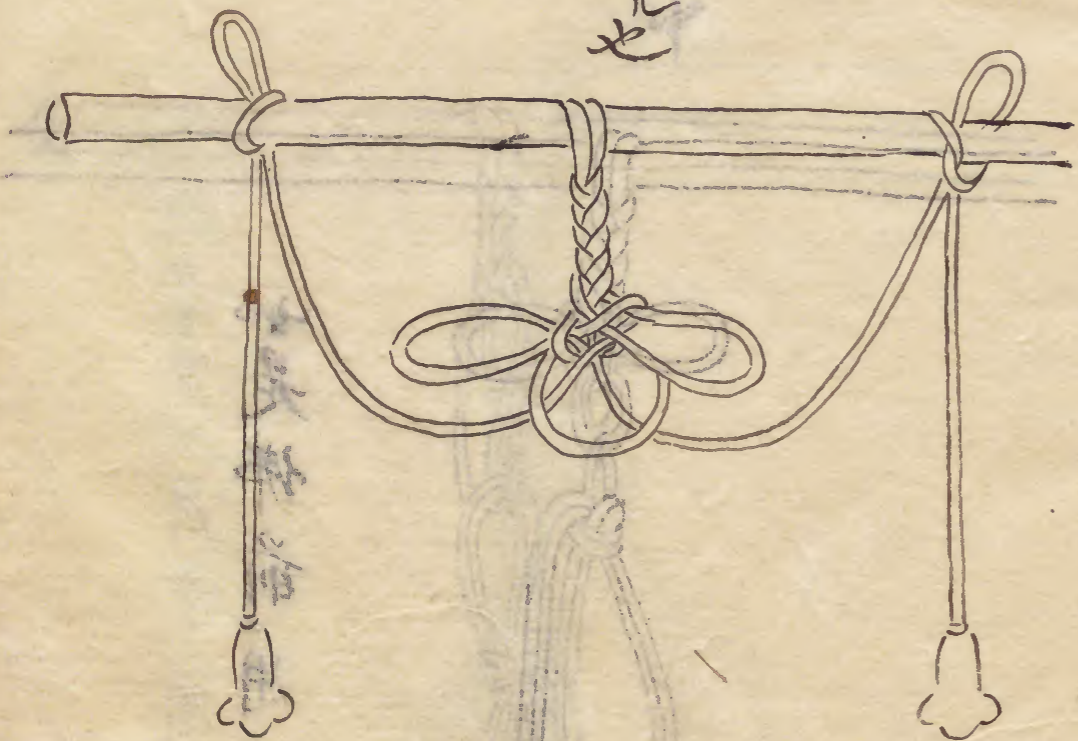
如此ハ三月三日
間用又物ノ初
ヲスル時モ用也



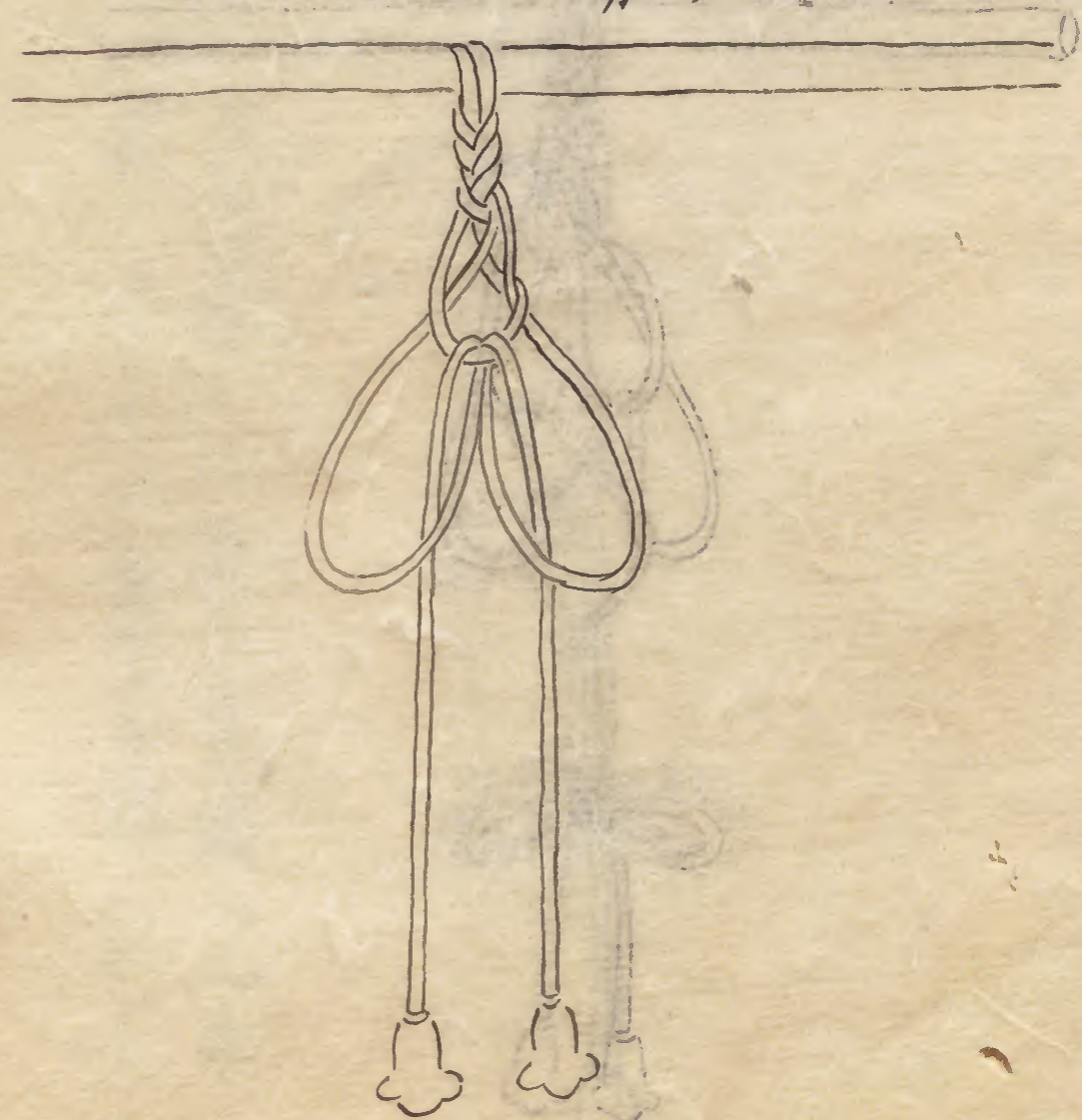
如引ハ藤丸ヲ
陳中ニ縻二月
初卯ノ時モ又具
是ノ餅祝ハ丸
敷ニモ如是也



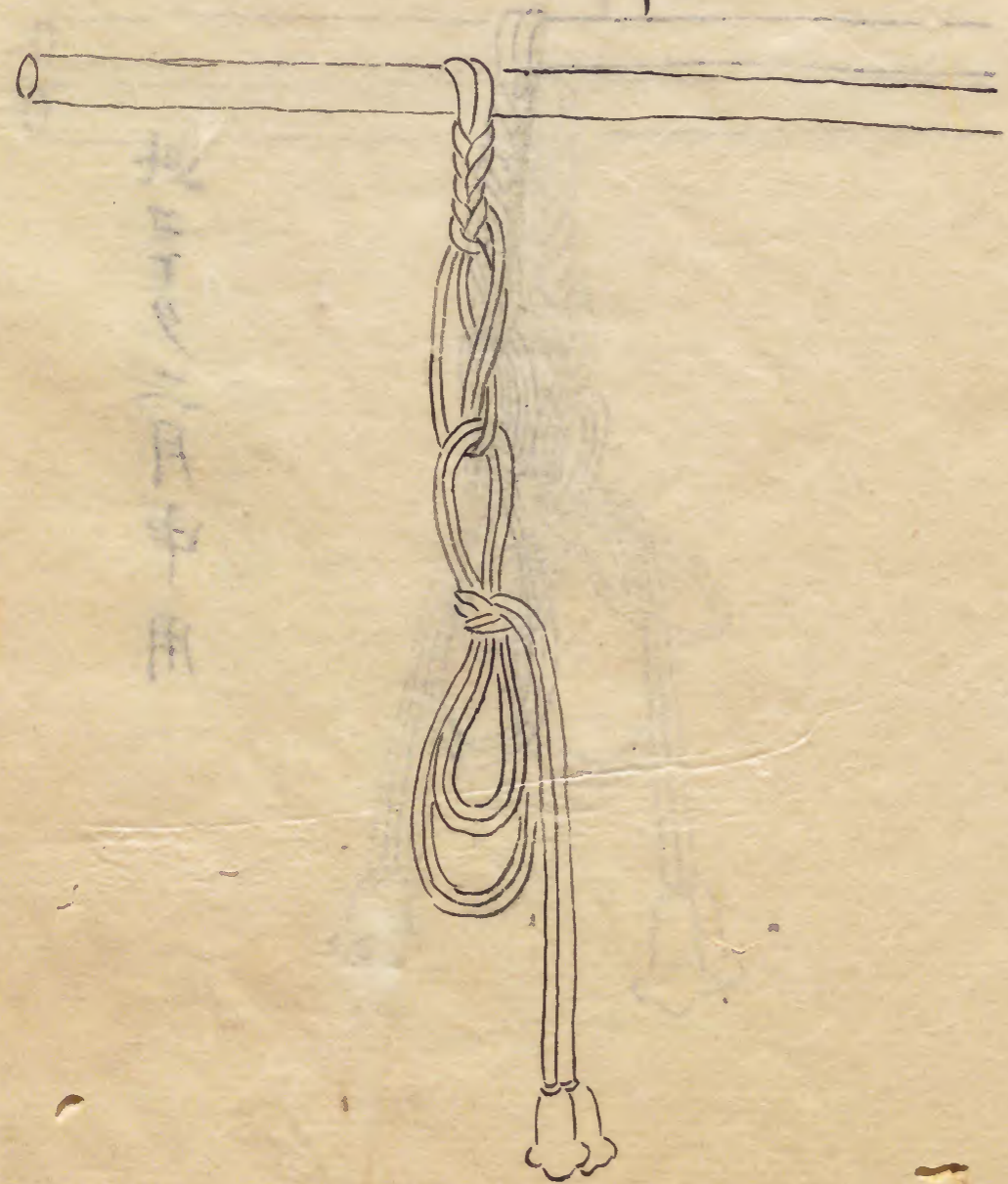
如是
神前ニ用ル也



如是ハヤブサノ
逸物ニワスレカ
イニ縻也

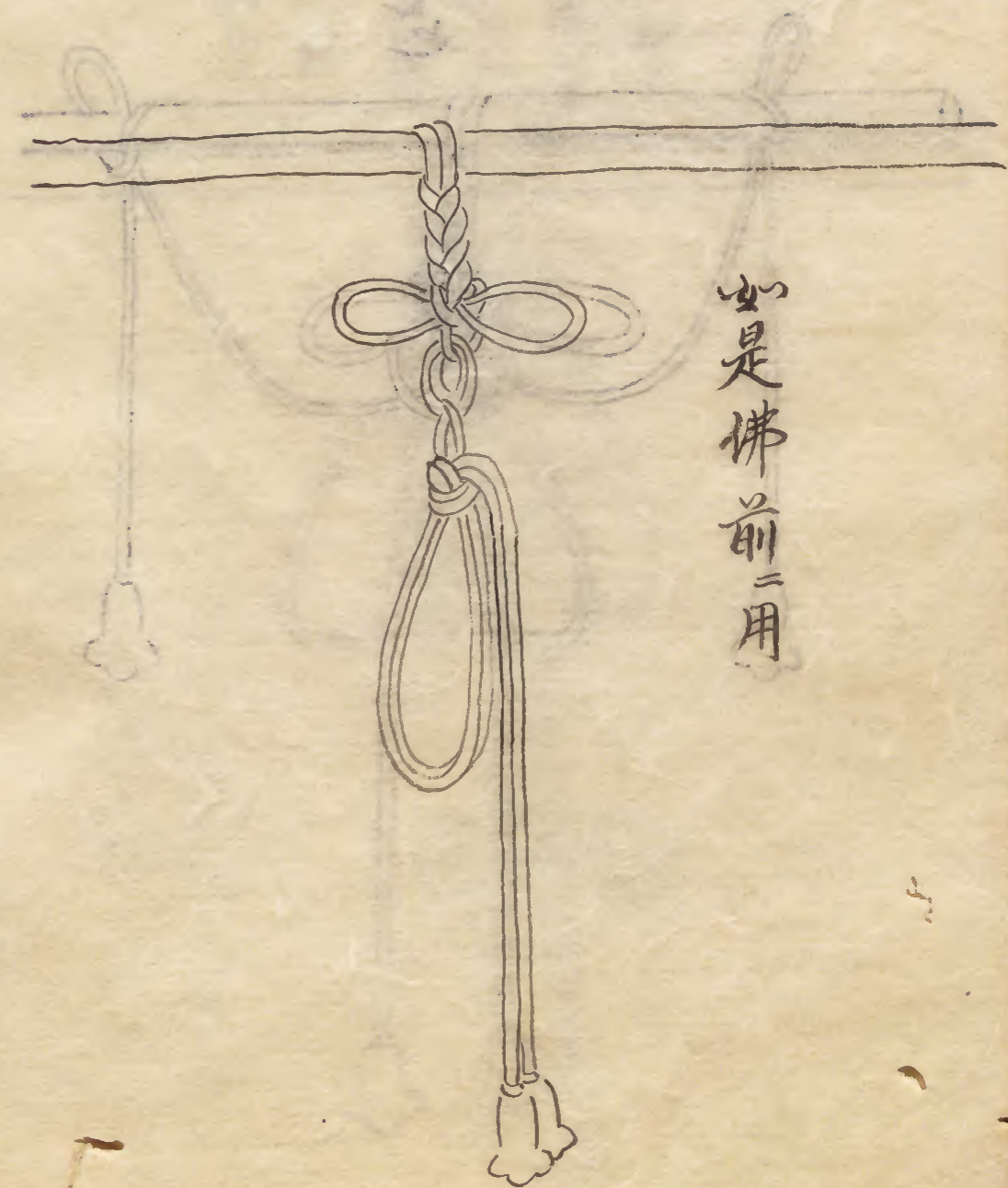


用
如
新
正
月
中



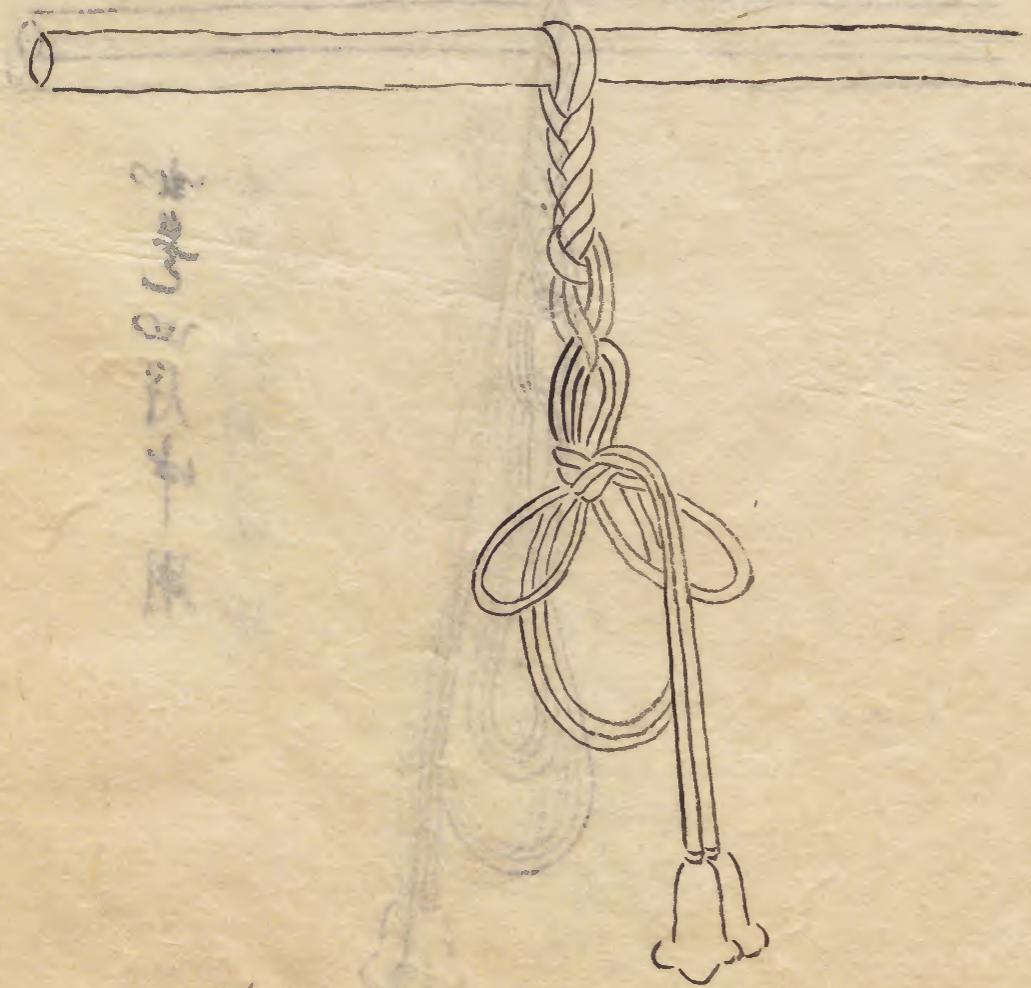
提
正
月
中
用

用
如
佛
前



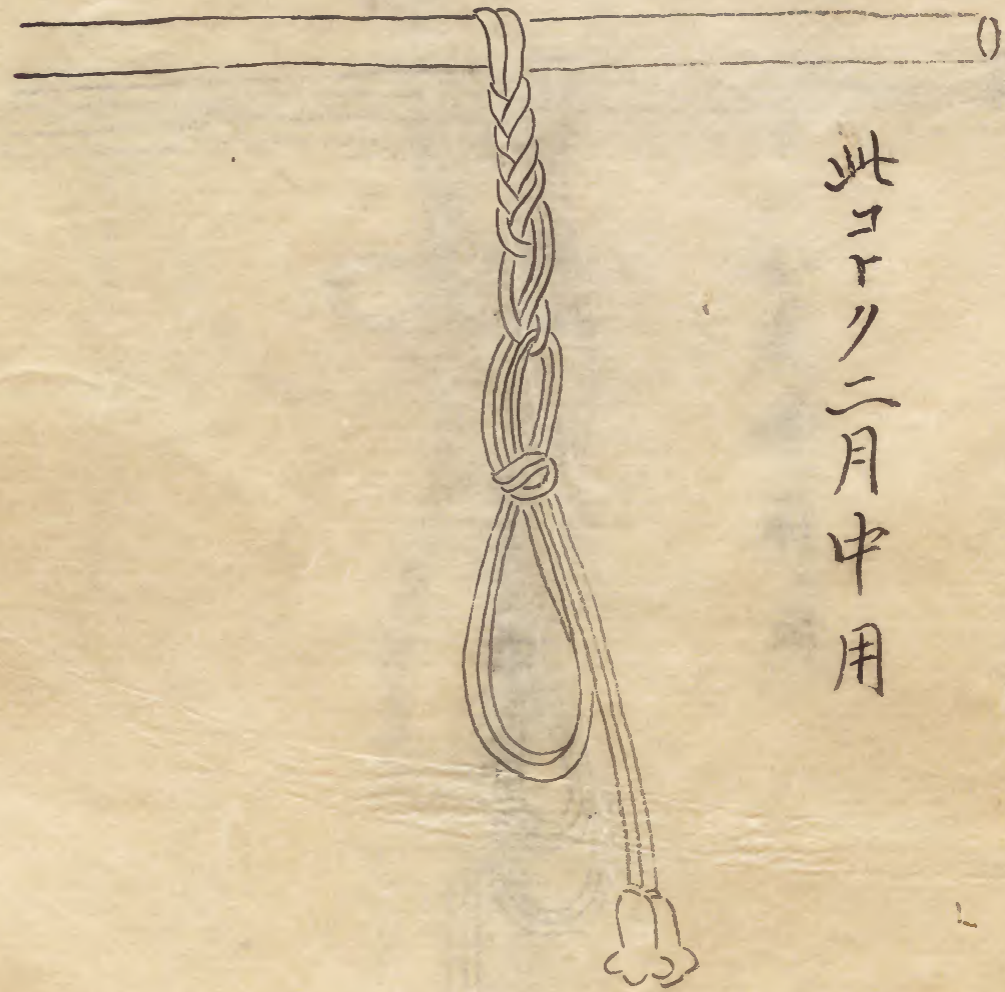
如
是
佛
前
用

用
如此
三月中



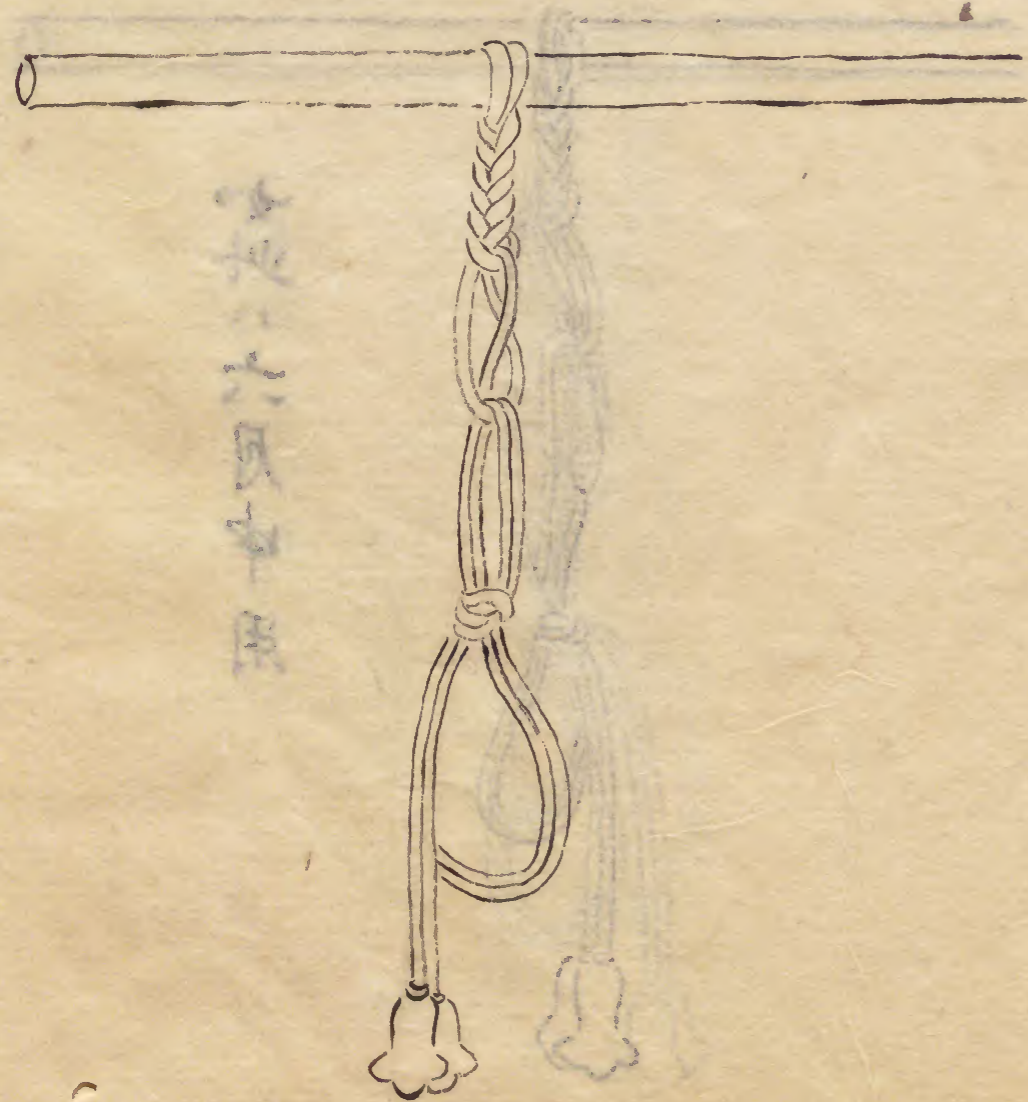
三
月
中
用

三
月
中
用



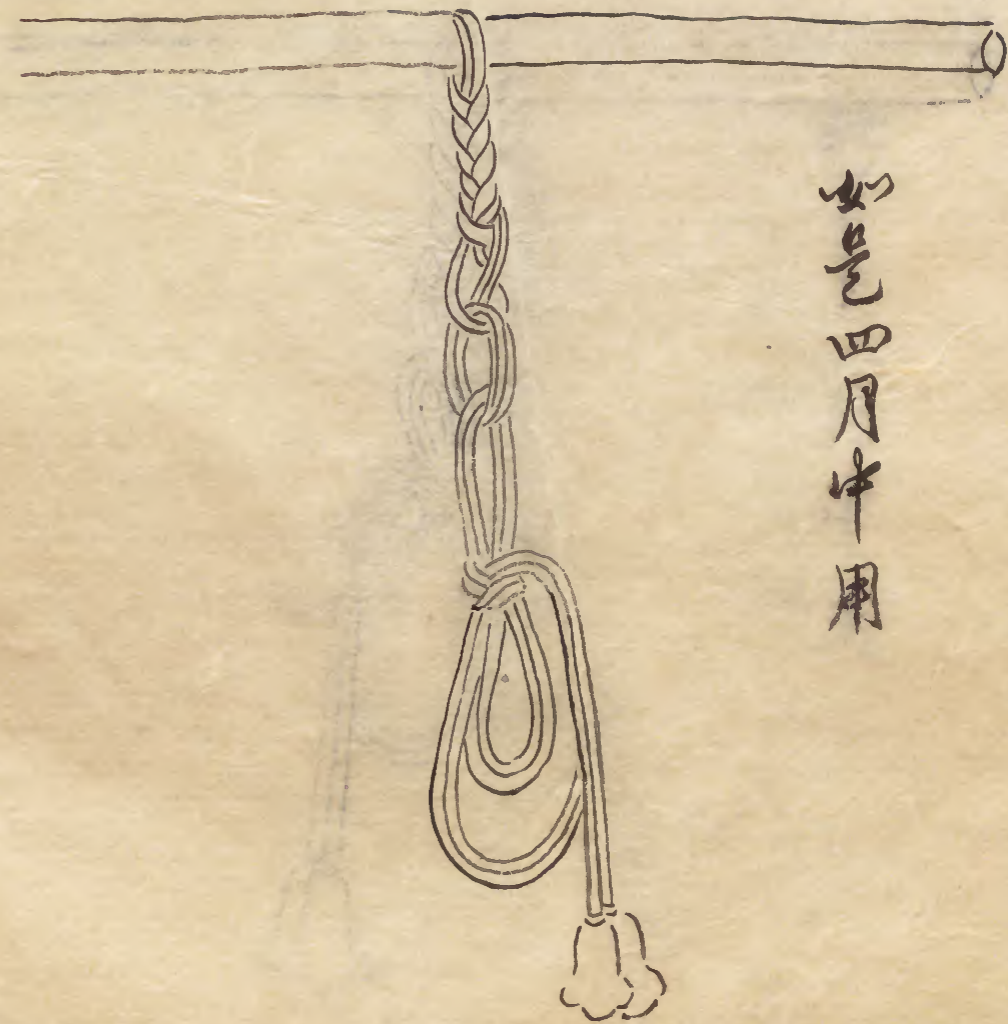
此
二
月
中
用

如是八五月
中用



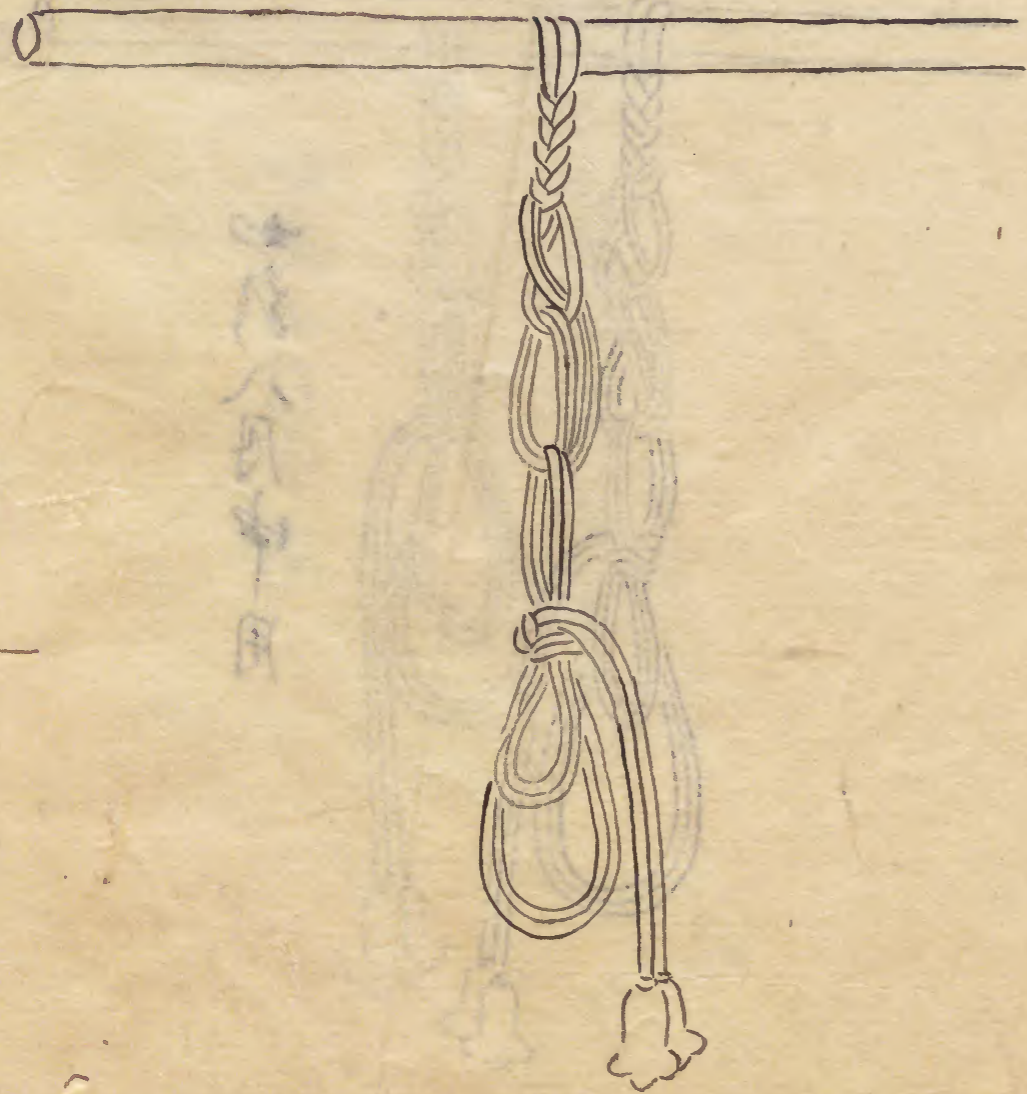
八五月用

如是四月中用



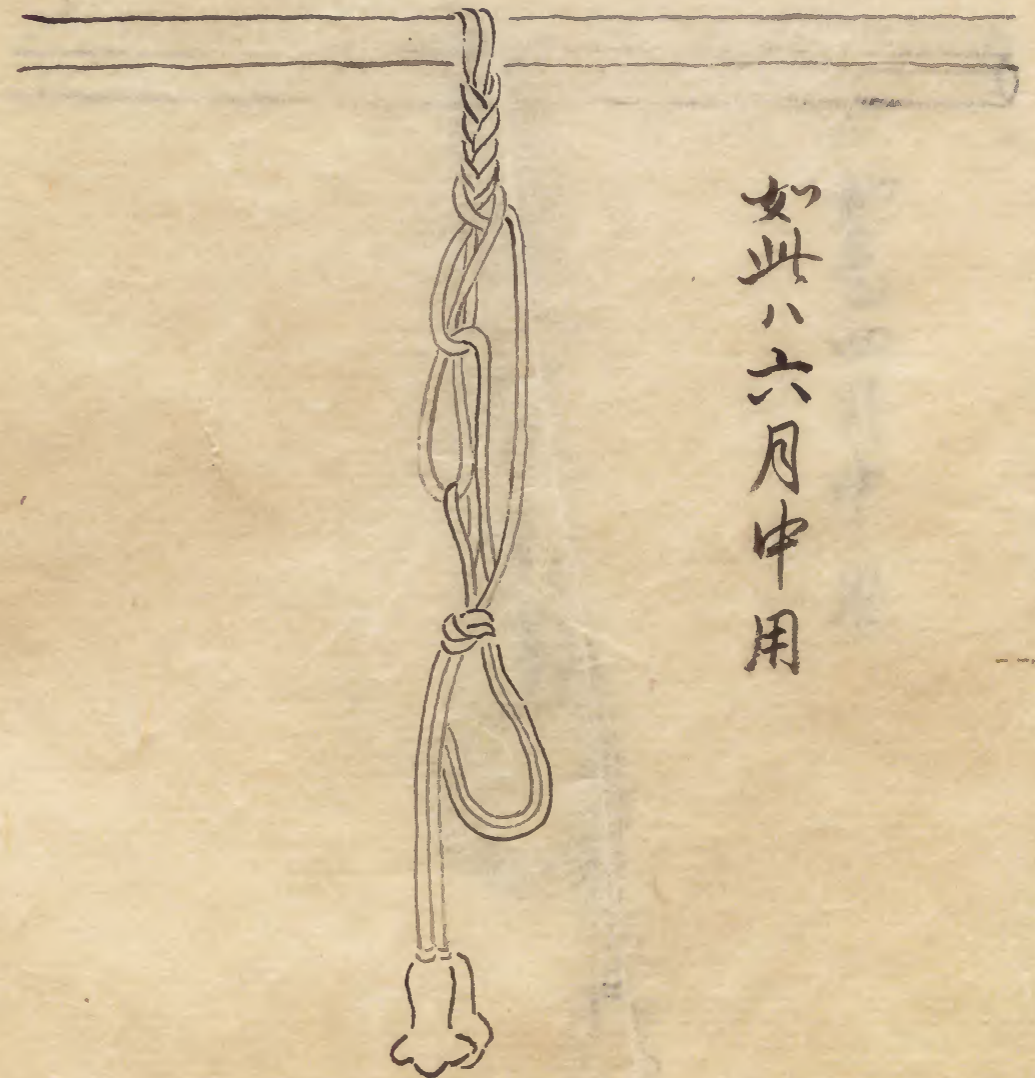
如是四月中用

如此八七月
中用



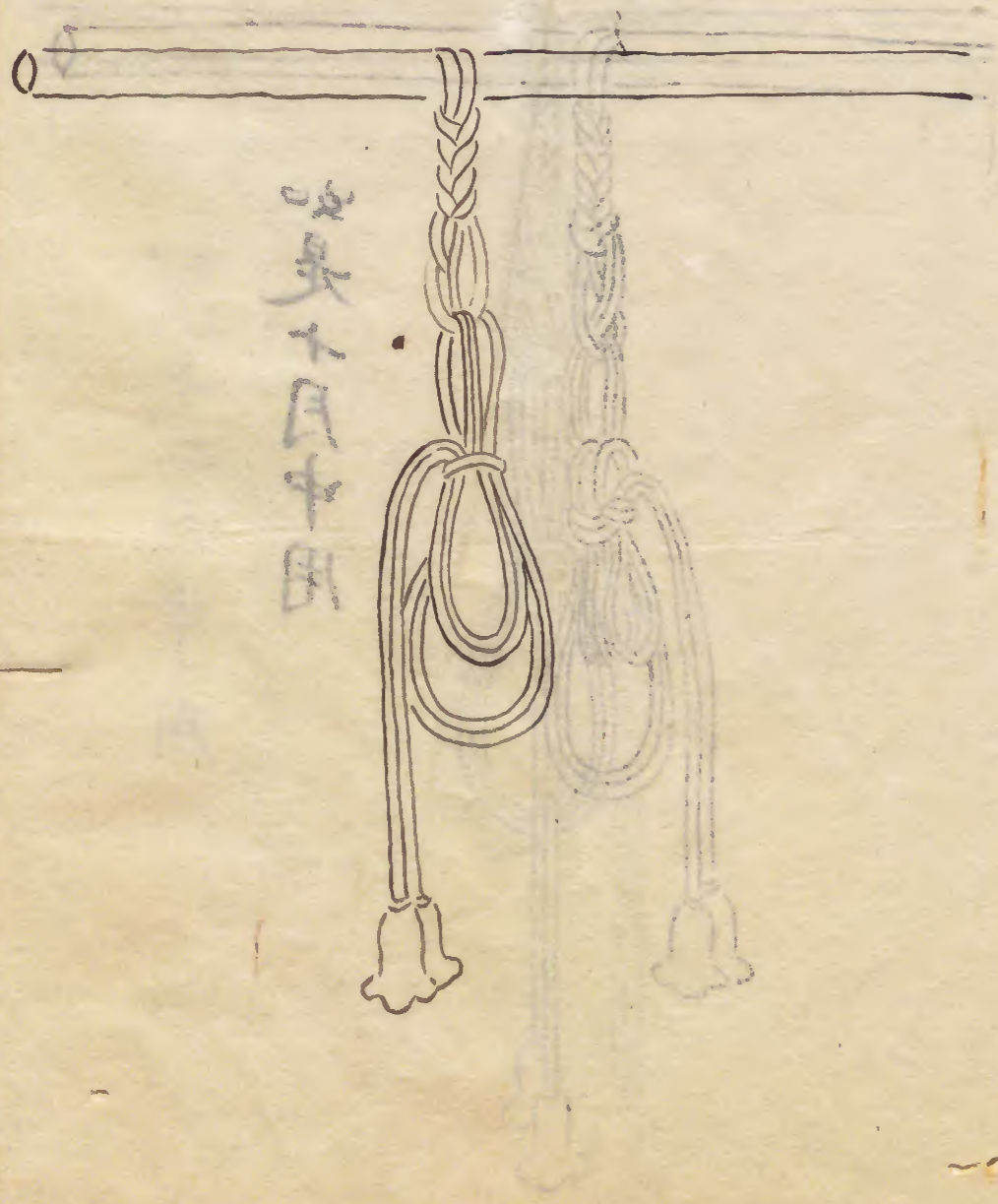
此八月中用

如此
中用



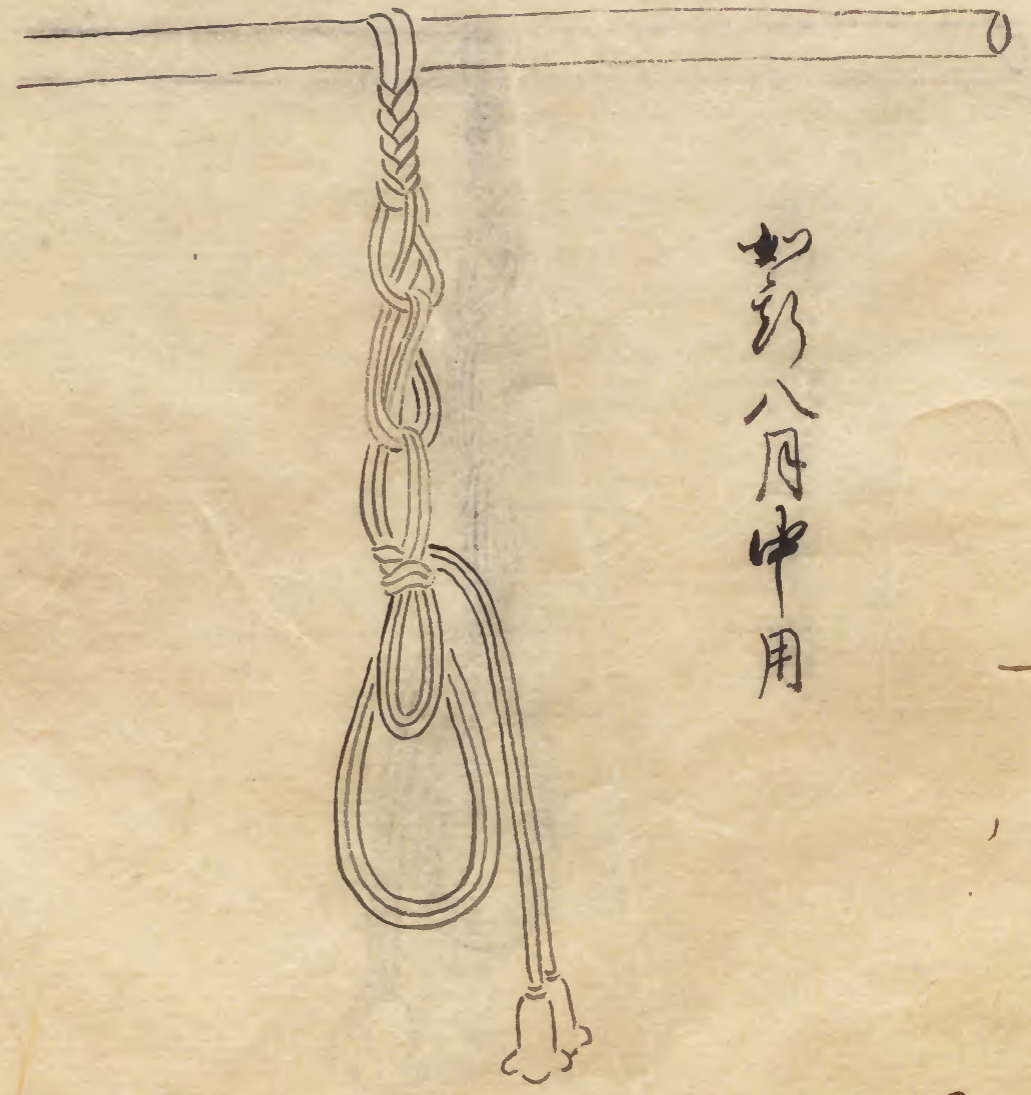
如此六月中用

如
中
用
九
月

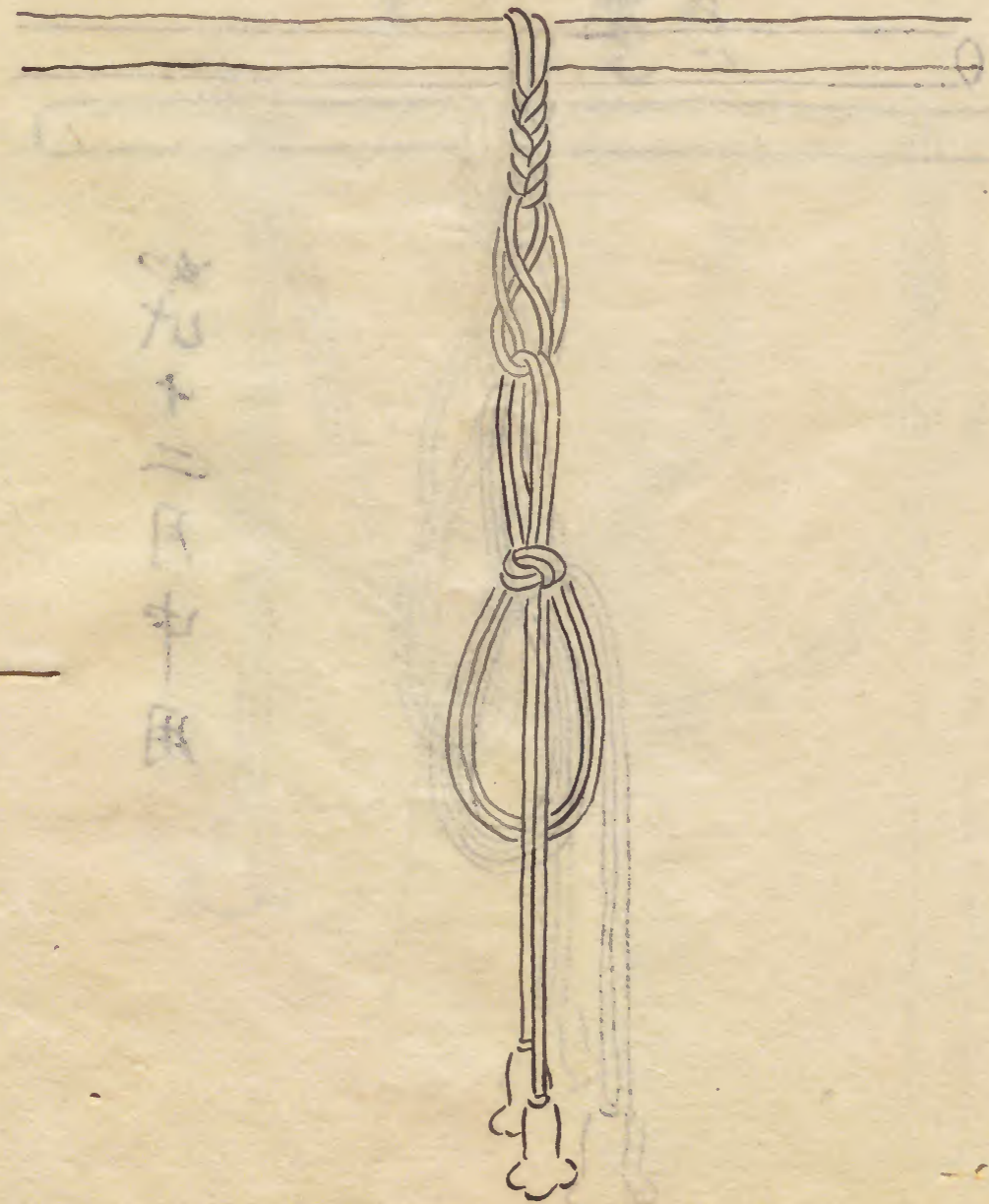


如
中
用
八
月

如
中
用
八
月

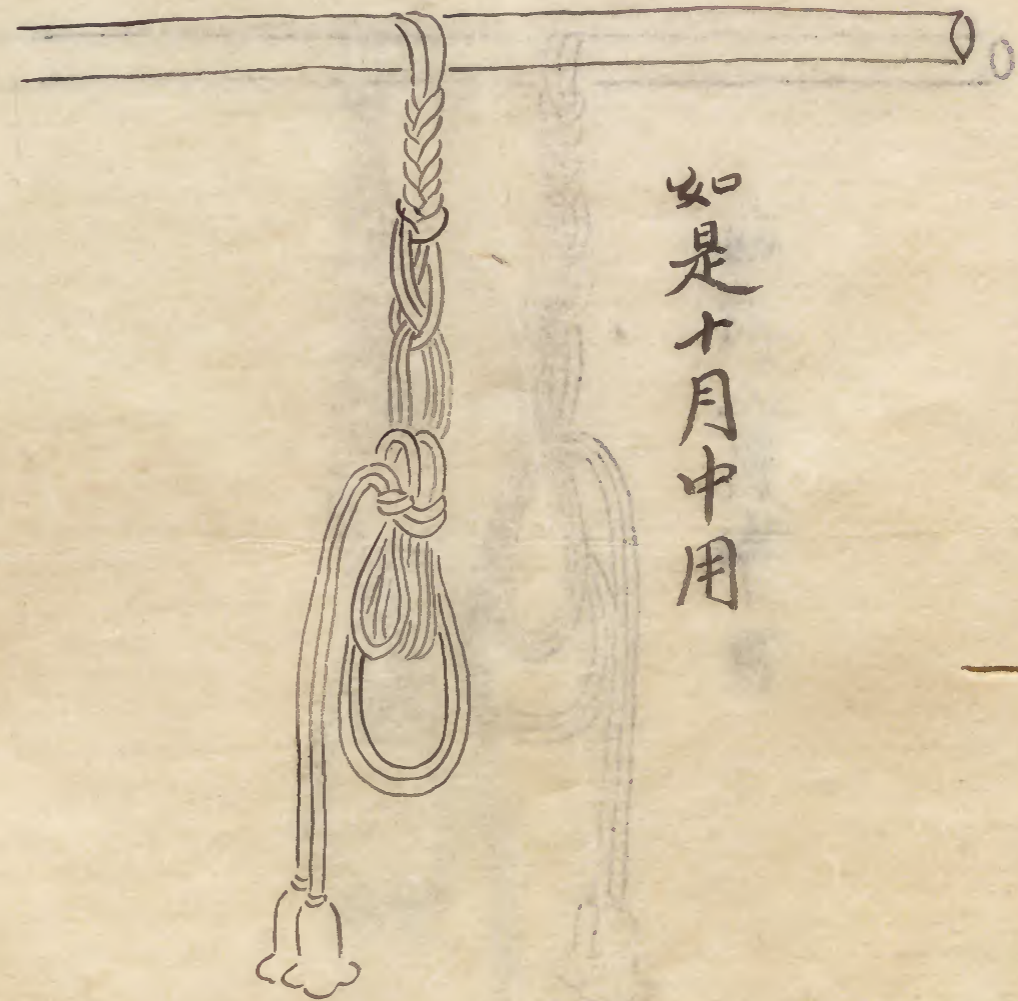


如此十月
中用



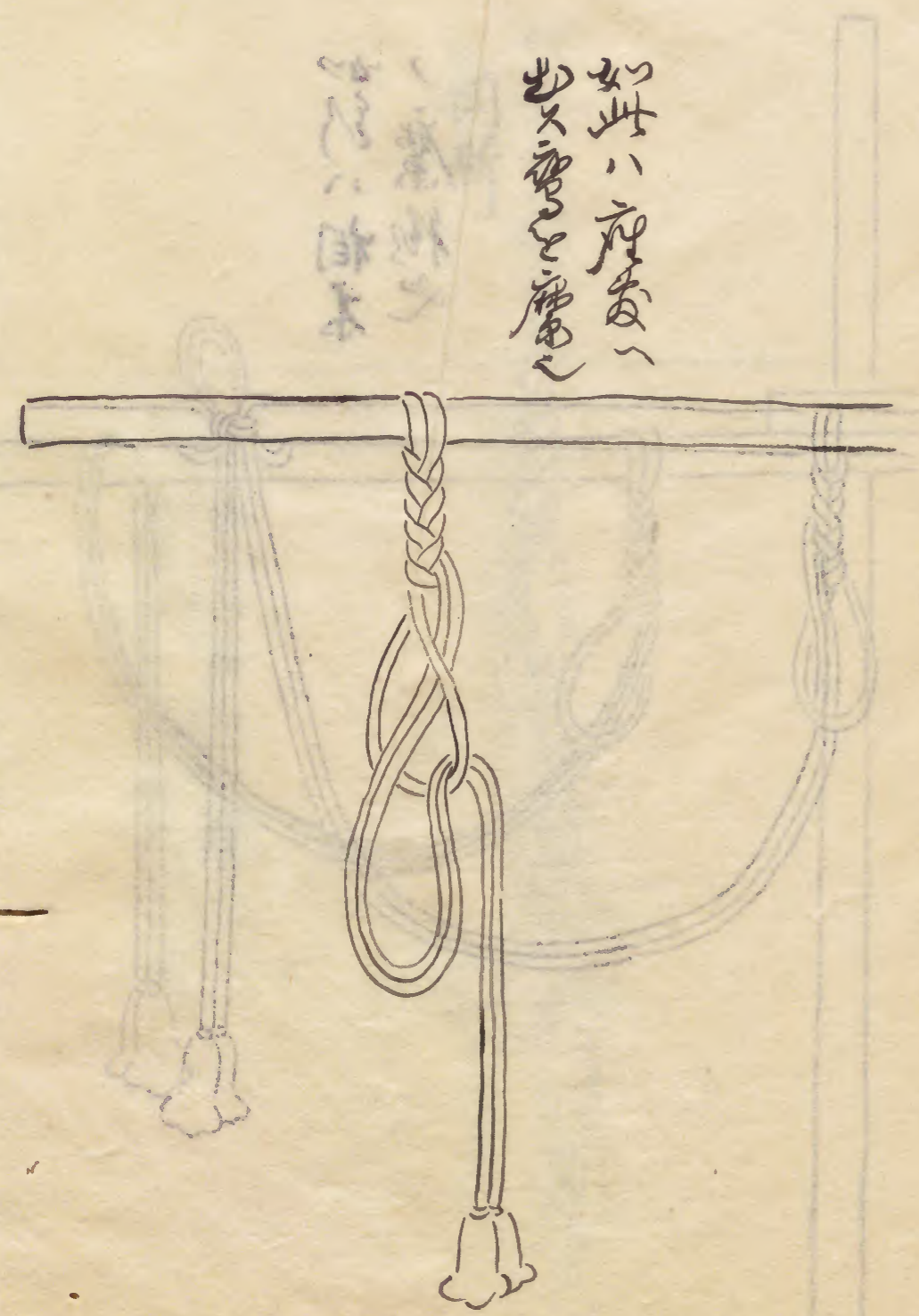
九月二十一日中用

如此十月
中用

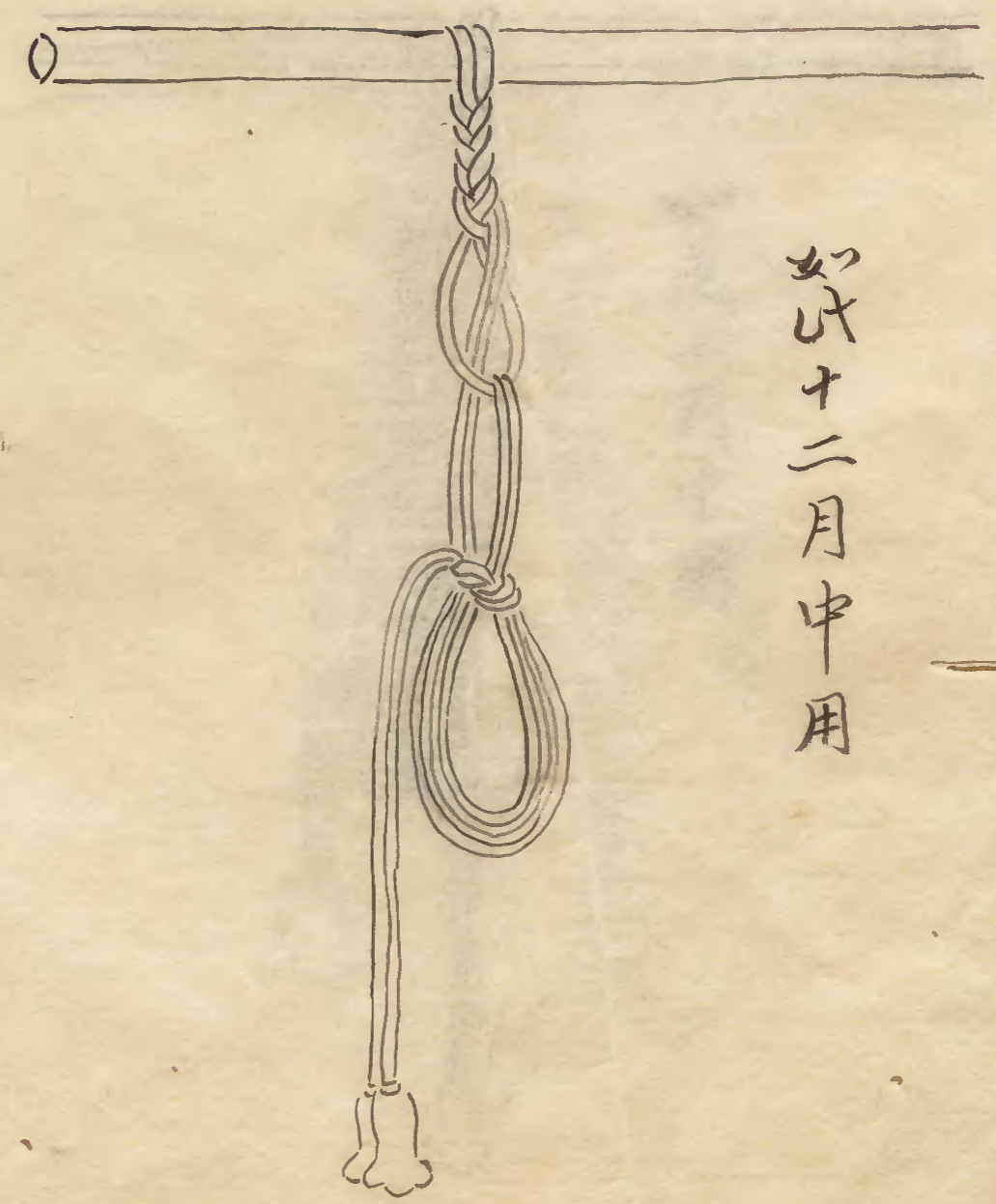


如是十月中用

此ハ座敷
也又座敷と座敷
ハ座敷ノ
也ハ座敷

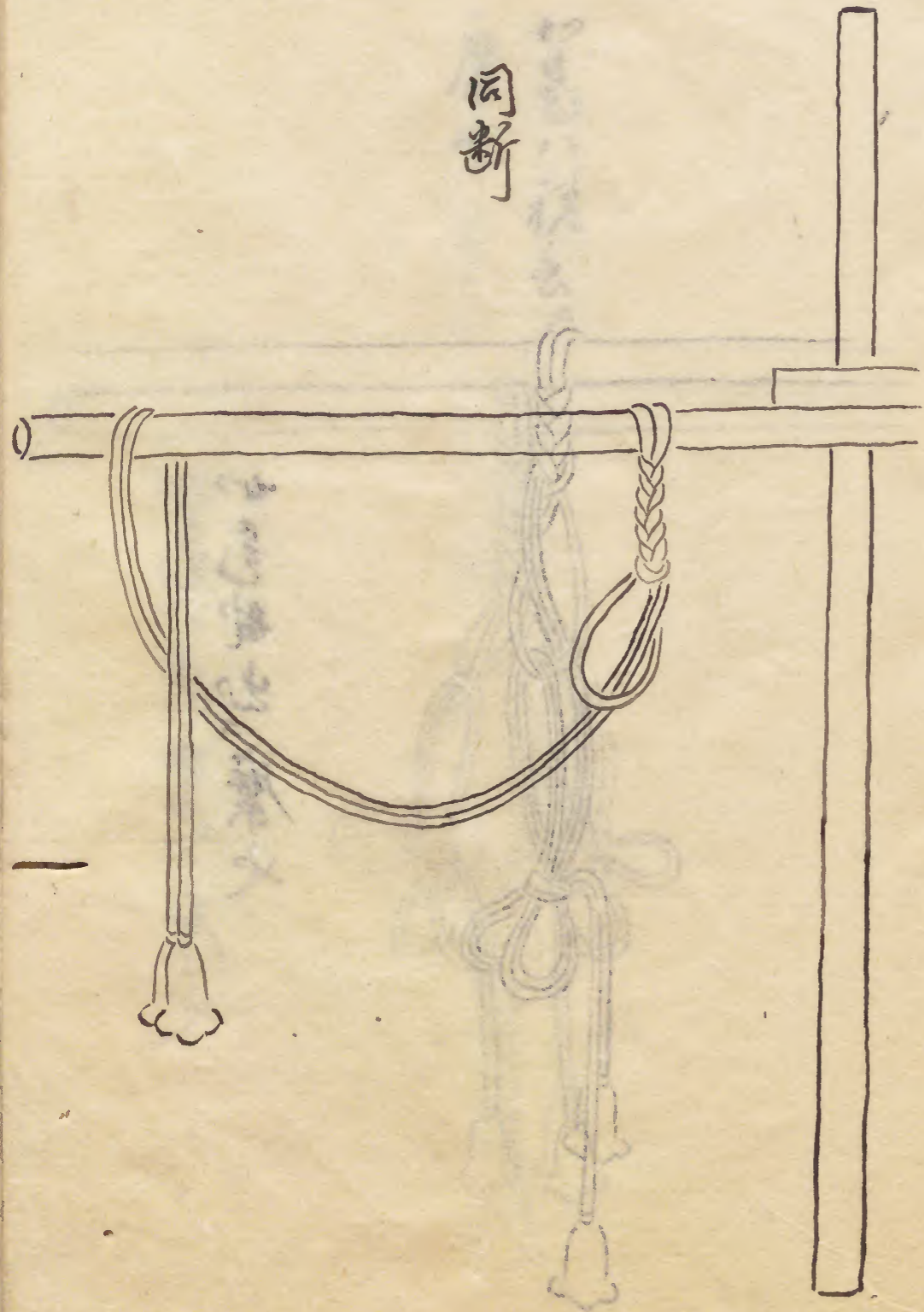


中
座敷

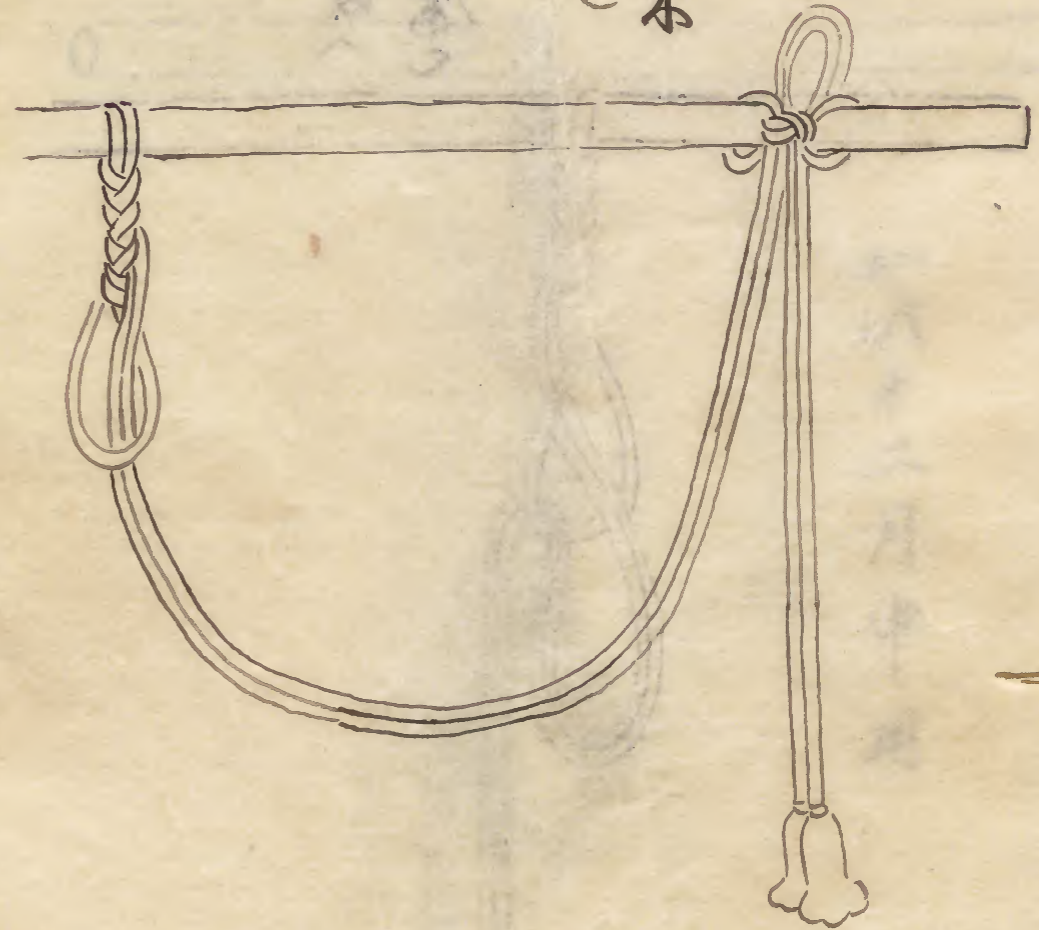


此ハ十二月中用

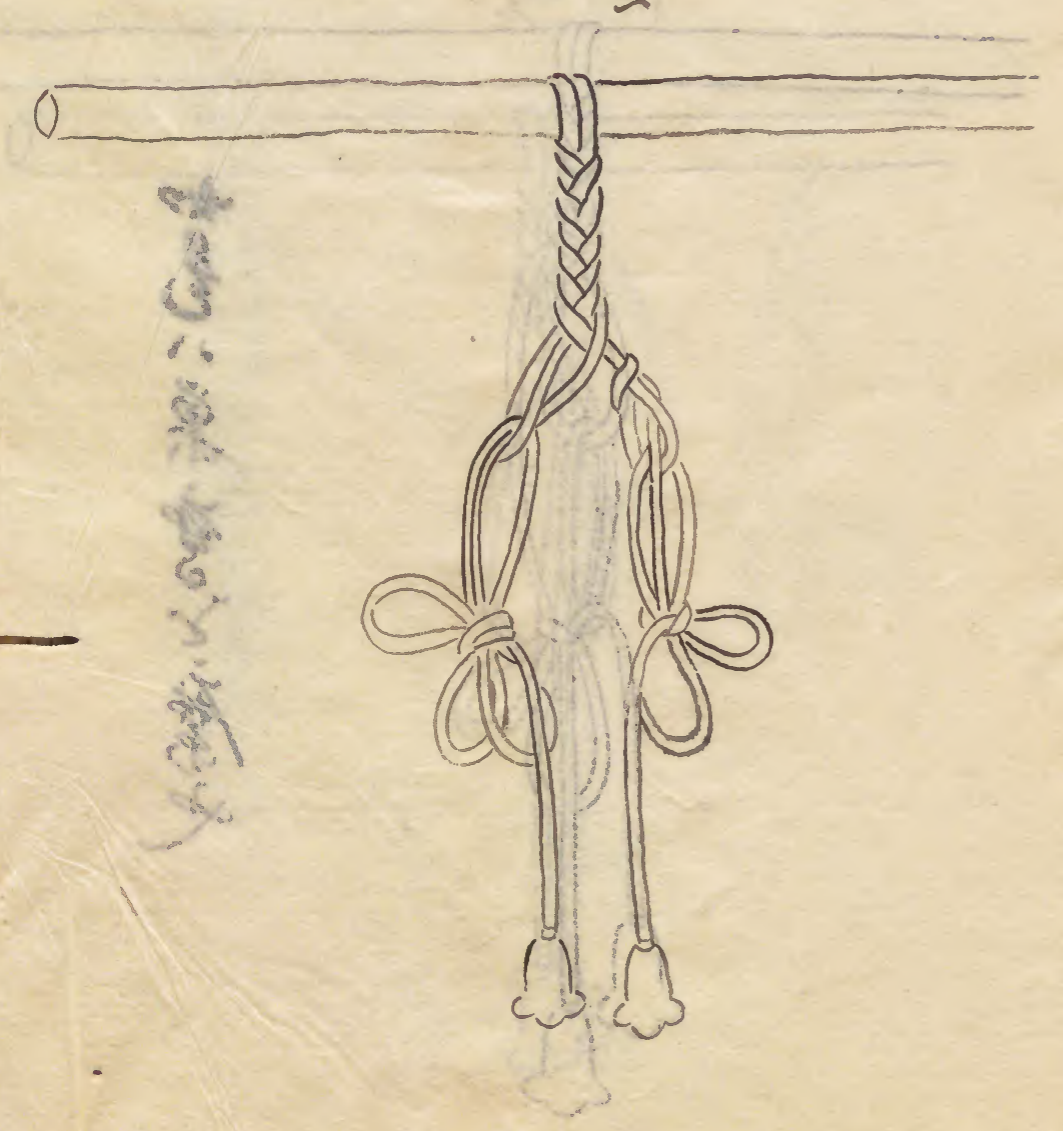
同新



如新八相本
ノ原物也

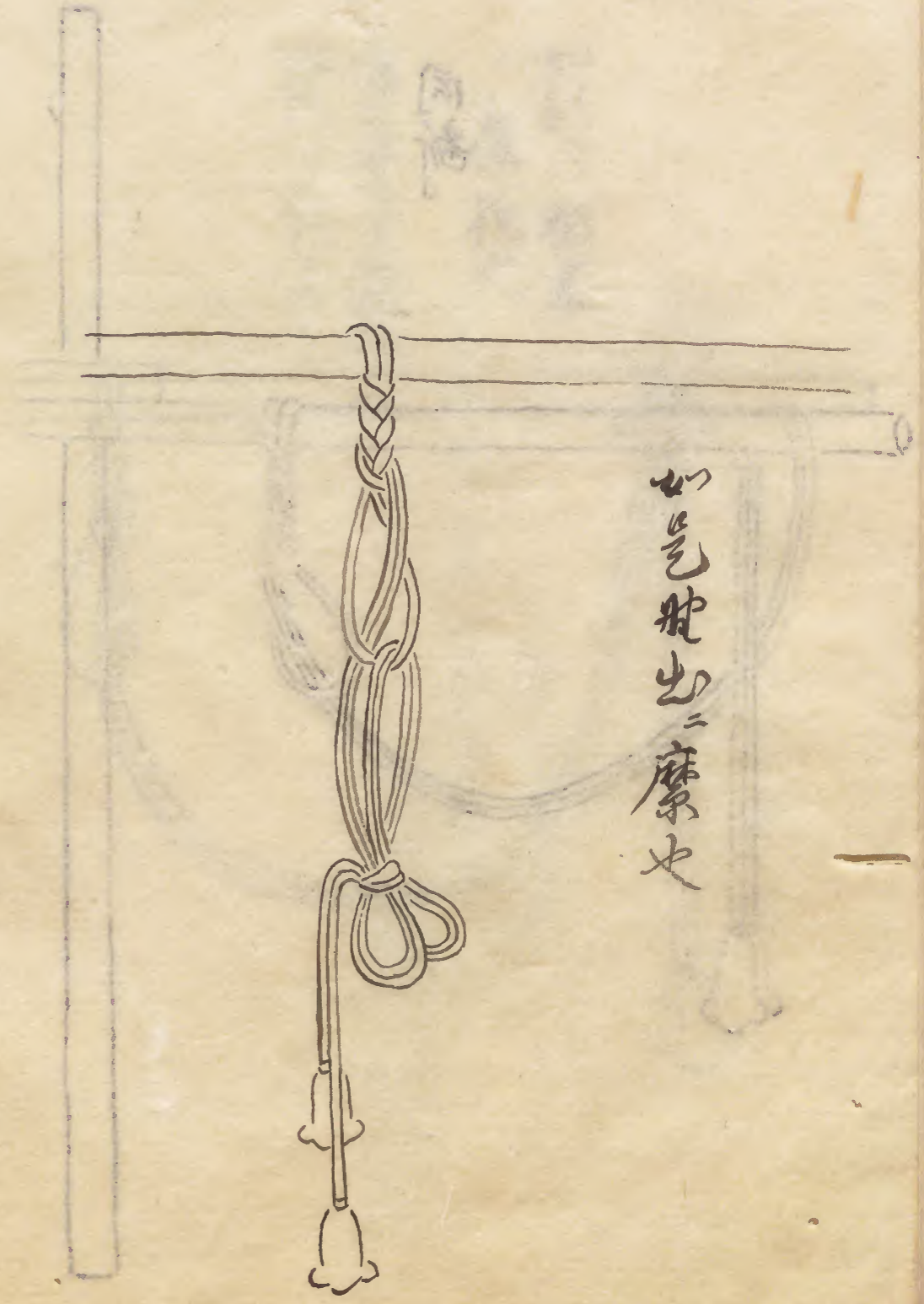


如是八秋之
縹也

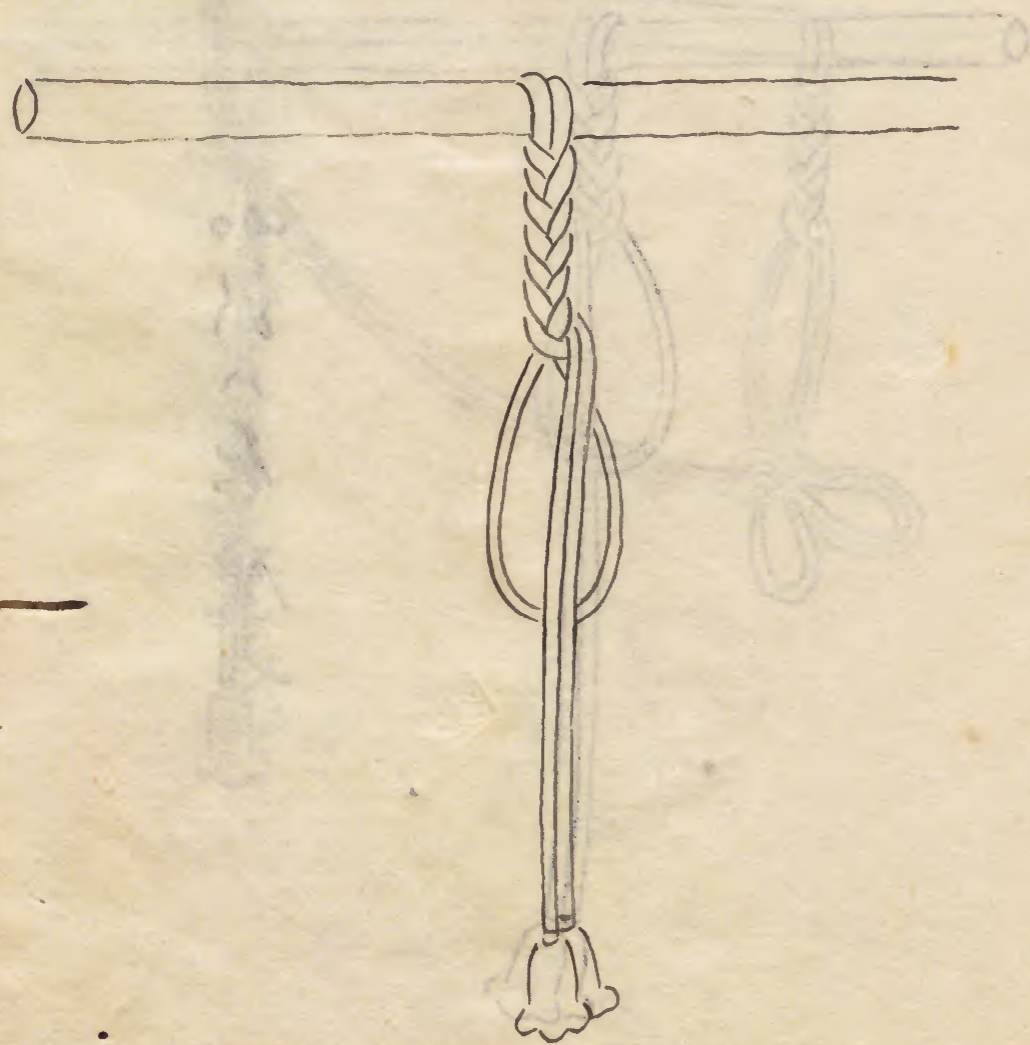


如是八秋之縹也

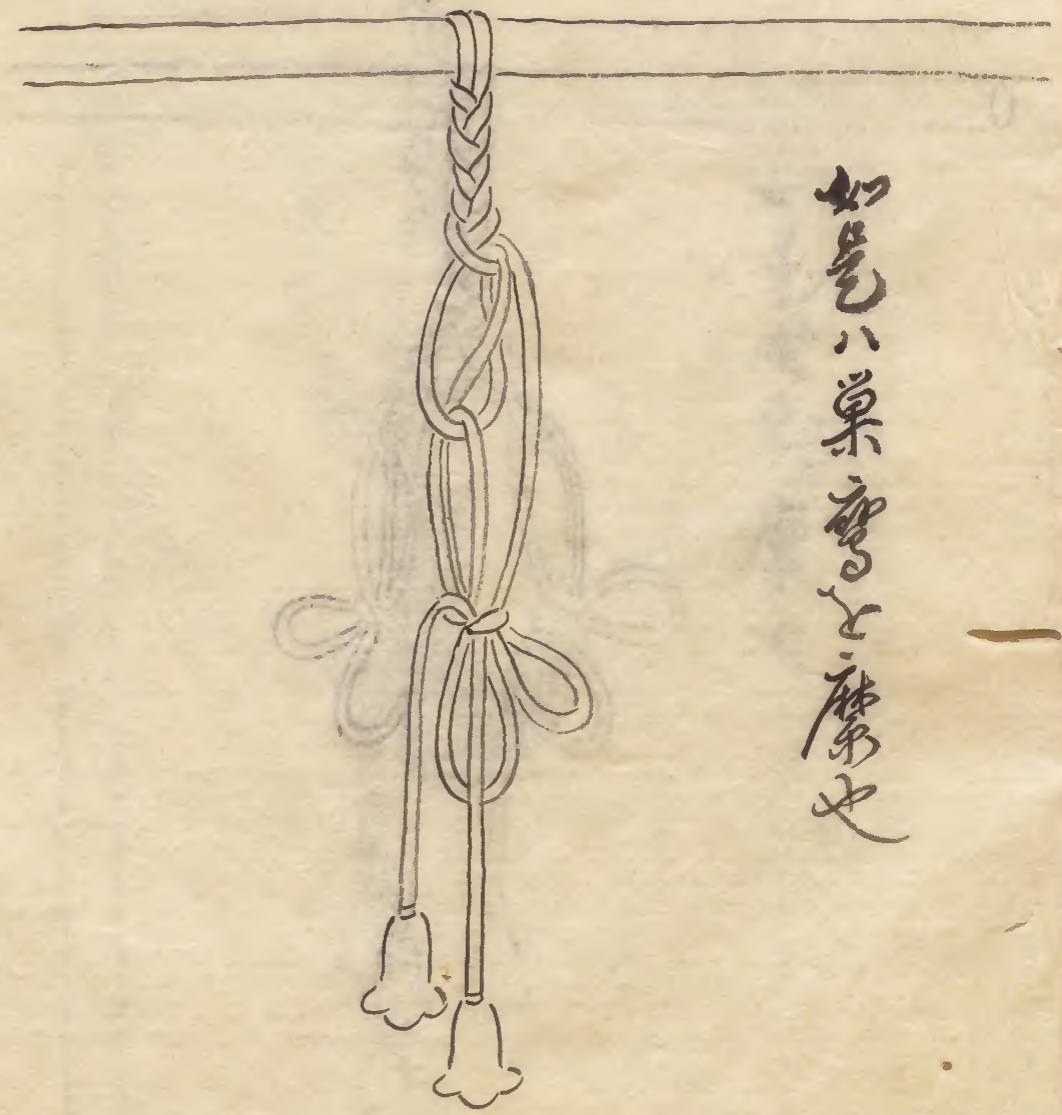
如是出之縹也



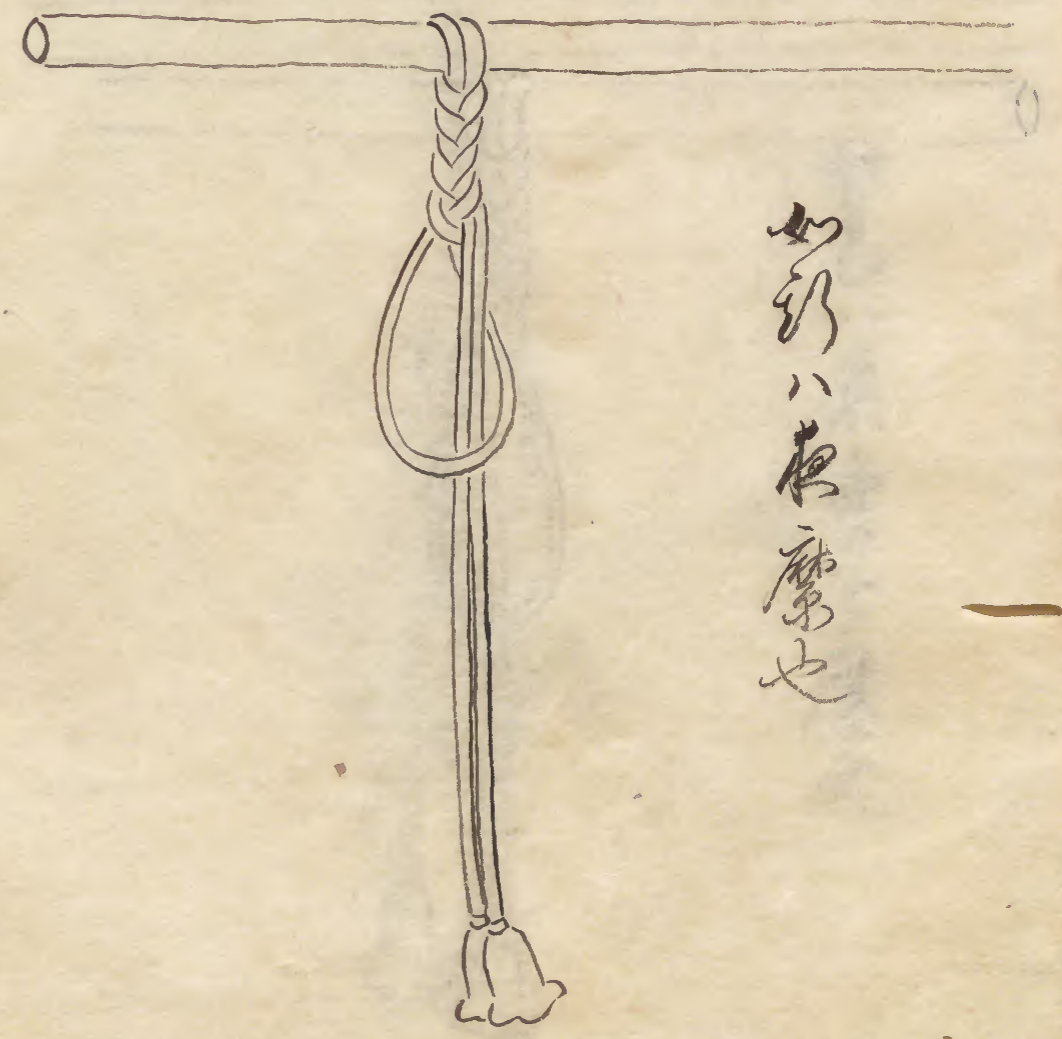
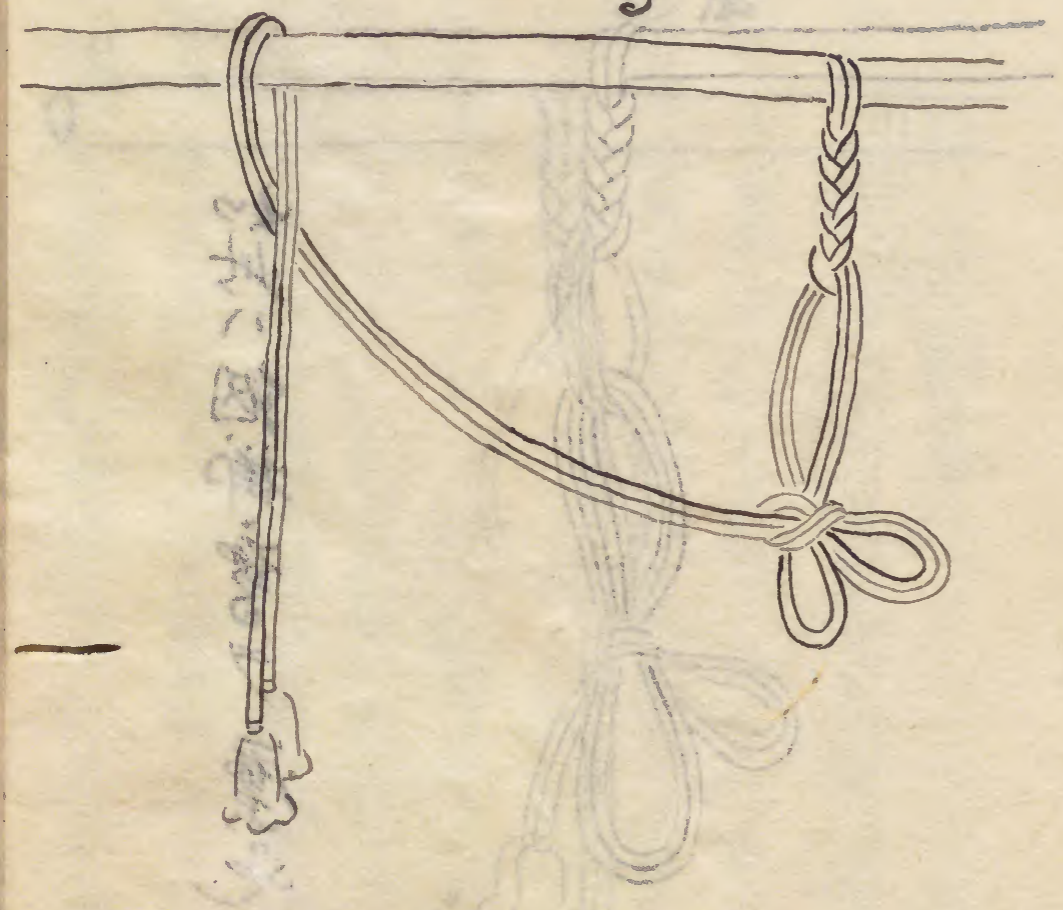
如此八通り
習と摩也



如此八通り習と摩也

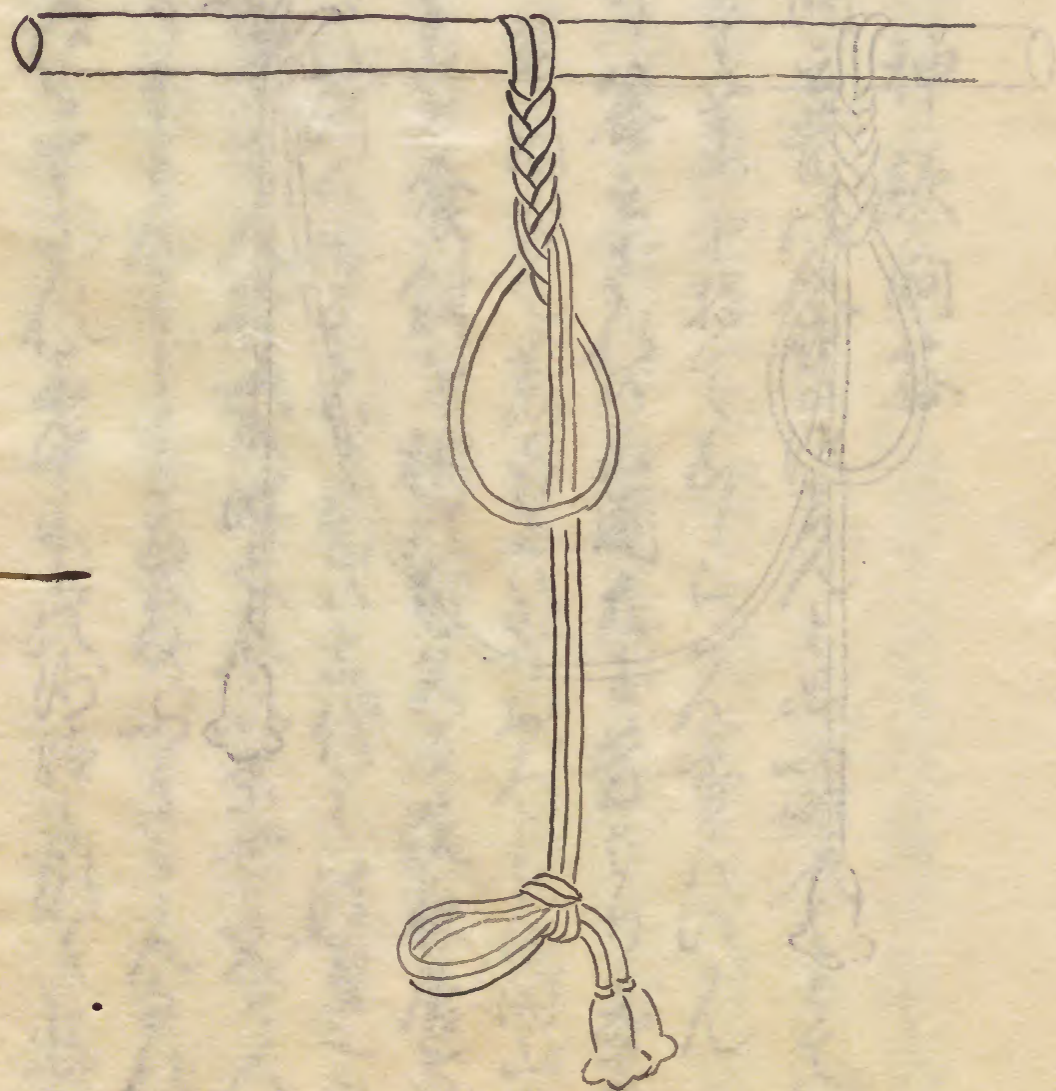


如是八泊之
ヲ摩也

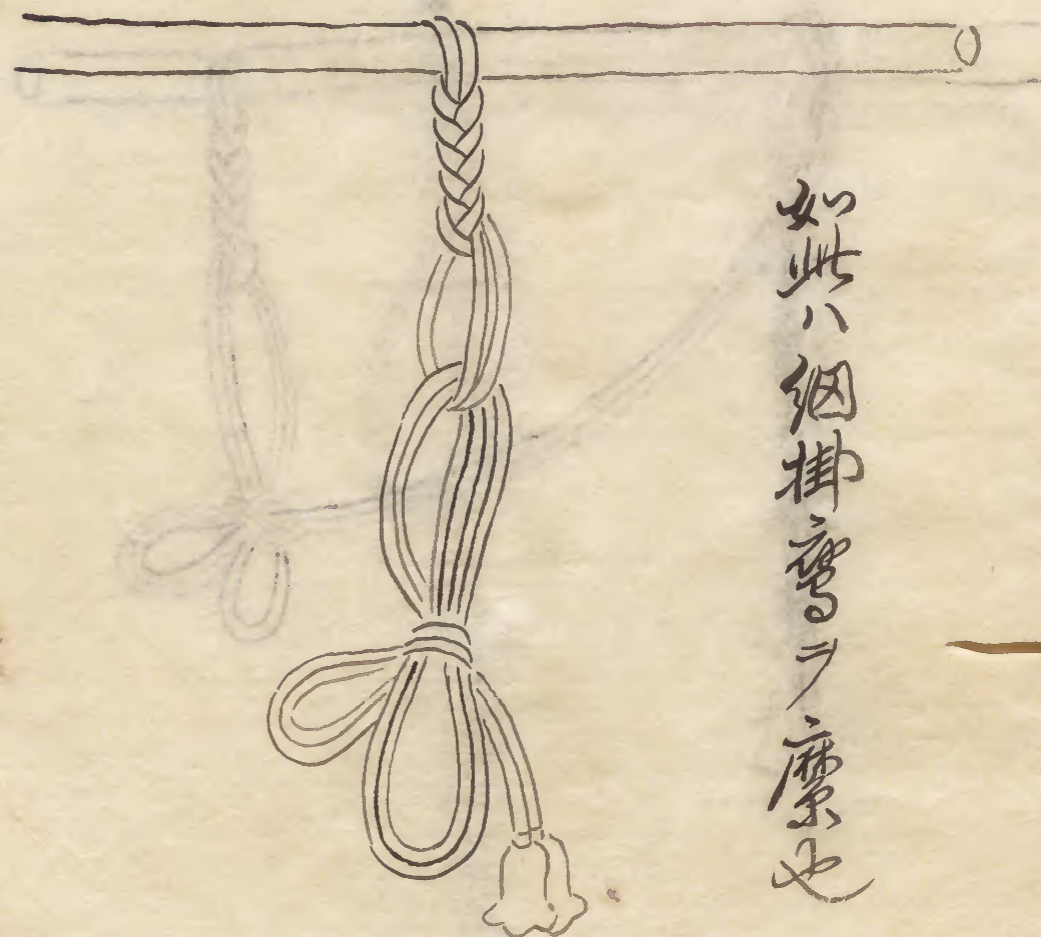


如是八根之
ヲ摩也

如是八尋
繩之原也



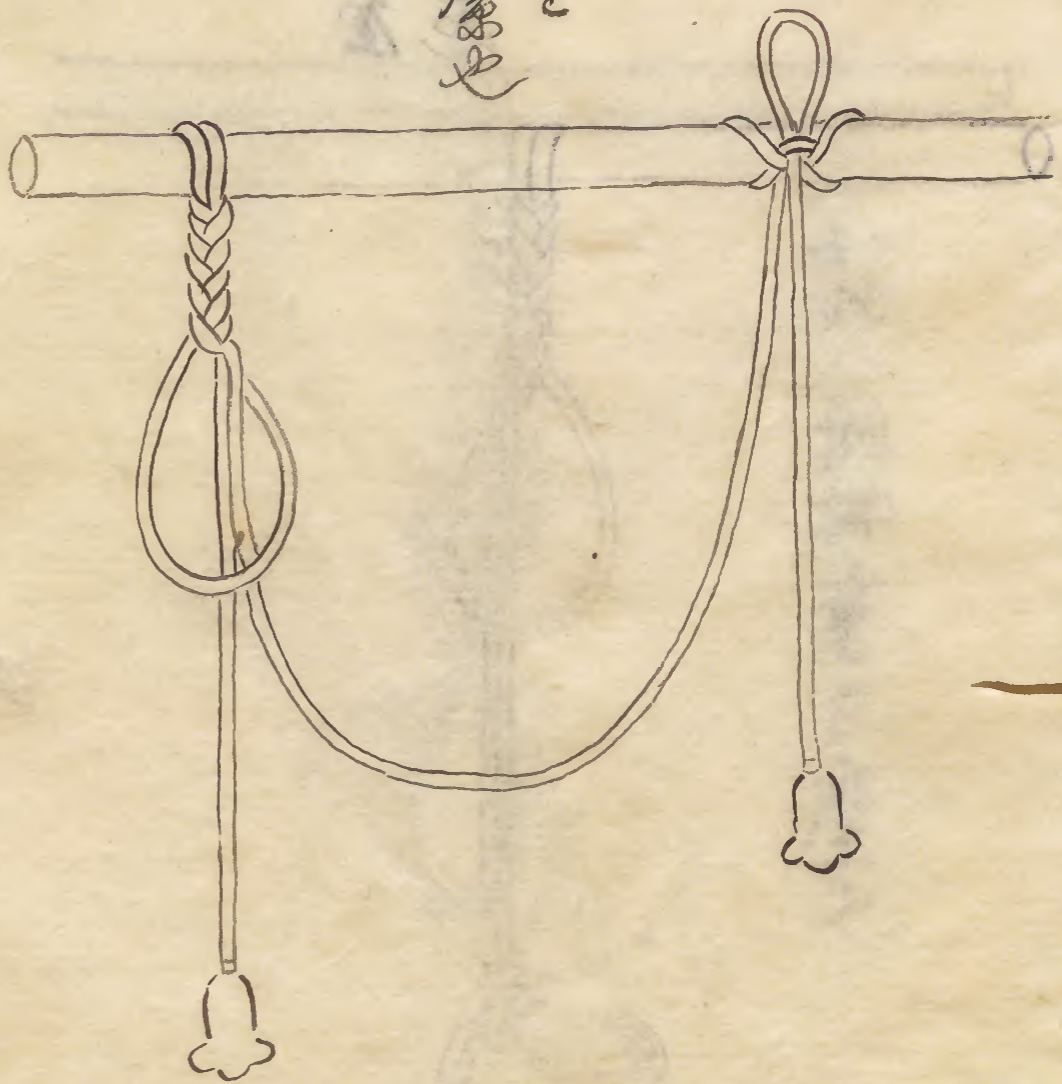
如此八細掛
繩之原也



知念ハ

舟屋

藤也



神歌回答

一番同云昔此人等はうんと心あつたを餅
 とはけり茶を指てあつらん事いん
 せらり答えよ三國丸は昔より茶を
 梅の葉同おこさるるいおろし山志
 とて茶と喰餅と桃代は又よ洗衣居を致
 とて幾はいれりもさるは上代ははる亦
 とらんよそ人指あつた今も未世は人れ
 のはありわらんよそあつたさるらんれ
 響れはすらん事いれは物と物と

おき入と志川一せんといへ亦悪くあり魔
國のつた事よしと昔も二れ事と亦唯との
尚流の事ありまづく人産りくも銀千金とつ
じよとらふとあつらん事よきとくつとるを
二番二回之打おる一の事と七日入七百と九
と七七日の内は知りら肉ハ引合へといん
答云支書ハ野よと物と取て日く小陰の
名物先束明とハ又餅と掛るこも別あり
あつ尚流よとす處は結らるる事と押
書ハ野よとあつと物と取めハ夜と結る

つととれと物と取て服とくつと陰の大本と
て日暮りてさく居て人志つたつ時次第と
下枝ハさうりてぬるく曉ハ又木と陰より
曉代尻とさかておれとてせんはさうり
とてとてとてとて後れぬと人れ親とん合
とてとてとて朝居とて致さり外架とてさ
致とくわの口餅と喰くらぬは餅のふと餅よ
てのおれはさかるととてとてとてとてと
はよとととととととととととととととと
してとととととととととととととととと

物とて又口鉞と云ふ取口端の紐流と口鉞
と云ふ物とありて其の紐流と云ふ物と云ふ
口鉞と云ふ流の爲胸と別之の肉れを云ふ
く鉞と云ふ口鉞と云ふ物と云ふ流の口
鉞と云ふ

曰者曰鉞を此の物と云ふ何答曰野野と
野とて物と云ふ答と持て鉞を此の物と
云ふ物を此の物と云ふ物と云ふ横と云
へて此の物と云ふ物と云ふ物と云ふ物
此の物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ

おそくはあつたか
海と云ふ

五者曰曰流は湯と云ふ流の物流の湯は
久しき答曰流は湯と云ふ流の物流の湯は
流は湯と云ふ流の物流の湯は
ての物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ
也鉞と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物
と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ
と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ
と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ

とらぬわらふにこころに七つの内入庵とて
此丸敷種入庵と七あふ七六あふは六あふ
一あ別はけか入とよも急の敷あく先入す
もそ敷者

七あ同云と日あふあ一丸銅のあ何 答云是は
響の心と名と一丸若とて押さるるをと名と
くして物ゆよりあせとんせよは響のあて
丸つゆはら丸と名と一丸若はあへはこ
あくはれ結とて一あくはれ結とて一あくは
て丸若はあへはら丸と名と一丸若はあへはら

能と一丸と一と名と一丸と一丸と一丸と
て又はれ結とて一丸と一丸と一丸と一丸と
て一丸と一丸と一丸と一丸と一丸と一丸と
はあああああああああああああああああ
あはれ結とて一丸と一丸と一丸と一丸と

八あ同云と日あふあ一丸銅のあ何 答云是は
あああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ

肉と定と... 逸物の二日...
初七日八次日... 又次日...
あ... 物... 合... 焼...
... 茶... 履...
... 焼... 同...
... 力口...

力口餅と... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...
... 妙業散と...

とよき物と申は六七胡之文目此曉より満のん
其結ひもくんにしてふん斗流ていふなめよ
ふてゆへいふては是に大書れきいひの中
もむも湯れんはははははははははははは
あふい書れきいひははははははははははは
よふもはははははははははははははははは
と人の出入ははははははははははははははは
肉ははははははははははははははははははは
あふい書れきいひははははははははははは
十二回同くいふはははははははははははははは

ころい原書といふはこれ物と云 縦と原と云は
一切ははははははははははははははははははは
てい物也者といふは唐又人あふては荒く
南ははははははははははははははははははは
のあふい書れきいひははははははははははは
てん原は奉へははははははははははははははは
物ははははははははははははははははははははは
あふい書れきいひははははははははははははは
あふい書れきいひははははははははははははは
あふい書れきいひははははははははははははは

如くは徳重のあつて一日二日と命をたす旅あ
はあつていこうと申すを付へしは徳重は
あつてい肉引あつて肉を食ふは徳重は
ひきこれ徳重は久しと申すを付へしは徳重は
らう徳重はしつもの一年さぬ七日入の
徳重は二年さぬ二日徳重は初れ徳重は
順よつて後れ徳重は徳重は徳重は
徳重は妙宗教徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
丸と徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は

この徳重のいふ徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は

十三番同云荒徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
二徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は
徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は徳重は

紙と見るには紙のうしろをみるに身の毛もよだて
能く本りうらうら社本の大意の心をもてほひひ
とて目平の急きよきつておろ毛れ紙の
毛とまていんきよきつておろ毛れ紙の
てし海けの毛とまていんきよきつておろ毛れ紙の
あゝい胸とやと急きよきつておろ毛れ紙の
ふゝい胸とやと急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の

ふゝい胸とやと急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の
急きよきつておろ毛れ紙の

十七番同云いこれ鞭と事何事か一答云
を鞭と礼あり鞭と礼と事何事か一答云
と云ふは鞭と礼の事何事か一答云
して七鞭と事何事か一答云
ふと云ふは鞭と礼の事何事か一答云
鞭と礼と事何事か一答云
ふと云ふは鞭と礼の事何事か一答云
鞭と礼と事何事か一答云
ふと云ふは鞭と礼の事何事か一答云

十八番同云いこれ鞭と事何事か一答云
を鞭と礼あり鞭と礼と事何事か一答云
と云ふは鞭と礼の事何事か一答云
して七鞭と事何事か一答云
ふと云ふは鞭と礼の事何事か一答云
鞭と礼と事何事か一答云
ふと云ふは鞭と礼の事何事か一答云
鞭と礼と事何事か一答云
ふと云ふは鞭と礼の事何事か一答云

先づいふに、この書は、
一、かまの雄の、
二、は、
三、大、
四、女、
五、ち、
六、是

此書同云書、
あふ、

あふ、
し、
と、
へ、
く、
後、
の、
後、
も、
ハ、

よふせいのふれぬあつたのけしは舞と可
し海とわりのわらうしと能れぬあつた
ふれぬあつたのけしは舞と可
造れぬあつたのけしは舞と可
小形の造れぬあつたのけしは舞と可
さしとわりのわらうしと能れぬあつた
造れぬあつたのけしは舞と可
物よふせいのふれぬあつたのけしは舞と可
さしとわりのわらうしと能れぬあつた
ておとすてふてふてふてふてふてふてふ

死給平地此鴨と存く小形のあつたのけしは舞と可
さしとわりのわらうしと能れぬあつた
ておとすてふてふてふてふてふてふてふ
命をさしとわりのわらうしと能れぬあつた
さしとわりのわらうしと能れぬあつた
さしとわりのわらうしと能れぬあつた

女事同云貴と并ね給ふ事と貴とさしとわりの
又相にわらうしと能れぬあつたのけしは舞と可
付る事いん答えねれぬあつたのけしは舞と可
折る事いん答えねれぬあつたのけしは舞と可

生鷄とゆへるをまんじよほしに煮て用ひ
解れしを板に付し乾くも油をくみこみ
油に花をくみこみしるも油に付し煮て毒
いし柳に付し煮て毒をくみこみしるも
毒をくみこみしるも又油をくみこみしるも
切て餅をくみこみしるも肉茶をくみこみしるも
くみこみしるも一抽のくみこみしるも
餅に包銅を出入初日二日三日
胃に付し七日七ツクして毒を付し一餅に付し
茶也將お餅をくみこみしるも

虫と毒を七日餅にしるも餅をくみこみしるも
よ一火をくみこみしるも餅をくみこみしるも
女二毒同云放曲病をくみこみしるも又曲をくみこみしるも
茶を物に付し煮て毒をくみこみしるも
餅に腰のくみこみしるも餅をくみこみしるも
餅に茶を物に付し煮て毒をくみこみしるも
餅をくみこみしるも餅をくみこみしるも
餅をくみこみしるも餅をくみこみしるも
餅をくみこみしるも餅をくみこみしるも
餅をくみこみしるも餅をくみこみしるも

女中回云... 女七毒...
 一 肝腕... 腑... 膽腑... 肌眼齒...
 通... 齒... 春三月... 腫... 何... 死...

女五毒
 女六毒

女五毒
 女六毒

女七毒

女七毒

五臟論

一 肝腕... 腑... 膽腑... 肌眼齒...
 通... 齒... 春三月... 腫... 何... 死...

同業此事

一 砂... 一...

一茯苓 一友のふ 一田代赤花 一三味地 一

若細末×あつゝ合胴氣を 腎小腸を

一心配す 腎と小腸と云

下げつゝの 肝は 肝と云 肝は 肝と云

肝は 肝と云 肝は 肝と云 肝は 肝と云

一善めの 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一脾 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

尚流を云れり

一拾ふ 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

若細末×あつゝ合胴氣を 腎小腸を

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一肝 肝と云 肝と云 肝と云 肝と云

一 肉の... 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 肉の... 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 肉の... 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 肉の... 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 肉の... 痛あり... 筋... 痛あり...

一 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 痛あり... 筋... 痛あり...
 一 痛あり... 筋... 痛あり...

一骨は...
 一骨の皮...
 一骨...
 一骨...
 一骨...
 一骨...
 一骨...
 一骨...
 一骨...
 一骨...

宇津文流書之書

條目

- 一 膏灸所之事
- 一 膏灸銅板
- 一 和名集藥性論
- 一 同藥種異名之事

已上四ヶ條

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

鷹之英所事

先帝の御成敗と云ふは成敗と云ふは
志の成りし事成らざる事と成りし事成らざる事
と云ふ事と云ふ事

保のふし人のあはれ水と云ふ事と云ふ事
て保のふし人のあはれ水と云ふ事と云ふ事

○請貝穴是ハ穴と云ふ事と云ふ事
英と云ふ事

○甜藏穴是ハ甜と云ふ事と云ふ事
側仙穴是ハ片身打と云ふ事と云ふ事

○伏胎穴是ハ前胸打ム所時生野毒治スル
○屎門穴是ハ鳥尻突ノ所時治スル
○痰止

○羽端穴是ハ羽搔ル所紙と塗ル
○曲節穴是ハ初ラ打羽杯ノキゴイタル時大根と
○痰止

○脛脚穴是ハ別足引ク時大根と
○掌穴是ハ蜘蛛腫ル時紙ヲ醗ム浸ル
○初頂穴是ハ頭打ム所時紙ヲ
○鼻頭穴是ハ鼻毛ヤル所

○頂^點穴是ハ後頭打ム所時紙と
○胸先穴是ハ後胸打ム所時
○痰止

○脇穴是ハ胸氣羽搔或
○痰止

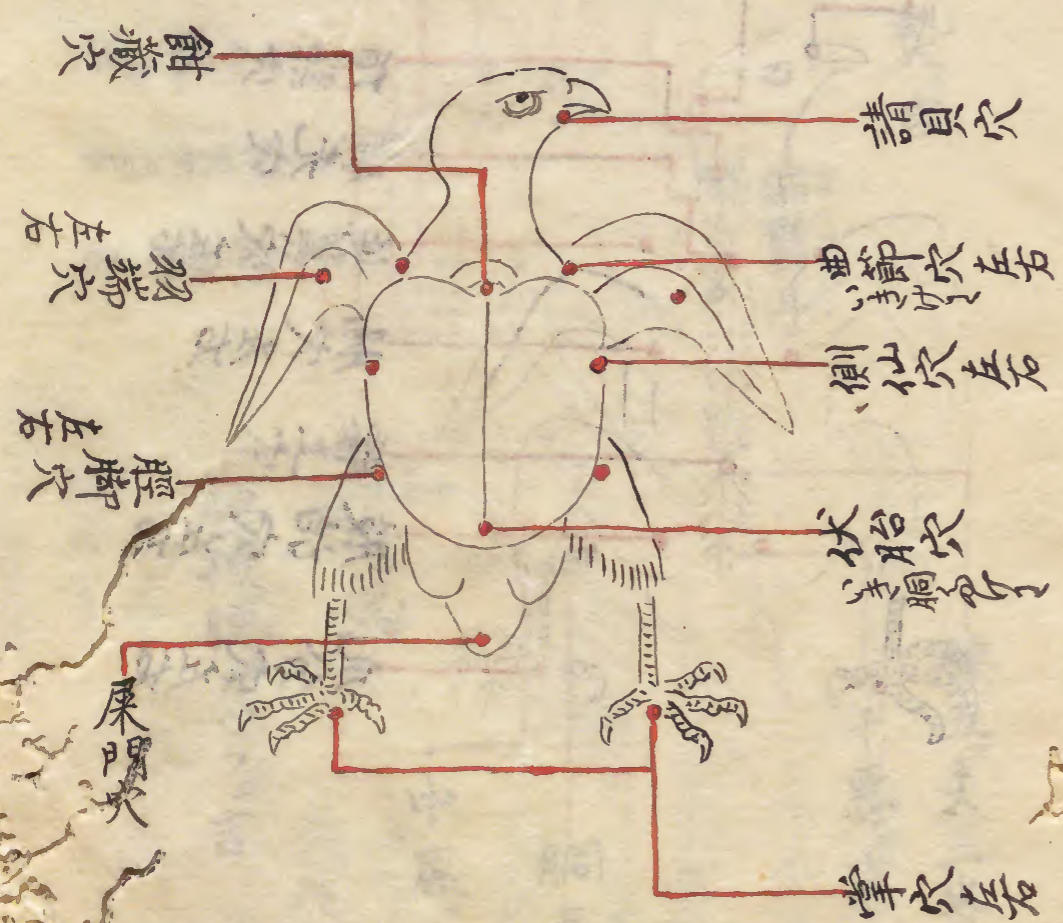
○延翼穴是ハ羽ヲク
○痰止

○腰上穴是ハ後胸打亦下リ
○痰止

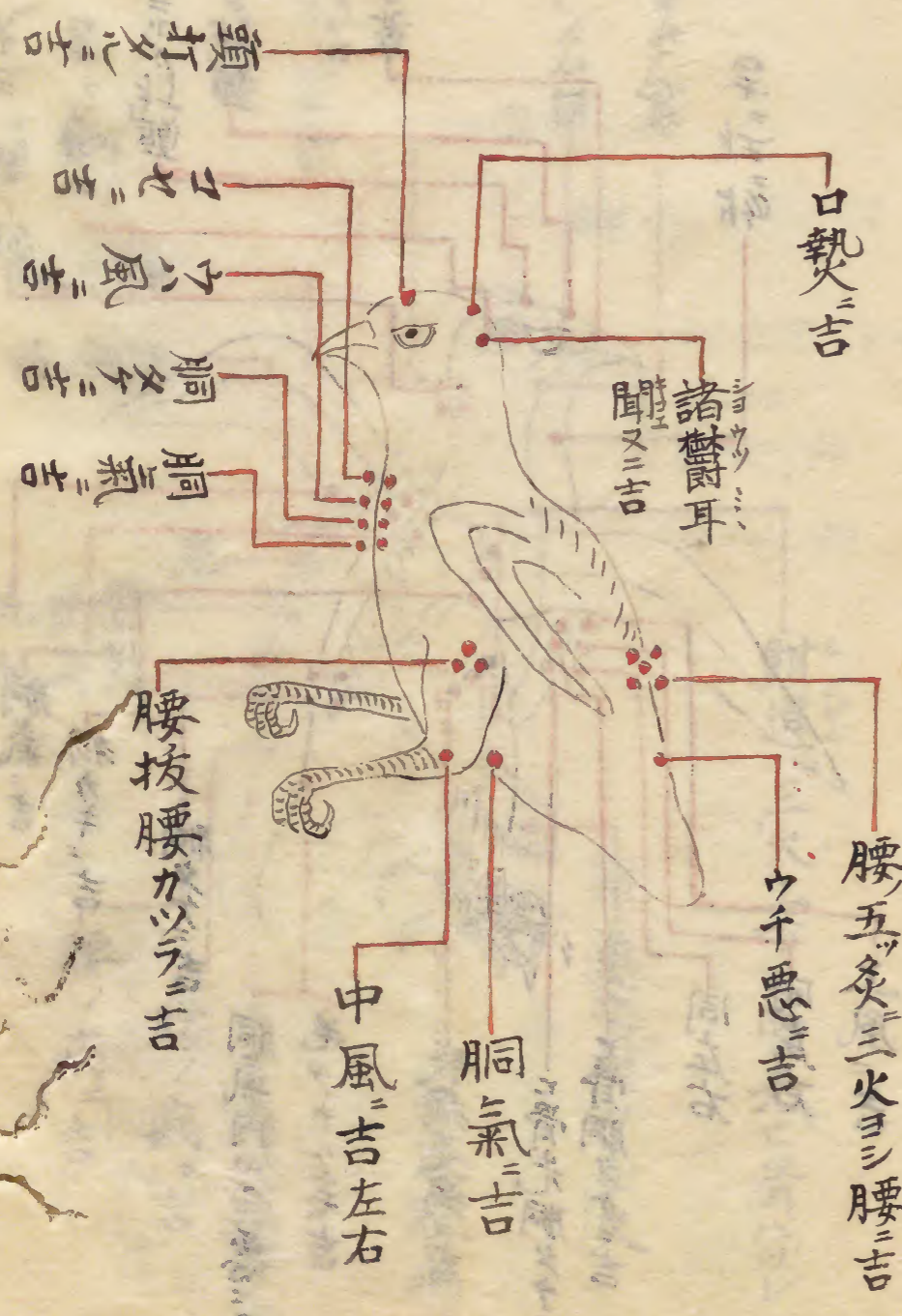
○股泊穴是ハ股引腰痛
○痰止

前見鷹

後見鷹

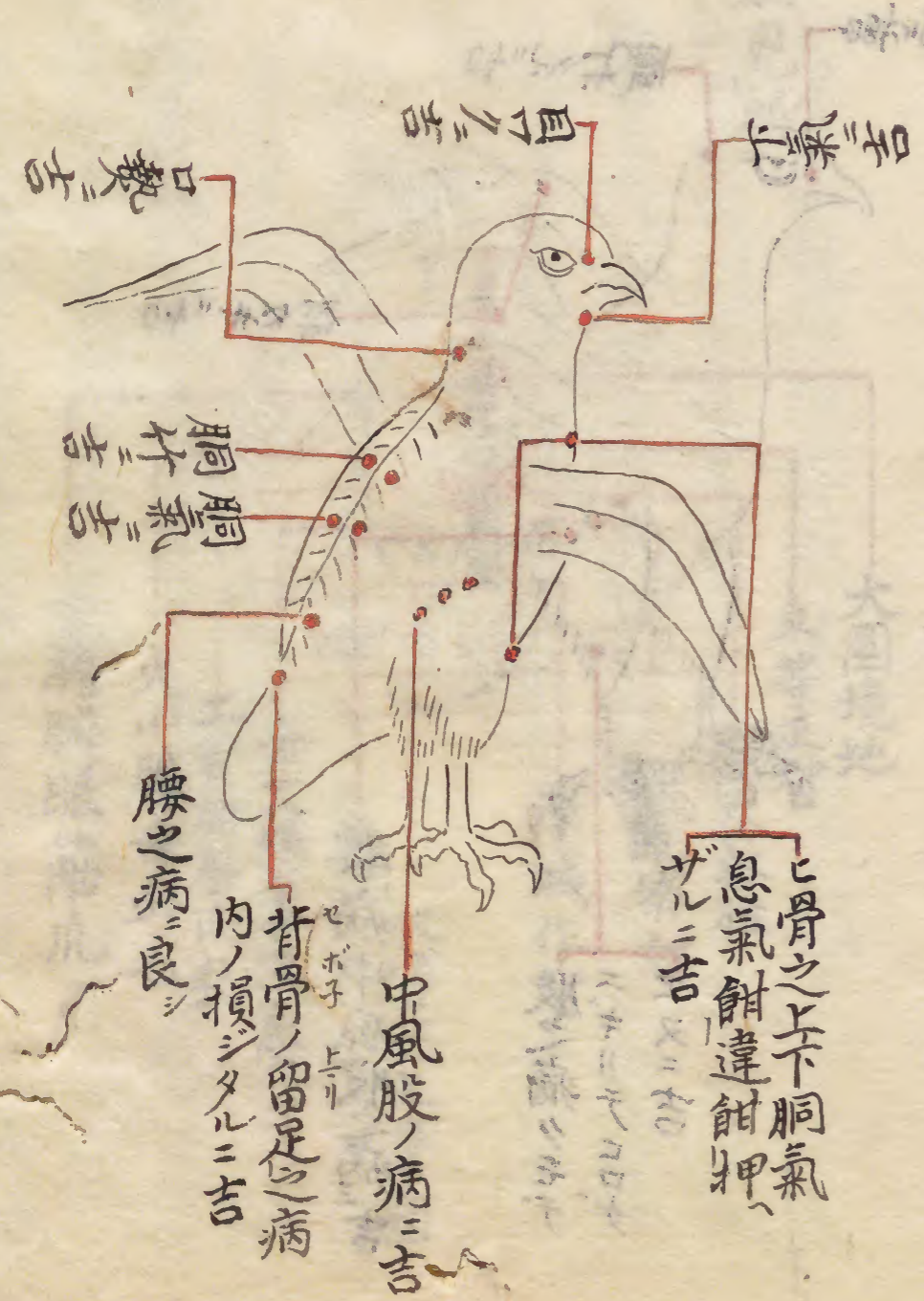


彼と此の二志の一致する一者あること一
 〇凡合穴是ハ魚目杯足ハ裏腫此ニ紙成涇水
 志見一者ハ病ハ一

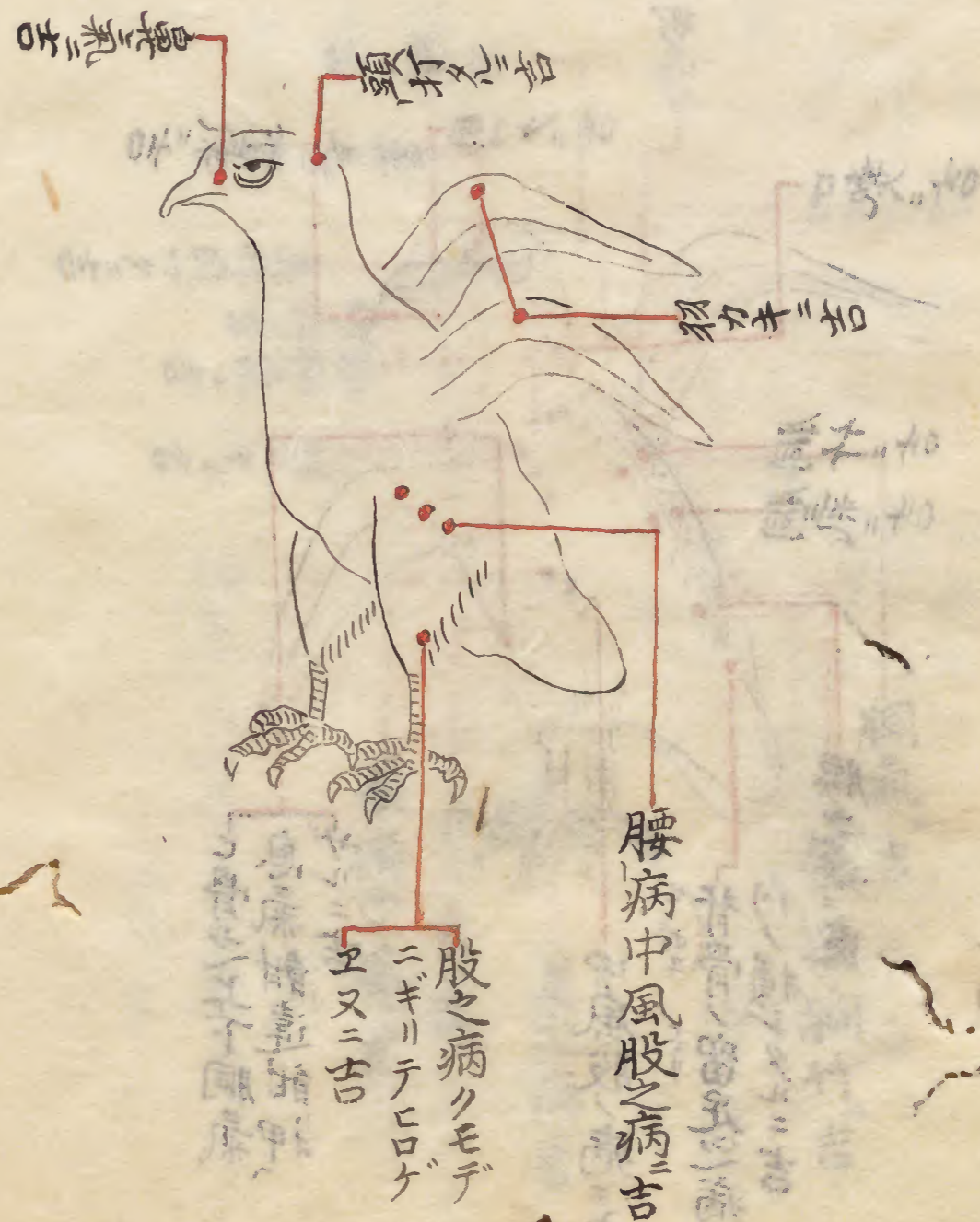
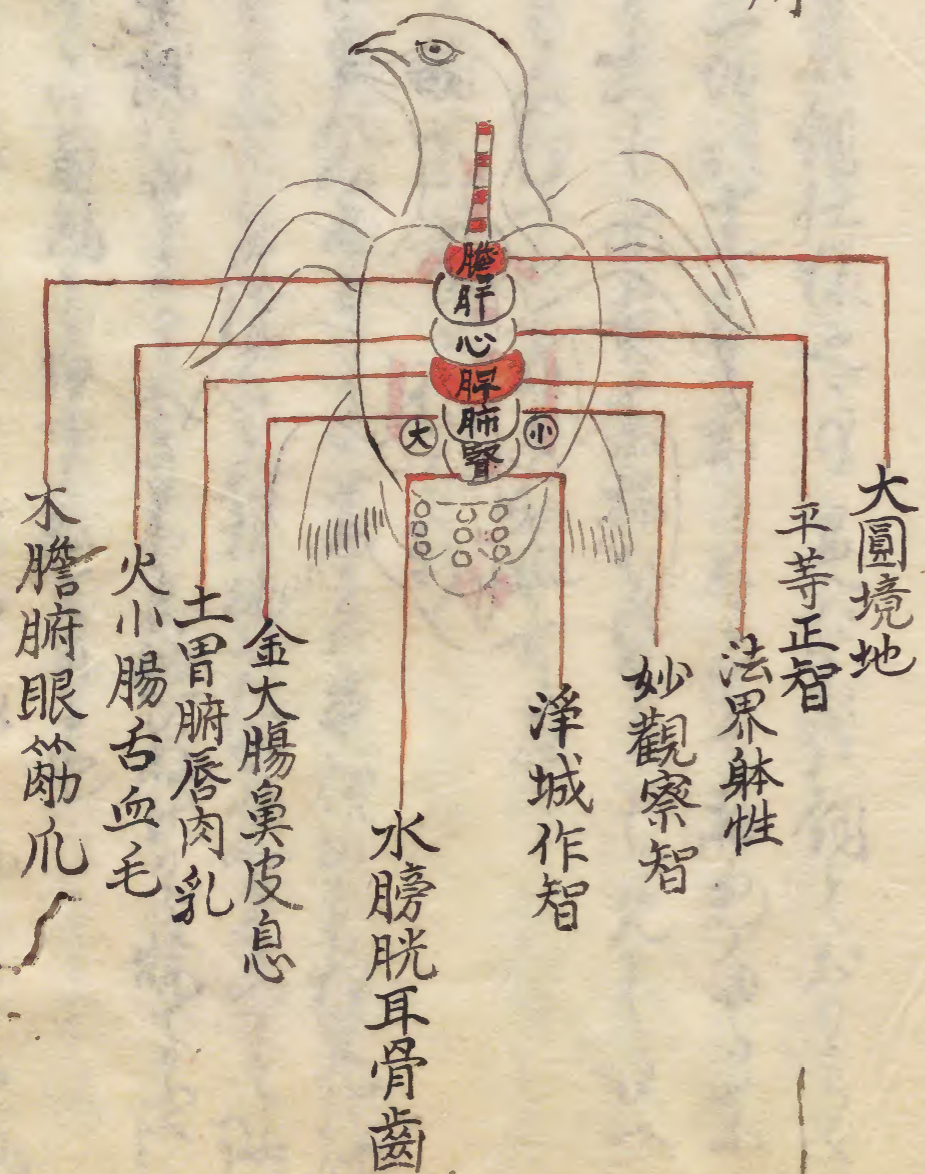


後見鷹

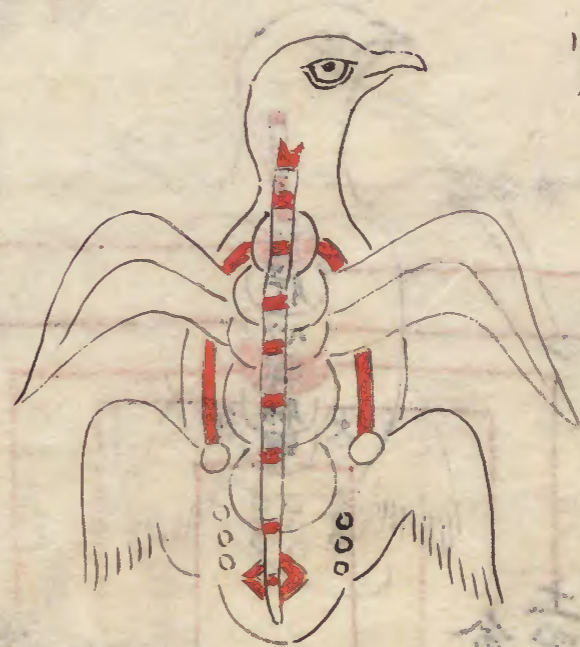




前之臟腑見所



後之臟腑見所



不潔相類
大小腸
土官
金入
大回
土官
金入

後之臟腑見所

一 腎臓の葉の仕様之り 是の葉は腎臓の葉の仕様之り
 一 腎臓の葉の仕様之り 是の葉は腎臓の葉の仕様之り
 一 腎臓の葉の仕様之り 是の葉は腎臓の葉の仕様之り

此の葉は腎臓の葉の仕様之り 是の葉は腎臓の葉の仕様之り
 此の葉は腎臓の葉の仕様之り 是の葉は腎臓の葉の仕様之り
 此の葉は腎臓の葉の仕様之り 是の葉は腎臓の葉の仕様之り

此野先生の書に云くは

人參と云ふものは今志のて煙を此葉を釣

い人參の生めてもさうさう思ひてい

若葉此胸を打つと血下しよ道のつらさを焼て

若葉此ほとあつて固くあつて思ひて思ひて

い人參の赤らんあつて思ひて思ひて

若葉此目も思ひて思ひて思ひて思ひて

若葉此口を打つと血下しよ道のつらさを焼て

若葉此胸を打つと血下しよ道のつらさを焼て

若葉此目も思ひて思ひて思ひて思ひて

若葉此口を打つと血下しよ道のつらさを焼て

若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて
若葉此葉も思ひて思ひて思ひて思ひて

とあるはれは、（？）の葉をわけて粉にして湯のふく
若草は細くわけて目薬のわらに焼く包入
湯にわらを煮ゆる湯事あるは、（？）の葉を焼くや湯道
若草とわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる
ひこまの湯を焼く包入
らる湯とを煮ゆる

湯とわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる
若草は細くわけて目薬のわらに焼く包入
湯にわらを煮ゆる湯事あるは、（？）の葉を焼くや湯道
若草とわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる
ひこまの湯を焼く包入
らる湯とを煮ゆる

此湯の病は、（？）の葉をわけて湯とを煮ゆる

若草はわらの腫れ汁をわらに焼く包入
股の葉をわらに焼く包入
若草はわらの腫れ汁をわらに焼く包入
毒液をわらに焼く包入
若草はわらとわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる
若草はわらとわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる
若草はわらとわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる
若草はわらとわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる
若草はわらとわらとを煮ゆる湯目とらる湯とを煮ゆる

若草は草井と云ふに草あふふらあふせしうの 脱字

。まはさるゝのいふいふまはさる

からんあふあふいふ まはさる といふのま

地竜 土し 他うらのまはさる

右水い出のませい一をいひま

。是れまはさるいふまはさる

左右破まはさるまはさる一一のまはさる

。まはさるまはさるまはさるまはさる

まはさる 是れまはさるまはさる

まはさるまはさる

まはさる

右血のまはさるまはさるのまはさる一一のまはさる

一一のまはさる

和名集藥性論

郁李仁イクリニ平

唐物也キサノ實ノヤウ也打碎中ノ實ヲ取テ使イクリニソノ

ヤウ巴豆ノ如帝包也

葳靈仙イレイセン温

唐也日本ニモ有物也根之サイシニ似タリ

井花水イハナスイ

ヲシタトクニタル水ノコト也

伊樓イロウ君君

蘿蔔子ラウボウシ

大根ノ實也唐之大根ノ實トイフ

鹿陰ロウイン

シノタケリ也

栢子仁ハクシニ平

上皮ハサレニシキ茶也日本ノゴヤクタンノ實也少煎ル茶也

白頭翁 ハクシュウオウ 温 花黄色也冬花咲草也血ノ道ノ薬也キサ

村射草 ハクシキリササ コモヤシタケタケタカクシテ葉ナガシトクナシ

葉羅梨草 ハヤシササ ドクナシ野ニアル草也少ニライアリ

鵬砂 ホウシヤ 鵬鵬同 （ホウホウ） 使也一説ニザイルトモ云シロカ子細ユニ使

赤ハ人ヲコロス黄成ハ人ヲソシサスホクセウ云

盆硝 ボムセウ 石薬也ホクセウトタグイ也 塩 シホバゴトシ

片腦 ヘンノウ リウノウノコト也

杜仲 トチク 思仙本トモ云唐ノハイニユミノカハ也唐ハ堅ニモ折

テミルニ糸有コニカニキサニハチカミヲスリテ酒ヲ以テウメテヒタシ一時ハカリ置テ煎リイトラ取手ノ内ニテモ日本ハイニユミヨクニタリ是ヲ以テ人ヲタラス火ヲヨハクシテイル也

鳥 トリ 鳥 トリ テシタイチヤウヤクトナリ ウヤクノコトカ

鳥藥 トリヤク 平 神ノ實也 （トチク） コンホナリ

竜眼草 リウガンサウ ノキノリトモ云イカニモチイサキノリナリ煎ノ用

尾五 ビゴ 野山ニ有花黄色ニ咲也

若紫 ワカムラサキ 毒アリ野老ニヨク似タリイヒツハテノ根也唐ドイ

何首烏 カシニウ ハラトモ云葉丸シフキ玉ト云物アルイハラニ似リ秋ニテ

澤蘭 タクラン 白水ニ三夜ヒタシキサミアブル又云山ノイモノハ似

犬青 タイセイ タリツル子也

續隨子 ゾクスイシ 竹田ノ云代葉ニ後コブラ用フジバカト云ノ葉ニ日本

樓骨銅 ロウコツドウ ニハトコノ葉也

寒 油ヲ丸事巴豆ノゴトシ唐ノ木ノ実也 皮ヲ去ル也 天竺ノ物也サドク有先酒ニヒタシノチニ 赤白水ニヒタス

禹餘糧石

ムテサキ色ノ石也カハラケノ上ニスエテヤキ
スリ水敷ノツカア
クスリヤニウルアフリテホニ

岩ヒバ也

紙ニ包火ニウイス

唐ノ草也根ナリ白水ニ一夜ヒタシ用ル也

石菜也碎テミレバクシロクニ似タリ

唐ノナツメノ実也クロイロニナル程イル

花黄也ハサイゴ也

シエト同ゴトナリシエハ花ムラサキ也

無毒平バセウノイ也

水邊ニ有リ

附子

卷栢

荒花

骨碎補

琥珀

酸棗仁

柴胡

金輪草

金星草

禹餘糧石

荒花

骨碎補

琥珀

酸棗仁

柴胡

金輪草

金星草

金沸草

酸石榴皮

舍利子

苴戸慮草

穿山甲

ラグルニ也 花黄ナリ

スジヤクノノ実ノ皮也

蘿ノ実ノヤウナリ 鈴ノヤウニ成テ後
エミテ四ツニナル也

野ヤブニ有リ 草也ツルナリ

蛤粉ニミゼテイリテツカウゴトモ有
テウライムサメニテヲロシテ用唐ノ

ツクモクノ皮也人ノ尻ノヤウ也

草菜也 鬚ノ羽尾ニヨクキク也出ス

仙醫當 君 菜ナリ

ニワノエカテクサ

テイタウ草

防已

ヘンギヨ

千ヨバウ

千ヤカンセキ

リウカン

ヲム

ワカミトリ

カンサイ

カワラベ

田ニ有ケリノト云鳥也

タシニク

タイセキタウ

タイサイ

タヒ子草

ソクセンズ 唐物也

サウノヒトクキ

谷地
ヤキノ
洗水也

クワリ

クワヤシ草

クキラムシ

ヤマウハ

ゴウリヤウゴウ

ナナシ草

天南星ノコトカ

サイマク

大根ノ黒焼

サルアハヒ

ミヤウチンセキ

ミヤウチン

シヤクオンゲ

ロハラ草

モウチウ

唐ノアブ也

モクソクセン

モクツウロ

セイレイ

スシヤクロ

考之茶之異名之事

コ坪ノ水トハ

梨子ノ木ノ枝ニタニル水亦ヨシノ切目ニ
タニル水也

忍ノ水トハ

初テ女ノカゲニナル血ヲ云ソレナクハ子トモ
ノ小便ヲ代ニツカフ也

桐坪ノ水トハ

桐木ニタニル水ヲ云也

大海ノ茶トハ

アハビノキ黄腸ヲタラ云也

カクレニシキトハ

月水ノ事也カケムラサキトモ云也

夜取澤ノ水トハ

男ノ小便亦和合インヲモ云也

十九滝ノ水トハ
白川ノ水トハ
夜取柳トハ
山ノウサキノ角
サイノ角トハ
シノ目トハ
ムサウカントハ
雀カクレトハ
ノサラシトハ
クハシトウ草トハ

女ノ小便也
男ノイシヲ云也
陰毛ヲ云也
山ノイモヲ云也
皂角ヲ云也
馬ヨメヨリ出血ヲ云也
サルアハヒヲ云也
麻ノ生立ヲ云也
人ノカウベヲ云也
カラスウリノ根ヲ云也

ツチニシキトハ
山立姫トハ
タカヌホ子トハ
コハホ子トハ
大ホ子トハ
ソトハトハ
澤ノミクシトハ
山ノメトハ
キラシ草トハ
モズノクサクキトハ

ムシ蛇ヲ云也
カフクミズヲ云也
廉ノ一束骨ヲ云也
雉子股ヲ云也
タカナノ葉ヲ云也
人ノ耳ヲ云也
丸スケ^菅ヲ云也
ウチギヲ云也
カミ草ヲ云也
木股ニ有カワズホトカゲヲ云也

火ヤクシ草トハ

小ヤクシ草トハ

アサシラケトハ

庭柳トハ

天南星トハ

ハンカトハ

天ヤク草トハ

川骨トハ

エヒヤウヒトハ

トウ 千ウカウトハ

イタチノシノキヲ云也

千シハリヲ云也

ハコヘヲ云也

メハジキカトウ草ヲ云也

火ヘキスヲ云也

小ヘキスヲ云也

スゲノ根ヲ云也

ヨシノ根ヲ云也

エヤナキヲ云也

カウムシノ根ヲ云也

ナキハ草トハ

ミソクトハ

フキノ菜トハ

カイトウノ白茶トハ

コホウトハ

玉水トハ

ミフシ草トハ

ムラタキトハ

ヘイ水トハ

ボウゴシトハ

セキシヤウヲ云也

ナツメノサ子ヲ云也

鳥井ノ内ニ在エモギヲ云也

塩カニニ在カタ塩ヲ云也白茶別也

蜂ノ巣ヲ云也

イモノ葉ノ水ヲ云也

稻ヲ云也

ヒキヲ云也

白水ヲ云也

チカヤノ根ヲ云也

ハンカクストハ
カヘシ菜トハ
シヤウヒトハ
ケイ水トハ
茯苓トハ
白菜トハ
三菜トハ
四菜トハ
五菜トハ
六菜トハ

廉ノ目ヲ云也
銅ノセシクスタ云也
蛇ノ又ケカラヲ云也
庭鳥ノ玉子ノ白味ヲ云也
松ノホトヲ云也
天南星ヲ云也
石灰ヲ云也
カトウヲ云也
茯苓ヲ云也
シキヒヲ云也

七菜トハ
八菜トハ
古木ノ水トハ
セキシヤウノ水トハ
トウ水トハ
シヤウカンノ油トハ
コシ油トハ
野紫トハ
リウコ錢トハ
羊髓ハ

蓮ノ葉ヲ云也
松竹ニタニル水ヲ云也
朽木ニタニル水ヲ云也
石ノクホニタニル水ヲ云也
桐ノ木ノ葉ヨリ落ル露ヲ云也
子イサキ鳩モ亦雲雀ヲモ云也
コシ油ヲ云也
ヲトキリ草也
五珠錢ノコト也
羊ノ乳也

リウカンハ

下馬草ハ

穀薛子ハ

草^{茎を}麻子ハ

火青ハ

楮實子ハ

テシガイハ

ナカキノ実也

三禮草也

粟ヲ地ニ捨テ二三寸ニナリタル時

根ニ付タル粟ヲ捨テ青色ナルヲ用

フトコナツナ也

庭床ノ木也

カウズノ実也

蕎麦粉也

宇津文流鷹之書

卷九

條目

一 鷹療治方歌九拾六首

一同分 百拾五首

乙上ニテ條

鷹百首 和奇卷上

著者此胸氣乃有とくくや

時小吹く風う

著者とくくく三國とくく亦胸氣此とく
うくや浦とく浦山とくくくくくく
吹くく風とくくくくくくくくくく
の葉ハ浦代とく山とく有とく風此とく胸氣ハ有
とくくくくく打たれくくくく胸氣ハ
と胸とくくくくくくくくくくくく
著しハとくくく胸氣とくくくくくく

七木の道と菜ノ甘苦と知て山川ノ行々病と治
三人れも一はばばを言ふとあはれとて

これあつとて後ノ一ノあり

けり人のこゝろ後リ多き言ハ必胸氣はさるん
大れものあを喰有胸氣と成と名しり何と
もくさるひいつとてもとを成てけり言夏秋を
いつしや病ことと云ふ禁一ても禁毎食物
神歌回答も中一胸氣は出治と

三 胸氣を肺ハ志ハ一とあり

下息早一 目と付てり

是も胸氣を言ふ事之必胸氣ハ脈ハ弱あり
毛と名し息と名し^突なり毛とありり其
とつとも然^凡合ものなり

胸氣を肺と云ふは

茶と云ふは

胸氣の言ハ振舞ハ必肺とあり捨て茶と云
補多めと云ハおむと云重の字之唐茶と云
へとの物

何と云ハ

胸氣れ

あはひさうのひよとて事人のあはひの板と
とあはす將にさうと流して志けくのをさる
物なりさる事必古き胸氣がらうとして胸
とけしけ板をさる事

六 胸氣をみみられうらうらうりさる
はまやう麻の志ありたり

胸氣を必内赤一是と経た内とてあ
らさる内と赤くさる事と志と事
と麻と志のあたりと甜く流して
七 胸氣をいりりはんてさる事

胸ととりて散 散 茶とせ

胸氣を都孝仁と飼て是唐物と茶は
實に板と打碎して中れ茶とては茶也
内下物と油と丸の巴豆のこも胸氣に
是中一茶也

八 肉とんてさる事 補てさる事 けい

黄蘗 沉 伽羅

膏れうらひの補をさる事とては茶也
あはさる何もお分細末と細とて

九 是白粉のこも茶とてさる事

其れを尋ねて幸に領へ

去日跡をみせ給ひていんあめをすり交はせ給ひて
業領をさしおすりあらしと云ありいさのみ業
ハ跡をせし業をさし給ひて亦此の業をいさ
給ひて業をいさ給ひていさ給ひていさ
け業をいさ

+ 胸を尋ねていさ給ひていさ給ひて

いさ給ひていさ給ひていさ給ひて

胸をいさ給ひていさ給ひていさ給ひて
療をいさ給ひていさ給ひていさ給ひて

いさ給ひて脈のいさ給ひていさ給ひて
秘をいさ給ひていさ給ひていさ給ひて

+ 夜流を胸をいさ給ひていさ給ひて

いさ給ひていさ給ひていさ給ひて

いさ給ひていさ給ひていさ給ひて
いさ給ひていさ給ひていさ給ひて

+ 若きれ給ひていさ給ひていさ給ひて

いさ給ひていさ給ひていさ給ひて

いさ給ひていさ給ひていさ給ひて
いさ給ひていさ給ひていさ給ひて

子... 我... 所... 見... 事
と... 書... 心... け... 事
き... 事

十三
大... の... 粉...

い... 物... 事... 大腹... 唐
史... 用... 細... 可... 火... 川... 國... 州

國... 山... 枝... 細... 長... 事... 大...
く... 南... 枝... 細... 長... 事... 大...
云... 方... 事... 浸... 事... 大...
び... 末... 事... 合... 事... 可... 事...
古... 事... 事... 事... 事...

詰... 病... 事... 事... 事... 事...
と... 事... 死... 事... 詰... 事... 事...
あ... 事... 事...

三... 事... 事...

前胸と打志... 三浦此山と杖なりといりんあめ一説ハ能ん...
云んを三浦此山と云説も何も杖なりと云ハ此骨
のあさりあつて前胸と打志... 是亦一説ハ前胸と打志...
是明神流ニ不用

うりうり此好とけあらん...

我々の血と志ありうり...

見ハ房うう... 能け是れあつハ丸根と...

造り...

七 前胸の葉ハ...

椀皮とあつて...

造胸の葉も... 死も... 葉も... 葉も... 葉も...

十八...

...

又とていよま^強ち^弱くはれ二はて苦悪のゆへ茶花
 生たし何ひて花をみとて草をとりうすま
 ハ麻比角してう花をこと云うけさハ花を花
 うとておニうすまをわたりしお命命命
 花とてとておニうすまをわたりしお命命命
 十九
 又とていよま^強ち^弱くはれ二はて苦悪のゆへ茶花
 生たし何ひて花をみとて草をとりうすま
 ハ麻比角してう花をこと云うけさハ花を花
 うとておニうすまをわたりしお命命命
 花とてとておニうすまをわたりしお命命命
 十九
 又とていよま^強ち^弱くはれ二はて苦悪のゆへ茶花
 生たし何ひて花をみとて草をとりうすま
 ハ麻比角してう花をこと云うけさハ花を花
 うとておニうすまをわたりしお命命命
 花とてとておニうすまをわたりしお命命命
 十九

又とていよま^強ち^弱くはれ二はて苦悪のゆへ茶花
 生たし何ひて花をみとて草をとりうすま
 ハ麻比角してう花をこと云うけさハ花を花
 うとておニうすまをわたりしお命命命
 花とてとておニうすまをわたりしお命命命
 十九
 又とていよま^強ち^弱くはれ二はて苦悪のゆへ茶花
 生たし何ひて花をみとて草をとりうすま
 ハ麻比角してう花をこと云うけさハ花を花
 うとておニうすまをわたりしお命命命
 花とてとておニうすまをわたりしお命命命
 十九
 又とていよま^強ち^弱くはれ二はて苦悪のゆへ茶花
 生たし何ひて花をみとて草をとりうすま
 ハ麻比角してう花をこと云うけさハ花を花
 うとておニうすまをわたりしお命命命
 花とてとておニうすまをわたりしお命命命
 十九

一水草
 下三礼茶とよ又春波三礼茶と秋白
 小茶ありて茶とよ又春波三礼茶と秋白
 丸モノ一粒の子出れば出藏ノカサイハ庄色小児が茶と

専用と云へりけり。此は紫文に花文を浦にけり。
 古 香と云へり。鎮しは人あはれり。
 竹のあはれり。ちりあはれり。
 けり。香と云へり。虎の皮は馬籠と銅の
 香と云へり。虎の骨は虎骨と云へり。
 因も虎膽も性も竹の葉と云へり。
 香炉に火をたておきて。香を焚く。竹の葉と云へり。
 争して竹の葉へあはれり。と云へり。
 其の 著書は八代と云へり。其の後を

そのくちや。よきと云へり。
 けり。神歌詞答と云へり。云々。書と云へり。其の
 名あり。書加え物。紙の鼓智子。答と云へり。被理
 と云へり。天竺といふ。今入して。云々。ちりあはれり。
 宿と云へり。紙の理を皆神。と云へり。記取と云へり。
 瑞雲に麴此と云へり。其の葉と云へり。
 其のめり。と云へり。す。云々。
 麴ハ。と云へり。其事と云へり。と云へり。此は。と云へり。其の
 云々。未介。合銅と云へり。是と云へり。と云へり。其の麴と云へり。
 其の葉と云へり。と云へり。と云へり。と云へり。と云へり。

其塩酒も穴より奪りあへり

茶種よりみけつりけり

けり塩酒も穴より奪りあへり

焼酒も穴より奪りあへり

の茶也又酒の唐茶を使時酒を毒とす

七八年茶をすりて少くしてけり

白氷に浸也

腫物腫物の腫腫

腫物腫物の腫腫

腫物腫物の腫腫

是ハ胸華其事が穴より奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

血を奪りあへり

北の 胸あはれいづく痛きもさるる

かよりの草を焼く切く

うらみのあはれ馬あはれもあはれかよりのあはれ

鳥雄鷲 ウツケイ 命と討るは

展 ツギ げりとあはれいづく

今も胸の融喰 ウツケイ あはれいづくあはれいづく

不吟の切る死と云也秘く

世六 胸あはれ海氏の御代とあはれいづく

是の胸あはれいづく

いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

胸親と云病ハ胸内ハ魚虫を結ぶはよく
上リそれハ結と揮動ハ心動ハ心動ハ心動
胸をらと云たハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
九仙八海の内ハ大魚ハ小魚の心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

胸病ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

昔ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動
心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動ハ心動

ついでにこれ花と焼く
物こそ花の香を留めて見よとの物あり

四十 花の香を留めて見よとの物あり

零凌香ハ名入あり

けふも花は花を留めたまひし物かたはし
しる香もやとる香もよ零凌香と名入ぬけ
葉かこれ葉は何も花の香と名入申に
の九穴のくまも花の香と名入

甲 花の香を留めたまひし物かたはし

花は花を留めたまひし物かたはし
不登又花を留めたまひし物かたはし
花の香を留めたまひし物かたはし
花の香を留めたまひし物かたはし
花の香を留めたまひし物かたはし

花の香を留めたまひし物かたはし

花の香を留めたまひし物かたはし

花の香を留めたまひし物かたはし
花の香を留めたまひし物かたはし
花の香を留めたまひし物かたはし
花の香を留めたまひし物かたはし
花の香を留めたまひし物かたはし

里三 胸中かきめく響ハ様ノ肝

世にかりとれ何なるらん
是も胸の内かきめく響の横ハ肝とよめよと云
し胸と是もいふ根あるは

胸のうらみかきめく響のくさくさなり
野にれちるといふよらん

しんあうらと云ふは葉と胸とをさうらと
用ふく響の葉と響の形を
若葉は葉と葉れあは

痛しは

けいひ響れ病ニ葉れあは
葉ありハ痛しあし物とつけしは
回答け病ハ葉味をあるは
子葉あはし病あはしは
てんてんてんてんてん

子葉のしんあはし
山賊のしんあはし
久ハしんあはし
本は葉れあはし

是と云ふは...
法統ノ...
ウツク...

根ノ...

葉ノ...

是ノ...
又葉ノ...

是ノ...
唐ノ...
葉ノ...

術ノ...

是ノ...
時ノ...
福ノ...

のちとあげ出〜のちのち念が〜ありてお
死に死て後いも〜又そのま
〜のちをせよれ〜をせよ〜
〜のちを〜

腎の脈ろく補用する薬は

おき薬を連進させよ

脈補する時〜と焼て飼へよ〜
す〜をさげ〜白ラ用又連進と〜

若き人鼻元と〜

脳と臟と〜

鼻氣鼻毛同事れ也〜鼻元肺臟を
息〜息〜鼻毛の腦の内〜
元〜鼻元〜鼻と〜鼻元は是病
〜鼻氣元大黃當歸茯苓と

肉菜よ〜水と〜

肺は肺食する薬也〜茶飼〜
志〜皮肉〜毒血大黃〜肺集
下物〜大黃の唐を用

鼻毛よ〜のち〜草の種あり

粉ヲ吹ハ春風ニ

鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス
鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス
粉ヲ吹ハ春風ニ

鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス
鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス
粉ヲ吹ハ春風ニ

鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス

鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス

鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス

鼻竇ニ汁吹テトク毒ヲ出ス

用^ナ鳩^ナと云る唐^ナはけ大腸子并喰^ナけける人
 毒^ナあり大^ナ思^ナ入^ナる汁^ナよそ毒^ナと死^ナる者^ナ
 目の^ナ是^ナれ息^ナはく^ナな^ナあ^ナり^ナは^ナく
 くら^ナげ^ナある^ナ橋^{キツ}事^ナ也^ナなり
 是^ナも鼻^ナの病^ナよそ目^ナれ^ナ前^ナの符^ナい^ナく^ナき^ナは^ナ珠^ナ
 よ^ナく^ナげ^ナ橋^ナれ^ナ配^ナと^ナま^ナは^ナけ^ナし^ナよ^ナと^ナま^ナ
 鼻^ナ蛭^ナハ^ナ腦^ナの^ナ内^ナと^ナけ^ナり
 月^ナは^ナ捨^ナり^ナ志^ナあり^ナひ^ナく^ナき
 ち^ナあ^ナひ^ナい^ナそ^ナの^ナ中^ナに^ナあ^ナる^ナと^ナ死^ナ時^ナ月^ナの^ナさ^ナか^ナ
 或^ナは^ナ付^ナく^ナも^ナの^ナ老^ナと^ナま^ナ必^ナか^ナ堅^{カマ}固^ナが^ナなる^ナ捨^ナく

鼻^ナの^ナ子^ナと^ナ指^ナす^ナる^ナ風^ナも
 鼻^ナ蛭^ナ子^ナと^ナほ^ナる^ナし^ナら^ナり^ナと^ナ粉^ナは^ナく
 指^ナは^ナ皆^ナ死^ナ之^ナ何^ナ首^ナ鳥^ナ小^ナ二^ナ極^ナま^ナい^ナり^ナし^ナら^ナり^ナは^ナく
 老^ナの^ナ筋^ナは^ナタ^ナリ
 鼻^ナ瘦^{ヤセ}ハ^ナ以^ナの^ナち^ナあ^ナる^ナを^ナあ^ナり
 鼻^ナの^ナ筋^ナは^ナ太^ナく^ナと^ナ鼻^ナは^ナ細^ナく^ナなる^ナは^ナく
 鼻^ナは^ナ赤^ナく^ナ鼻^ナは^ナ出^ナる^ナし^ナら^ナり^ナは^ナく
 鼻^ナは^ナ赤^ナく^ナ鼻^ナは^ナ出^ナる^ナし^ナら^ナり^ナは^ナく

鼻志ハナシと息イキの意イハハママフフハハハハ

鼻ハナの毛ケと融ユハハセセ

鼻瘦ハナガサも息イキもモ皆ナラ此コノ下シタ息イキ早ハヤ但タ息イキけケ小コハハ小コ

鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

鼻瘦ハナガサと茶チヤの粉コハハ何ナニ種シユ也ヤ

志シ由ユ法ホウの皮クニ社シャ多タハハ何ナニ種シユ也ヤ

鼻瘦ハナガサニ志シ由ユ法ホウの皮クニ社シャ多タハハ何ナニ種シユ也ヤ

茶チヤ書ショハハ卒ソツ記キと事コトの何ナニ種シユ也ヤ

浸シム盈エイ虚キョ也ヤ

そこの二字ニジハハそこの何ナニ種シユ也ヤ

鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

押オシ入イテテ鼻ハナの茶チヤと書ショ也ヤ

鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

鼻瘦ハナガサと茶チヤの粉コハハ何ナニ種シユ也ヤ

鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

鼻水ハナヅクと鼻ハナの毛ケと立タハハ鼻志ハナシの毛ケと立タハハ也ヤ

朽木クシと何ナニ種シユ也ヤ

ぶすいといふ此物事と云はる鼻と云ふの間
ついで成たる成たる鼻朽すの後等と云
成りあつてと云ふ也

鼻水より鼻淵と云ふ也
黒焼めりてあひ業久

鼻淵といふ虫也せきといふ石と云ふ其の
ありんをいへもあつてつらと云ふ也

鼻よりいふ此の鼻と云ふは
火といふせきして寒と云ふは

おたいの鼻の顔毛を分て右余は打入る也

鼻水より鼻淵と云ふ也

木の皮と鼻と吹出と云ふ也

鼻よりいふ息と云ふは

ぬきと云ふ物と云ふは

鼻腫ともいふ此服を以て見にくきことを
と云ふ皮膚の毛を鼻の毛と云ふは
追つ物と云ふは
かりし物と云ふは
おしメ末メ木分合銅の内業と云ふは鼻腫

鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用

鼻腫と云ふは鼻と云ふ事也
 目と云ふは目と云ふ事也
 鼻腫と云ふは鼻と云ふ事也

鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用
 鼻腫ハ風ノ志ニヨリテ見ルハ内葉ヲ
 用

打穿くも 粉なり

蝶ハの

蝶ハ 虱ハ 菜ハ 瓜ハ 瓜ハ

但し 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

け 方 打 穿 く も 粉 な り

肉 菜 ハ 菜 ハ 菜 ハ 菜 ハ

虱 ハ 虱 ハ 虱 ハ 虱 ハ

是ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

血 虫 ハ 虱 ハ 虱 ハ 虱 ハ

皮 肉 と 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

血虫羽の根喰ちて 命ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ
菜ハ 血虫ヲ 羽ハ 其ハ 皮肉と 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ
瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

血虫ハ 蘿蔔子 黒虫と 等ハ 瓜ハ

粉ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

血虫ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

血虫羽の 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

血虫ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ 瓜ハ

は葉ハハぬきそれしと粉ニテ粉とすし合て根
の根ニ引ハ能く

血虫社作と因よのそゆと

とみよとありて根の根とを

是ハ初虫血虫ノ名分とありてゆきしとありて血

虫ハくさしはくはくは根と根のくさしとく

はれ中ハ根とを

きれ根のくさし中ハ根とを

根と焼 根ありてありて

はれ中の根と根と根のくさしと根と根と根と根と

焼トをラハくしとを

根虫ハ葉藤トありてありて

ありてありて根と根とありて

け療とありて根のくさしとホカハし根と根と

大根のけとを

根虫ありてありて根のくさしと

根と根とありてありてありて

けらハ根と根と根と根と根と根と根と根と

ありてありてありてありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありてありて

志のうき

根みそ膏の根ハあせれ汗とくおて

わみやううきとくおて

是ハ根みそ膏此根の中久くする花

根みそ膏の根さる事あり

志ん此根とくおて

根の根あせれとくおては療心臓脾臓

せきとくおて

根みそ膏つとくおてと事あり

歳買とくおてみえとくおて

心臓の何れかのうき 歳買仙の葉ノたき根ニそ
けとくおて能くおてとくおてと事あり

歳買仙根莖葉とくおて

花買とくおてと事あり

元り膏の脾の臓は熱

志ん此根用治しと事あり

志ん此根人使つと事ありとくおて

膏のやとめて療と事ありとくおて

若き此辛若の皮肉成

あ悪く血られおてと事あり

けがハ重クラ体ヲ不使シ重クモラハ
必勝公也然レシラニモ皮膚ハ
くろり自光ヲ出ス

毛ヲ重クモラハ神トモ
くろり自光ヲ出ス

癩痛ニ能クモラハ神トモ

毛ヲ重クモラハ神トモ

癩痛ニ能クモラハ神トモ

癩痛ニ能クモラハ神トモ
癩痛ニ能クモラハ神トモ
癩痛ニ能クモラハ神トモ

癩痛ニ能クモラハ神トモ

癩痛ニ能クモラハ神トモ

癩痛ニ能クモラハ神トモ

癩痛ニ能クモラハ神トモ

かきしめぬこと

若草は目びらき肉くさるる

テシガイ 天蓋の粉と テイレキジヤム 葶藶子音

てんがいそだし人喰物といふまじし男あはれのみまを
と粉ニテ天のし粉にて肉菜にせよし家のまをり
とねんとさよふとねりし書にちあはれにまをり
つらんともや

何のりも若草は目眩し

若草は目眩し

若草は目眩し

鷹藥飼歌之卷 下

若草は葉うらむことゆめはしらりし若草は本草てあけ
若草はらんやうく若草の半柄は糸松草の針
若草はらんやうく若草の折らんぬひ糸のまらひはれ
巾の亂れ若草らんやうく若草の蛇のあけり焼て中後
若草のの穂あけり若草の野老とあけり入てま月
若草はらんやうくあけり目くさるる若草を焼てま
人参りて夏子れつてあけり若草の穂あけり若草を焼
若草は胸けらんやうく下りて若草を焼て
若草は目くさるる若草のわんがく若草を焼て

息を吐く甜き酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる

甜き酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる
あはれなるかたき酒の香りに酔ひたる

有明月
郭公

しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ

世帯

しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ
しつゝおのゝこゝろはなほおのゝこゝろのまゝ

蜘蛛手
のりかき

Handwritten text in cursive script, likely a list of contents or a preface, written vertically from right to left. The text is somewhat faded and difficult to decipher fully, but appears to be organized into several lines.

宇津宮流鷹之書

卷十

條目

一 諏訪明神流大事卷 上中下

但

療治方

齋巢右記之事

齋屋祭之事

已上

大事之卷

丈鷹仕人皆之業の首とんりたる事ありて仕と云
 大櫻ありと云ふ所ありて丈鷹は業味教との中に何と云
 海の一茶事や計記を志也験言ん業と云ふ事
 此命とのべして病ヲ治取ラ可也と云ふ事業と
 其志と云ふ事一王國或の飛け業と包大事己あり
 一昨日今日打たれりある事一可綱業業曰業甘草
 と思焼よりて綱業此中早ね進て若来一身と
 打中業と云ふ事と眼業前より下もや綱業と思付

其也けいふふ十二名草は肉くも才一の葉にたけそ
 く思ふへくひも唐と押のみていれさるけい葉と
 目く可鉤物こじらサウ是也
 一炷と見せ其炷と人し自せさるる一火のた
 かり縦ハ何故よそもさるる草は根とくぬのと
 とすより切て土^まの焼くして皮と耳
 三針完鉤是妙也
 一息氣れさるる愼くく葉曰葉甘草の根と葉
 鉤く葉ハ根とくぬも息れ早キ香くも用之亦
 鉤とくも香く用之

一唐と見せ其炷と人し自せさるる一火のた
 かり縦ハ何故よそもさるる草は根とくぬのと
 とすより切て土^まの焼くして皮と耳
 三針完鉤是妙也
 一息氣れさるる愼くく葉曰葉甘草の根と葉
 鉤く葉ハ根とくぬも息れ早キ香くも用之亦
 鉤とくも香く用之

取らざる人々は此業を以て能く持て守る秘法
亦此業ありて祖業を以て守りて才智を以て
此業を以て守る事不可有

一才智は余の才より少しも高き命は命は高き
水銀と少くしては志ありて高きとみては
けいふは法と持て守る秘法を以て守る
秘法を以て守る事不可有

一才智は余の才より少しも高き命は命は高き
此の死の守りては此の秘法を以て守る秘法

此の秘法を以て守る秘法を以て守る秘法
チセの草ハキリン草
ワノコト也

一此の秘法を以て守る秘法を以て守る秘法
此の秘法を以て守る秘法を以て守る秘法

一此の秘法を以て守る秘法を以て守る秘法
此の秘法を以て守る秘法を以て守る秘法

一 魚肝油を煮て茶に混ぜる事一
湯に時計を入れて煮たあげて茶に混ぜる事
一 冬に成れた魚を煮て茶に混ぜる事
一 常にお肉の煮たものを茶に混ぜる事
一 常にお肉の煮たものを茶に混ぜる事
一 常にお肉の煮たものを茶に混ぜる事

一 霧を煮て茶に混ぜる事
一 茶に混ぜる事
一 茶に混ぜる事

一 湯に時計を入れて煮たあげて茶に混ぜる事
一 冬に成れた魚を煮て茶に混ぜる事
一 常にお肉の煮たものを茶に混ぜる事
一 常にお肉の煮たものを茶に混ぜる事

明神流大事之秘薬條

可秘々

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "大事之卷中" and "一帯は菓と見たり".

大事之卷中

一帯は菓と見たりはるし山阿の先九字と曰方へ向
て切てかゝのまゝんと百丸唱て本の本を酒者
者ハ^強飯といふも^強鳥の子はかり丸を
けむりの二亦う六定けみして^積向ハからけ^芽とひ
あつてむおとけ^積りて^芽かやを折着うて
と^積平^芽と^積同^芽と^積あ^芽りて^積と^芽し^積の^芽
と^積酒^芽と^積は^芽りて^積七^芽文^芽と^積酒^芽の^芽と^積一^芽七^芽の^芽と^積や
けと^積あ^芽りて^積い^芽ま^芽い^芽て^積味^芽と^積は^芽りて^積岩^芽と^積し^芽も^芽本^芽と^積も
人^芽と^積も^芽て^積あ^芽りて^積細^芽と^積鳥^芽と^積押^芽りて^積胸^芽の^芽皮^芽と

引引して赤砂と見せしむる人々の薬業は皆
 く白くして一母を薬とせり一母を木の皮とせり
 此とあつて煙とせりたつて我々の海とせば
 とあつて薬とせり一母を唯一年計の太膏
 集鸚仰し如く如く一母をたつて一母をたつて
 一俵自茶はる張人の薬業は皆一俵自茶はる張
 と致して一母をたつて一母をたつて一母をたつて
 鸚仰し如く如く一母をたつて一母をたつて一母をたつて
 治系曰一母をたつて一母をたつて一母をたつて
 一俵自茶はる張人の薬業は皆一俵自茶はる張
 と致して一母をたつて一母をたつて一母をたつて

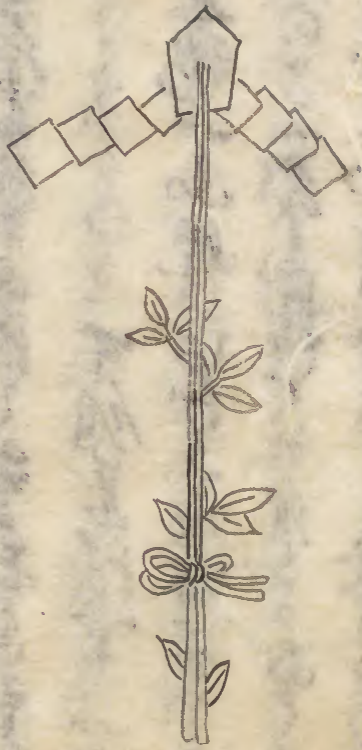
けりの薬の銅の治の
 一我々の薬業は皆一俵自茶はる張人の薬業は皆一俵自茶はる張
 袋と干すやめしねり一水銀と少加へ我々の薬業は皆一俵自茶はる張
 亦人の薬業は皆一俵自茶はる張人の薬業は皆一俵自茶はる張
 一銅と一母をたつて一母をたつて一母をたつて一母をたつて
 一入部りておれ薬業は皆一俵自茶はる張人の薬業は皆一俵自茶はる張
 の書と不物
 一我々の薬業は皆一俵自茶はる張人の薬業は皆一俵自茶はる張
 細業も亦我々の薬業は皆一俵自茶はる張人の薬業は皆一俵自茶はる張
 一母をたつて一母をたつて一母をたつて一母をたつて

水銀をいかにしてとす我らんと知りて親日海に銅
 へい主が許しけりして余の人よ相と八唯意を此
 へいしりしてけりし事か各意通の事物と
 ありし我ら使をある事とて余の人使はる事云
 事何しけりといふ事なり
 一 香く灰とありて耐火と志のそへいありて物と火
 へ向てと合志ありて日ほりて人のあつて水と
 さいふ一夫とりてほりて志のそへいと志とそへい
 焼くハも火志ありて事なり
 一 肉はらうと志と何と火吹しけりたて事か風吹とあ

一 山牛房の根と末といふは切ぬ根とあり
 て干ノ末ヲ指風吹れ時ハ口細く物種り掛釣ハ馬
 人の言吹く事とありて事なり
 一 香く書物たのゆへ香と志のそへいありて物と火
 とそへいなり可銅並れ事一山は黒鏡一山すの
 黒鏡一山鏡のいけりも右筆か合て事可銅人へ鏡
 人のさへあり物と云付る事なり
 一 香く山はれ事なり香業二日一ふあめを以て銀
 と香の若同大根とありて香の心若同水
 銀と少ありて物とハ物なり逢といふ人なり

可用物也

一 香屋まはり此沙魚いの大事



如新ニ魚いを切て魚串ハ二尺五分也志々木の枝であら
まゝいもつゝし二まり〜とゆゑのて葉一葉してあ

哥の云

此のまゝふ〜わきで〜して打り〜し
身〜たけの〜りあま〜

亦守り可書字は

水ハ是神慮神

水ハ是悪神木也

如新書し守りのゆゑ〜志々〜めし〜書〜出雲
大社と書也亦沙魚いとも香屋まはり〜と云
是守りのゆゑハ口傳
一 香屋まはり此大事



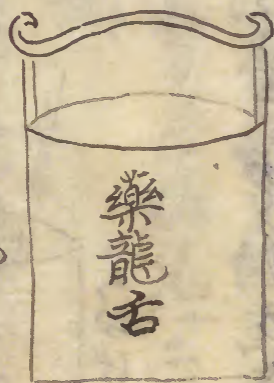
如新御座いとていそ屋をいそ屋に指す也
亦礼と書ていそ屋に押也

和光同塵結縁始
八相成道利物終

如新書ていそ屋に押也

一 薬水薬と薬を飼時をいそ屋に指す也
とてい桶に書也

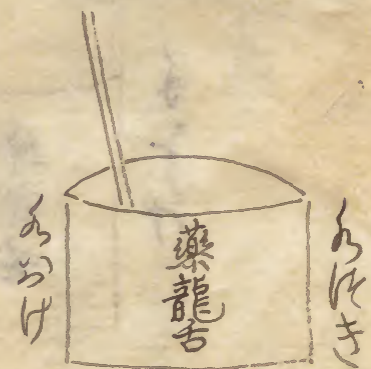
いそ屋
いそ屋
いそ屋
可入物也



一 水指をいそ屋に書也

子龍能

子龍 子龍の守り



右折んてろくせんたりちまひしき物しつて留くま
くまを茶端へ可入糖へは傳

明神流踏之秘法条々

鷹下巻書裏

- 一 脛氣比藥肉桂ヲ用先蛇骨ヲ細末ノ餅包彼黃
菜餅^ニ志^シ可^ク可^ク脛氣の菜^ニあ^らま^らす
- 一 同菜之事^ニし^ては^ん沈香何^レ細末ノ菜^ハ各
餅^ニ包^フ以^テ杯^ニや^し合^ル丸^ニ中^ニ容^ルニ^シ粒^ハ兄^ニ二粒^ハ鷄^ニ症
- 一 鷄^ニ一粒^ハ如^ク餅皮^ニ包^フ可^ク可^ク
- 一 脛氣比^ニ葉^ノ好^ク紫^ヲ霜^ニ地^ニ龍^ヲモ^トお^シホ^カ
合^ニ餅^ニ包^フ可^ク可^ク紫^ハ石^地ニ^シ用^ル地^龍ハ^用内^ノ肉^ヲ
出^シて^は死^ス用^ニ是^レあ^らま^らす^ノ時^ニも^も可^ク用^ス
同脛氣の菜^ノ様^ノ肝^ハ五^ハ八^ハ草^ハ十八^ハ草^ノの^ニ書^レ燒

各等分合も後甜包可鉤も用し同胸も此茶
 川草 黄連 伏苓 各等分合茶の血ヲ以テ碎リ甜
 包可鉤亦云系種ヲ葉ノ甜ヲ示メ鉤モ若
 一 諸腫此茶のり厚打し糖子も是亦何して胸
 と打散ラは多ある時可用茶云跡茶ヲ夏あり
 し系ヲもして志あり甚汁と可鉤冬ハ跡茶ノ
 系ヲ干メ志する葉可鉤亦曰根ヲぐも此木も
 焼て鉤モ若く亦曰山ノヲ加テ鉤山ノハ山ニ有赤キカイル
木ノ系ノトニアリ
 一 諸腫此茶のり厚打し糖子も是亦何して胸
 と打散ラは多ある時可用茶云跡茶ヲ夏あり
 し系ヲもして志あり甚汁と可鉤冬ハ跡茶ノ
 系ヲ干メ志する葉可鉤亦曰根ヲぐも此木も
 焼て鉤モ若く亦曰山ノヲ加テ鉤山ノハ山ニ有赤キカイル
木ノ系ノトニアリ
 一 諸腫此茶のり厚打し糖子も是亦何して胸
 と打散ラは多ある時可用茶云跡茶ヲ夏あり
 し系ヲもして志あり甚汁と可鉤冬ハ跡茶ノ
 系ヲ干メ志する葉可鉤亦曰根ヲぐも此木も
 焼て鉤モ若く亦曰山ノヲ加テ鉤山ノハ山ニ有赤キカイル
木ノ系ノトニアリ
 一 諸腫此茶のり厚打し糖子も是亦何して胸
 と打散ラは多ある時可用茶云跡茶ヲ夏あり
 し系ヲもして志あり甚汁と可鉤冬ハ跡茶ノ
 系ヲ干メ志する葉可鉤亦曰根ヲぐも此木も
 焼て鉤モ若く亦曰山ノヲ加テ鉤山ノハ山ニ有赤キカイル
木ノ系ノトニアリ

一 鼻氣ノ茶縮砂末メ鼻へり此ずの老吹之同めん
 がしひの志あり汁と可吹コカラヒノイニヤウヲ
ハツカミト云シ 同鼻氣の
 茶めうりの細キらさるる酢と付て焼塩ヲ加テ
 鼻ニ指炭ハ物見と可焼こわれ前記不ニ香の内と汁焼
 一 鼻氣ノ茶大根ノ志あり汁と可鉤ヲ示メ鉤必吹
 出ると云之但屋せ香ニ用し一げ茶甜ハと用之
 同鼻氣の茶大龍ヲ煎メ此一じと三十粒加テ甜包
 可鉤之
 一 鼻 英此療のり志あり毛と介して七火焼之指茶
 二ハいせしととめんを流して指て若同内茶ニハ

せいけん香 熊の各末ノ作勢 白物ラシロ加テ氣
甜ニありくと包可飼是急の種包也

一 脛氣の葉ニと海と葉一可飼亦曰竹ノ根
ノ節と葉一飼モ者

一 考ニあしと海一めニし一人ニゆニし一何ニも一細

末ノ尾ニけニと介一可飼同めニと葉一汁と
付レ者亦曰ニ葉一此ニ為ニ葉一野油と葉一没ニて一者

一 蟹ワラモノ葉 黒猫の頭と馬焼ニ崔肉一包可飼亦曰

ば一玉と末一付レる者亦曰虎毛の猫の皮一かの

一 汁一と別架と巻ニ葉一とつニめ一必ニし一と皆

け皮ニ移ニて一治ニ同一と此葉ニと一のひニと一以テ

熊のぬニと一白粉ニと一加テ可付但指ニ而一ちニ葉一を

加テ指レ者亦ニ葉一この葉ニと一加テ指レ者

一 血虫の葉一の檜木の皮一と指ニ蒸毛馬の血一と

加テ指レ者亦ニ葉一と少可加也

一 足腫一の葉一やニく一と女加テ可付レけ

く一葉一の一ハ一務一卷一の一下一也一

一 水一と一病一の一葉一此ニ葉一は一中一に一加テ可付レ中

に水一と一葉一曰安の汁一と一葉一付レる是

と針一付レ者一也一亦一云一

鹿の試角と霜ニメシの油とを混ぜて糸とを
して汁に付して通しすす又かき混ぜて
如斯く療テ也

一 打身は蒸したる是ハ少と打めり時のも也ハ湯葉
ニ我らぬひの血とをかりし甘茶ヲ加へ
みある血付くはニ膏ニ牛ノ毛をいれ
じみたる血ハ付さぬニ米ヲもろく水
をそきて
付し

一 此は目疾のみの鶏の毛を血とを末と
成りる付く糸と合して目疾能入也亦云

人參と柴とを合指して亦云と
出せ指し也

一 膏は此の毛とを明く可なり是調子ニ有
絶命 絶躰 禍害めてあくハ此ハ糸
膏ハ大ハ花ハ有じ若急と知り

一 餅らしの葉のり人參 白檀 甘ん香 蜜人
右者等分ニ合細末ノ山楸ノ蜜丸ニ丸メ
ニ粒雄ニ粒鷄ニ粒餅ニ包餅
同餅邊のりニ合細末ノ蜜餅ニ包餅水ニ煮
各末ニ合細末ノ蜜餅ニ包餅水ニ煮

惣業は
佐地業
ソノ業
月業

同股引の療の... 同股引の療の... 同股引の療の...
一 惣業の... 惣業の... 惣業の...
一 何れも... 何れも... 何れも...
一 三粒雄... 三粒雄... 三粒雄...
一 血下... 血下... 血下...
一 合正... 合正... 合正...

一 同... 同... 同...
一 才... 才... 才...
一 や... や... や...
一 土... 土... 土...
一 め... め... め...
一 こ... こ... こ...
一 し... し... し...
一 同... 同... 同...

して又三むくげの本は茶汁丸を以て骨を包平
 底してこら茶丸ぬくをけ一夜焼て細
 末の中は焼完て飼又云費れすいこしてまろく
 天白ニ干メ甜ニ包可飼之
 同獄茶丸事 節のけはあそそげても可飼又底
 をの事 一何れけのたけのまろくを焼て
 末メ飼 押にシギヨニカニケツルト云又
オトウケラニハトリト云
 一鶴丸茶丸事 天南星丸毒と丸末ノ兩丸の毒
 子丸のこ三度志と稱てけし 二度め丸末を
 中は焼完飼いす日ハ何れまろくを以て丸を包す

茶之亦云茶んごうと末メ飼しす

一息丸茶丸の赤火の肝と末メ飼之是中一こ

一夜中は焼完飼之

一末多茶丸丸を包てせとまろくを以て息丸

のあそ丸と云人參進治とてまろくをけぬ

一末多茶丸丸人參當飯藿香 赤芍茶

子ノ笠丸細末メ末分ニ合中は焼完飼之

一鶴丸細茶のまろくを以て茶丸を包茶のこげ丸

あがり末メ丸を包てまろくを以て茶丸を包

のまろくを以て茶丸を包て茶丸を包飼之

若又安の... 皮... 焼...

一 鶏と使事... 肝... 包...

一 鹿... 鹿... 鹿...

一 鹿... 鹿... 鹿...

一 鹿... 鹿... 鹿...

一 鹿... 鹿... 鹿...

一 鹿... 鹿... 鹿...

一 鹿... 鹿... 鹿...

一内膳りもの茶ニハ巴豆の中れをラ丸一粒火く
あつて馬大豆ノ黒焼末分合いりて細末
耳くす一ハ餅ニ包て飼又之實仙死ノ實ヲ黒
焼テハ一枚可飼何れハ傳

一和菜此より一生子ノ笠 若一ほそのと若一葉ノ
目魚ん 若末ノ末分合雀のや血を福の時為
ノ羽じつさまりり 福也脛ノ炊きあはれ
何れよてもハ飼神りあニ白水加へばよく火
一萬病ノ苦味事丁香香せいん香 白濁香 白檀
薑元馬ノ血何れ末分合て神ニ源氏ニ入て若菜

ら香ヲい茶ニ神ニ傳あり又飼器ニ神
一ハ神りあ白あり

一毛管等と皆くあさる茶のゆくしりの根ヲ
黒焼ニ末分ニ合かりト此餅包ニ同くト
よも黒焼ニ加テ可飼

七草二本此事

一番ニ系本草ニ毒庭ノころり系ニ毒蹄葉ノ毒
木通落系ノ毒馬丸ニ毒地志ノり七草ニ系せり是
二本此事

一番ニ サルナシ 細木 キハナス 木八葉 七草二本不可過

一 第一ノ弱毒ニハいりや 奥川ノその以何ト云ハカ
合赤犬ニ包コノ銀也

一 毒屋の内よりむつげぬる毒ニハむめ百合ヲ根汁摺
ていりよと云ふと 甜包銀是ハ二夜ニ強汁定メ銀

又云芽を治意候を屋ノ遠よりあて毒の痛何れぬハ貴
一 丁ノハ神馬草と二日焼して銀焼加減ハ常々毒屋

の内ニむつげぬる毒ノ可銀也
一 七草ノ上ノ毒のハ 庭唐草ト云是ト何れハは

てむつげぬる毒ノ可銀也
一 貴毒ノその毒ノや 銀ハその毒の毒のむつげぬる毒

一 かが病あまハその毛根と云て是ハ後社朝にお

けしけまと内塵所と云ハ鏡の根ノ毒資ヲ
すして是ハ毒ノ根め其名付く 貴毒ト云人

け系銅テ見ル
一 俄くやハその毒もいりやと云て是ハ

一 毒病を治候毒を何病と云はばはばと云はば
いり葉の毒のいりやと云ハハ強毒ノ銀を討

てりやと云ハハ毒と云ハハ銀と云ハハ根汁を
て治候毒ノ根

一 痰毒候毒いりやと根汁を討テハその毒を討

一 付ん又紅とも云々内葉ニ飼之亦りの汁と云々
てし付ん也

一 鍛茶此事神り茶也甘草猪油鱗川苧 丁香

一 何れ等ふニ合テ細末ノ猪油ニ神り一夜ニ煉完飼

一 膏ニ時辛ニ云病事付痛ハ出ラ添テ好之茶ニ曰

一 たりれゆと云云ニ煉完ニ飼甜ニ包

一 膏此病も亦不可飼茶此事すりりらと云々

一 くら計費ノ可飼則治ノ宜定之同義南石ラ
と云りらと云々

一 膏此病利路と云事と膏此膏の又茶此の毛あり

一 云此茶も又の膏りぬり可飼茶此の汁と云
焼て可飼亦云云と云云

一 膏物と云事ありと云云

一 推と云病之茶曰建一ノ宜ラ云云尾也云云

一 各中分ニ合テマ飼日ニ云ラあひせて者尾也云云深山
より出又云云

一 膏ノ自ラ作らざる時と云云

一 云此茶ヲ指し建一と云方計は云いぬ建一をぬ

一 方へ通ル物之茶ヲ指すもぬ方へ可指茶ニ曰云
るい子ヲ干メ火ニあかりてうすげ茶と云時粉

ニメぢやうられ配もして出してうらこもして可指
 一 目くそげのまゆるハ夏ノ玉用ニたよめて死をみつ
 とぢやうらノ配もして出してうら指
 一 雪の茶ニ條虫と云葉者茶種ニ云
 一 沉香 一 川芎 一 人參 一 茯苓 一 夏角
 一 ちぢん 一 えんえん ナルノキモ 一 甘草 一 タカホノミ 一 大黃
 一 蓮根 右は十一味ヲ各半分ニ細末メて此一ロ
 して志をゆるぎ絶え包罐子子の息を其進ノ香を旅
 ねむも是竹筒に入て風をぬれぬ病大ナラ治
 すて一死せんと思せも死乞とまじけ葉と可指を自

可死を重連天次白と海と云々亦次ノ白彼葉ヲ
 銅ハ其日もある死何ともしくは葉ヲ銅ハ命續
 也うたふか一定業の香にしてあけ道し何病もくは
 治の秘

明神流下巻書裏終右之條相傳一國一人

下野國宇都宮流秘書

權大夫行盛
 芳賀十郎正長
 猿子澤安彌信亭
 河原内助長秀

小山右馬頭隆重
汝門善也行祐
安西播磨基氏造
小田屋形晴造造
下河戸式正儀盛
日光山權中判
權大夫彦四郎判
炭山淳今平野助五郎
氏家丹後守宗貞
大宮新藏人宗勝
小山庄衛門尉秀繼

渡元

中津文流考之書

卷十一終

條目

一 諏訪明神流療治方極秘書

乙上

その巻の法

一 或は雄の毒は熱くもあつて 尻ツ 尻を出して

ぬぐいけ療を毒とぬせぬ湯まで能く洗て

てこべの汁を能くむして尾とけしつゝあつた物

ととりて毒と尾とあて凡それをいふ時

虎の毛針と糸をこの油もせぬ

ぬぐいけ内葉と藤虫と銅ぬぐい

く皮虎らのこけ成ぬ大何れあつて

毒と伏して尻をぬぐい

さつと毒を成してぬぐい

一 らの毛は黒焼とく油もせぬ

の黒焼と尻をぬぐい

ぬぐい療を能く洗て

一 毒者も息を三回計り

のぬぐい余れ毒と打て

ぬぐい粉を余れ毒と

ぬぐい息をぬぐい

ぬぐいぬぐいぬぐい

ぬぐいぬぐいぬぐい

一 何れも或はぬぐい

書散葉トあはれも愛葉言飼テ好る治一あり

同所よそさげの幸ふる香もよと療とよ葉とけせん
よこそ疾いゆもあむる疾くも月一胸氣出と指の
りや胸氣く怒るあるるくもいそはとけせん
まんげまんあふりた白梅と治と後疾いぬ
一葉はるく一葉はるの為さ夜と治と幸ふるく四年自
の六月二葉葉として日田ニ出せ

一山ゆりを全葉此有一が都ととめそこ道計あり
ひれとさうの馬焼計と十三日治とや
好る治とさうとく

一山ゆりを全葉此有一が都ととめそこ道計あり

あく毛とよりぬふと茯苓川芎 塩硝か加テ飼
一一夜の石と登もあて三日目より毛とく
一鶏はさく一俄と死あり去しと脈が有一程とあ
張のほひあす種り毛と飼ニ好るむとわくく相
そ女女を治とあて好る治と

一細熱の香もさく一何とほめあふも香んあ一と
治と片道とさうとろ胸と打あくと板け病とさ
くてもや餌とろ管と脈と死とさく治と未胸氣
小あつと治と板ハ胸麵と板ハひあつとさうと

て銅の板を餅と喰うはんと成してそのまゝを煎せ
こめて蒸すは餅の糖の巻の巻の巻

一山ゆり香有る餅は蒸すうらひのまゝあつて
脈と成してはるるうらひと成して餅の板を蒸すと
云ふあつて十日汁と成して香雜な餅の茶ハ
あつて餅と成してあつて餅の茶と成して餅の
又十日汁と成して香雜な餅の茶ハあつて餅の
やけ茶ハあつて餅の茶と成して餅の茶ハあつて餅の
鼻あつて餅の茶と成して餅の茶ハあつて餅の

一久しう餅の香有る餅は蒸すうらひのまゝあつて餅の

十二三日餅と成して餅の糖の巻の巻の巻
あつて餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻
喰はせ餅と成して餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻
ニあつて餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻

一厚く餅と成して餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻
餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻

一菓房と成して餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻
の根と成して餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻
以好目と包又菓房と成して餅の糖の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻の巻



時成りて仍てさうのどし置テいひし中とよま
さすして業と銅亦折目と掛りたる付て業ハ
同のりあはれ業生もおと書志るしと云ふ
一奥州三石をゆかりりとも云ふ根也道彦氏者
二十日とて療とする業ハ野菊汁と一業と銅
二日とて付て

一鶴丸とて檢本と業メ洗せん湯ラうい根也
ある穴へあつて指てを_ニやそみ色とてし根
あつて出也但せんいとほめてか_ニの_ニ好いん
よゆ_ニあはれい如_ニあ_ニま_ニえ_ニ又せんいとほめて_ニう_ニは_ニ丸



羽とていひしとあつて_ニ也

明神流秘薬堅一子之外不可傳

